奈良国立文化財研究所年報

1997-I

ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties
Research Institute 1997-I

奈良国立文化財研究所

マグェ省イラワジ河右岸のセイシーチョウンの調査

ミャンマーの寺院セイシーチョウン（19世紀）には、僧院の柱と貫が残っている。柱は332本あり、ビルマ最大の規模をほこった。ミャンマーは、高温多雨の気候のため、木造建造物が傷みやすい。この僧院も洪水による損傷が大きかったという。古い仏塔の調査においても、周囲に存在したであろう木造建造物に注意をはらう必要がある。本文47ページ参照（撮影／森本　晋）

中国遼寧省・ラマトン墓地出土遺物の保存研究

ラマトン遺跡は、大凌河北岸の丘陵斜面に形成された3世紀末～4世紀代の鮮卑族の墓地。近年の調査で、金属器が多量に発見された。武器・武具・馬具などは、韓国・日本の出土品と密接に関係しており、今後の研究が期待される。写真は鮮卑族特有の鹿の飾り物で、韓国・日本には類似製品が及んでいない。本文46ページ参照（撮影／佃　幹雄）

1996年度のおもな調査と研究

バンテアイ・クデイでの発掘調査
上智大学と共同で、カンボジアのバンテアイ・クデイ寺院を発掘調査している。バンテアイ・クデイは、アンコール・ワットの北西4kmにある12世紀末の寺院。写真奥に映る前柱殿南側のラテライト積み建物の基壇を調整中。本文47ページ参照（撮影／杉山　洋）

スラ・スラン西岸でのレーダー探査
バンテアイ・クデイ東側のスラ・スラン西岸で、レーダー探査をおこなった。中央の人物がレーダー本体を牽引し、左側の人物が手にもつ装置で制御とデータ蓄積をおこなう。東西にレーダーを走査し、西岸に沿う石組みの溝を確認した。本文40ページ参照（撮影／杉山　洋）

黍田15号墳出土の双龍環頭大刀

韓国加耶地方の環頭大刀をまねて造った日本（倭）製の金銅大刀。倭製環頭大刀としては上質の部類に属し、6世紀末の製品。とくに銀板に打ち出し文様を施した鞘口金具の例は全国的に珍しい。保存処理に際しては、大刀の製作工程をわかりやすくするため、あえて柄木を復原せず、出土状態を保存するために最善の努力を費やした。左：出土状況、中：処理後（佩表）、右：処理後（佩裏）。本文8ページ参照（撮影／牛嶋　茂）

山田寺東回廊再現
山田寺第４～６次調査で出土した回廊の建築部材は、14年の歳月をかけて、ようやくPEGによる保存処理が完了した。飛鳥資料館第２展示室では、柱間３間分の部材を、当時の構造と規模がわかるように再現展示した。山田寺東回廊は木造寺院建築の現存する最古の実例となる。
本文65ページ参照（撮影／井上直夫）

高御座の1/10模型
平城宮第１次大極殿1/10模型の内部に設置する高御座の復原模型。平成度即位式に使われた現存高御座を基本資料としつつ、文献史料からの検討をくわえ、さらに古代建造物や正倉院宝物などを参考にして、奈良時代の高御座を復原設計した。
本文22ページ参照（撮影／佃　幹雄）

建設中の朱雀門初重屋根
平城宮朱雀門の初重屋根、野垂木を組み立てているところ。野隅木の奥にみえる樹皮のついたままの丸太は、軒の垂れ下がりを防ぐための桔木（構造補強材）である。本文60ページ参照（撮影／春日井道彦）

建設中の東院庭園平橋
平城宮東院庭園の園池にはりだす中央建物から東の対岸に平橋がかかる。写真は塗装前で、親柱の擬宝珠（黒漆塗りの焼き物）もまだとりつけていない段階。本文61ページ参照（撮影／西山和宏）

『奈良国立文化財研究所年報』の再出発にあたって

装いを新たにした３分冊構成の『奈良国立文化財研究所年報』をお届けします。

奈良国立文化財研究所は、文化財を調査研究し、その成果を公表する機関として、1952年に設立され、その調査研究の成果は、設立直後の1954年以降、『奈良国立文化財研究所学報』や『奈良国立文化財研究所史料』、春と秋の公開講演会、発掘調査の現地説明会と発掘調査概報、その他各種の出版や催しものの開催などによって、公表、普及に努めてきました。

『奈良国立文化財研究所年報』は、やや遅れましたが、1959年に発刊しました。一般にみられる年報は業務報告と要綱などを主としたものでしたが、研究機関の年報では調査研究成果の速報が中心となるべきだ、と先輩諸氏は考え、それをめざすものとして発刊したのです。今では入手できない最初の20年分に近い年報が復刻されたことがありましたが、それはかって刊行した年報が今なお研究資料として活用されているからでしょう。

最初の年報の発刊後40年近くが経過しました。その間に平城宮跡や藤原宮跡、飛鳥地域の発掘調査も大規模になり、年報でもその成果の概報部分が増加しました。そのために、発掘調査とならんで多面的に展開している調査研究に関する速報部分が十分でない傾向は否めませんでした。一方、発掘調査の概報は毎年別に刊行しており、年報掲載分とかなり重複するところもあって、整理が必要となっていました。

新装の『奈良国立文化財研究所年報』では、第１分冊は発掘調査以外の文化財に関する多様な調査研究の成果の速報を中心に研究所の要綱をあわせて構成し、発掘調査成果の概報は第２・３分冊にまとめることとしました。

『奈良国立文化財研究所年報』は再出発します。これでその年度に実施した調査研究のすべてが網羅できるものではありませんが、その主要な成果については速報できるとみています。ご一読ください。そして、われわれの奈良国立文化財研究所の活動について、忌憚のないご意見をお寄せいただくことを願っております。

奈良国立文化財研究所
所長　田中　琢

1997年９月30日

目　次

『奈良国立文化財研究所年報』の再出発にあたって

I　調査研究報告　3

II　事業の概要　41

1 調査と研究

2 研修・指導と教育

3 遺跡整備・復原事業と展示

奈良国立文化財研究所要綱　67

凡　例

1　年報は、1996年度に奈良国立文化財研究所がおこなった調査・研究・事業の報告である。

2　年報は全体で3分冊より構成されており、年報IIには飛鳥藤原宮跡発掘調査部がおこなった発掘調査の報告を、年報IIIには平城宮跡発掘調査部がおこなった発掘調査の報告を掲載している。そして年報Iには、両調査部の発掘調査報告をのぞく各種の調査・研究・事業を収録した。

3　執筆者は各項に明記したが、執筆者のないものについては、担当部局の協力を得て、編集者がまとめた。

4　年報I・II・IIIでは、いずれも当研究所の刊行物について、以下の略号を用いた。

『奈良国立文化財研究所年報1995』→『年報1995』

『飛鳥・藤原宮発掘調査報告III』→『藤原報告III』

『平城宮発掘調査報告X』→『平城報告X』

『飛鳥・藤原宮発掘調査概報25』→『藤原概報25』

『昭和60年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』→『昭60平城概報』

『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報10』→『藤原木簡概報10』

『平城宮発掘調査出土木簡概報30』→『平城木簡概報30』

5　年報の装幀は柴永文夫氏による。編集・レイアウトについては、財団法人千里文化財団出版部・柴永事務所が協力した。

6　年報Iの編集は浅川滋男・寺崎保広、年報IIの編集は千田剛道、年報IIIの編集は加藤真二が担当した。

奈良国立文化財研究所年報　1997-I

発行日 —— 1997年9月30日

編集発行 —— 奈良国立文化財研究所

〒630　奈良市二条町2-9-1　TEL.0742-34-3931

印刷 —— 関西プロセス

ANNUAL BULLETIN
of Nara National Cultural Properties Research Institute
1997-I

CONTENTS

I Research Reports

- Dendrochronology of the large-sized building with pillars embedded directly in the ground at *Ikegami-Sone* Site
- Burnt pit dwellings excavated from *Goshono* Site in Jomon middle period
- Ring-pommeled sword decorated with twin dragons excavated from *Kibita* mounded tomb
- A tile with whirl motif from *Kawara-dera* Temple site
- Rethinking the pottery excavated from SE800 at *Ishigami* Site
- Study on eave tiles of *Asuka-dera* Temple Site made by the same mould
- Research on eave tiles made by the same mould in the medieval period
- Green glazed tile from *Yamanouchi* historical materials and its constituent
- Supplement to the wooden tablet inscribed "OONIE -大贄-" in ink from *Fujiwara* Palace Site
- Pieces of paper bearing ink characters permeated with lacquer from the peripheral area of east market in *Nara* Capital Site
- Study on three-stepped bracket complex of the Japanese ancient architectures
- Historical investigation and restoration of the Imperial throne
- Interpretation of the structural remains and restoration of west building in East Precinct of *Nara* Palace Site
- Excavated Garden Sites - examples of Tumulus period and Asuka period-
- Survey of the *Tekisui* Garden (Kyoto) and *Yousui* Garden (Wakayama)
- Survey of the Customed Houses in *Shiga* Prefecture
- Subject for the study of "Cultural Landscape"
- Application of Soil Micromorphology in Archaeology
- What to find by geophysical prospecting
- Trial development about the system of computer aided excavation surveying and site database
- Convert the dry photographic plate of architectures into digital data
- Culture at the late stage of Paleolithic period in middle and south China
- Reproduction of color and ancient wall paintings - Joint research on the wall paintings of Chinese mounded tomb with China -
- Collaboration in the Restoration of *Angkor* Cultural Heritage

II Brief Introduction of Activities

2-1 Researches and Investigations

Excavations of the *Asuka-Fujiwara* Capital Sites
Excavations of the *Nara* Capital Sites
Researches and Investigations of the historical architectures
Investigations on the historical documents
Research activities of Center for Archaeological Operations
International study co-operation
Brief Report on Research Tours Abroad
Public Lectures in 1996
Symposiums
Studies subsidized by the ministry of Education
Academic activities of learned societies and seminars, etc.
Miscellaneous Research News

2-2 Training course, Instruction and Education

Training course and instruction by Center for Archaeological Operations
Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

2-3 Restoration and Reconstruction of the sites and Exhibition

Restoration of the *Nara* and *Fujiwara* Palace Sites
Special Exhibition at the Asuka Historical Museum and Reconstruction of the cloister excavated from *Yamada-dera* temple site

The Outline of Nara National Cultural Properties Research Institute

I 調査研究報告

池上曽根遺跡の大型掘立柱建物の年輪年代 4
御所野遺跡で出土した縄文時代中期の焼失竪穴住居群 6
黍田15号墳出土双龍環頭大刀 8
川原寺出土の渦文塼 9
石神遺跡SE800出土土器の再検討 10
飛鳥寺同笵瓦二題 12
中世の同笵軒瓦の調査 14
山内資料の緑釉塼とその成分 16
藤原宮出土「大贄」木簡補遺 18
平城京東市周辺ほか出土の漆紙文書 19
古代建築における三手先組物について 20
高御座の考証と復原 22
平城宮東院西建物の遺構解釈と復原設計 24
発掘された庭園遺跡　古墳時代～飛鳥時代の出土例 26
養翠園・滴翠園の調査 28
滋賀県の近世民家 30
「文化的景観」研究の課題 32
土壌微細形態学の利用 33
遺跡探査で何がわかるか 34
発掘調査支援機械システムの試作研究 35
文化財建造物写真ガラス乾板のデジタル・データ化 36
華中・華北の後期旧石器文化 37
古代壁画の色と再現　中国古墳壁画の調査・保存に関する中日共同研究 38
アンコール遺跡群の調査 40

Ⅰ 調査研究報告

池上曽根遺跡の大型掘立柱建物の年輪年代

大阪府和泉市と泉大津市にかけて所在する池上曽根遺跡は、わが国でも有数の弥生時代の環濠集落である。1976年には遺跡の中心部約11万㎡が国史跡に指定された。1990年からは、「史跡池上曽根遺跡整備委員会」が設置され、史跡整備にむけての発掘調査がはじまった。一連の調査のなかでもとくに注目されたのは、1995年に遺跡中心部において検出された弥生時代中期後半の大型掘立柱建物と、この建物中央部南側にある大型刳り抜き井戸の発見であった。

大型掘立柱建物の柱根　大型掘立柱建物は、桁行10間(約19.2m)、梁間1間（約6.9m)、床面積約132㎡の東西棟で、これに独立した棟持柱が東西両妻側に1本ずつ、また屋内棟持柱が2本たつ構造のもので、弥生時代中期後半のものとしては最大級の規模を誇る。総数26基の柱穴には、直径60～70cmの柱根が総数17本遺存していた。材種はヒノキ材が15本、ケヤキ材が2本であった。これらのなかから、遺存状態の良好なヒノキの柱根を5本選定し、年代測定をおこなった。5本のうち1本は北柱列から（柱番号4)、他の4本は南柱列からのものである（柱番号12、16、17、20)。これらのなかで柱12と柱20には辺材部が残存していた。とくに柱12の柱根には、辺材部が完存しており、Aタイプのものと判断した。残る3本はCタイプのものであった。

表1　柱根5本の年代測定結果一覧表

柱No.	柱列	材・種	年輪数	年代	形状
4	北	ヒノキ	184	93B.C.	C
12	南	ヒノキ	248	52B.C.	A
16	南	ヒノキ	358	113B.C.	C
17	南	ヒノキ	253	113B.C.	C
20	南	ヒノキ	252	56B.C.	B

柱12の伐採年は紀元前52年と確定　5本の年代測定の結果は、表1に示したとおりである。得られた結果のなかでもっとも重要な年輪年代は、柱12の年代値である。これは、樹皮を剝いだだけの形状のものであるから、柱12の年輪年代は伐採年代を示している。つまり、柱12は紀元前52年に伐採されたものであることが確定した。ここで、柱12についてみると、伐採時に穿ったと思われる筏穴が完存していることや、下部底面を新たに切断したような痕跡もないことなどから推して、転用や再利用材とは考えにくい柱材と思われる。また、この柱材が伐採後、すぐ使われることなく、長年にわたって放置されていたとは考えにくい。これらの点を考慮すると、大型掘立柱建物の創建年代は紀元前52年を上限にして、その直後が考えられる。さらに、辺材部を有する柱20の年輪年代は紀元前56年で、柱12にきわめて近い年代値が得られており、失われたであろう若干の年輪層数を推算すると、これまた柱12と同様の伐採年代が想定できる。

柱12の伐採年代確定の意義　弥生時代を例にとると、遺跡、遺構の年代決定は、おもに土器の様式編年によっている。近畿では、唐古遺跡出土の土器を基準に5様式に分類、弥生時代前期を第Ⅰ様式、中期を第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ様式、後期を第Ⅴ様式とする時期区分を設定している。これに従うと、上記の大型掘立柱建物の柱穴の掘形埋土内出土の土器は弥生時代中期後半のもので、多くの研究者は実年代で西暦1世紀後半頃と推定していた。ところが、

大型掘立柱建物の平面図及び柱穴断面図　1：300
（和泉市教育委員会提供）

→大型掘立柱建物を描いたと思われる土器絵画
（池上曽根遺跡出土）

柱12の伐採年代はこれよりも約100年古く遡った年代が得られた。この建物がほぼこの頃に建てられたとすると、近畿における弥生土器編年の１点に実年代が与えられたことになる。このことは、これまで北部九州が近畿より先行していたとされる時代関係の見直しや弥生前期、後期、古墳時代のはじまりなどの見直し論にも一石を投じたことになる。さらに、柱12の伐採年代が確定したことにより、この頃の日本の文化と世界の古代文化を共通の時間軸で比較することが可能になってきた。たとえば、エジプトに目をむけてみると、クレオパトラが女王の座についたのが紀元前51年であるから、大型掘立柱建物はまさにこの頃のものなのである。

他の事例　滋賀県守山市にある二ノ畦・横枕遺跡は弥生時代の環濠集落である。発掘の結果、ヒノキやスギを使った井桁式の井戸２基（A、B）が発見された。そして、井戸Aは紀元前97年、井戸Bは紀元前60年にそれぞれ伐採した材であることが判明した。井戸内の埋土や木枠内の裏込め土からは、第Ⅳ様式後半の土器が出土しているという。弥生時代中期後半の年代が約100年遡る可能性が高くなった。　（光谷拓実／埋蔵文化財センター）

大型掘立柱建物の柱根12（写真）とその年輪パターングラフ
（黒：標準パターングラフ、赤：柱根12）

御所野遺跡で出土した縄文時代中期の焼失竪穴住居群

昨年、岩手県一戸町の御所野遺跡で、保存状況の良好な縄文時代中期の焼失竪穴住居址が８棟出土した。竪穴の上部構造を復原しうる縄文時代の焼失住居址はきわめてまれであり、筆者らが実測した住居址DE24住を中心に出土状況を報告し、あわせてその復原案を示してみたい。

環状集落の構造　御所野遺跡は今から4500年ほど前に誕生し、500～600年存続した縄文時代中期後半の大規模な集落遺跡である。集落は標高200ｍほどの細長い台地（65000㎡）上に営まれている。台地から一段低い西側段丘面にある馬場平遺跡との関係は緊密で、御所野と馬場平は一体化した居住領域として、Ⅰ（円筒上層ｃ式）～Ⅴ（大木９式）期の変遷をとげた。集落はⅢ期（大木８ｂ式）から大きく変化し、墓域中心の環状集落が成立する。二つの環状列石が東西にならぶ墓域は、台地中央部北側の低い平坦面に位置する。この広場＝墓域を中心に、集落内の建物は環状もしくは扇状に配列する。環状列石および墓壙群の外周域で、柱穴が80個検出され、少なくとも３棟の掘立柱建物が確認された。これらの掘立柱建物は、いずれも桁行２間×梁間１間である。この掘立柱建物群の外側には、竪穴住居が３地区にわかれて数百棟分布する。

住居群のパターン　馬場平では41棟の竪穴住居がまとまって発掘され、住居群の構成パターンがほぼあきらかになっている。竪穴住居は長軸12ｍ以上の大型、一辺３～６ｍの中型、一辺３ｍ以下の小型に分かれ、Ⅱ～Ⅲ期の段階で、大型住居１棟、中型住居３～４棟、小型住居１～４棟がセットになっていた。ただし、一つの大型住居を核とする住居群は必ずしもすべてが共存したわけでなく、中・小型の建替えは大型よりも頻繁だったろう。これについても、昨夏の御所野西区における発掘（1700㎡）が良好なデータを提供した。発掘された20棟の竪穴住居はⅡ期以降、少なくとも４段階の変遷をとげており、出土土器が同時期で、なおかつ焼失状況の近似するⅤ期（約4000年前）の５棟の建物が同時存在した可能性はきわめて高い。５棟のうちDF22住がやや小振りの大型、DE18住とDE24住が中型、DH28住とDG26-01住が小型に相当する。都出比呂志の用語を借用するならば、１棟の竪穴は「消費単位」、住居群全体は「世帯共同体」と対応する可能性があるだろう。

焼失住居の出土状況　Ⅴ期に共存した５棟の住居址のうち、ここでは中型のDE24住と大型のDF22住をとりあげる。なお、炭化材はいずれもクリである。

DF22住：南北8.2×東西6.8ｍの南北に長い楕円形平面で、南壁がやや直線的になる。竪穴の深さは60～70㎝。南壁に近い位置に石囲炉があり、石囲炉と南壁のあいだの床面を一段低く掘りこんで、両側に石を埋めこむ。竪穴の埋土のうち、黄褐色土を含む褐色土が壁際から大量に流れ込んでおり、周堤と屋根土がそのまま崩壊したも

御所野遺跡ＤＦ22住土層断面図　1：125

御所野遺跡西区の遺構全体図（現地説明会資料1996をリライト）　1：750

ＤＥ24住　遺構平面図　1：100

御所野遺跡ＤＥ24住

御所野遺跡ＤＥ24住　南北方向復原断面図　1：90

御所野遺跡ＤＥ24住　復原パース

のと考えられる。ところが、石囲炉の周辺では、屋根の葺き土と推定される土層が径1.5ｍほど円形に途切れている。天窓の痕跡とみてよかろう。主柱穴は７ヶ所で確認されており、入口は石囲炉にちかい南壁側と推定され、墓域＝広場を指向している。炭化材は竪穴のほぼ全域から出土しているが、なかでも壁の深い南壁から西壁の壁際にかけて、厚さ３～５㎝の板状の割材が直立したまま連続し、縦に打ちこんだ杭も内側にやや崩れた状態で残っていた。これらの壁板と側壁の境に、棒状の横材をとどめる部分があり、これは堰板・杭をとめる繋ぎ材か、周堤につきさした垂木を承ける軒桁のどちらかであろう。一方、竪穴中央の床上には、炭化した小枝の破片が面状にひろがる。このもやもやとした炭化物層は、屋根の葺き土層と垂木状の棒材の間にくいこんでおり、土屋根の下地と推定される。このほか梁・桁と推定される太めの材が柱穴を結ぶ位置にみとめられる。

DE24住：斜面下にある東壁は削平され残存しない。平面は円形に近く、南北が4.4ｍ、東西は残存部で3.8ｍの小さめの中型住居である。南壁よりに石囲炉があり、やはり炉から南壁にかけて幅60～70㎝の掘込みをともなう。広場の方位と一致する南壁側に入口を設けたのであろう。竪穴は浅く、最も深い西側でも30㎝あまり。屋根の葺き土と推定される埋土の第３層（最下層）は、黒褐色土に白色粘土・褐色土が混入した硬い土で、その下から多量の炭化材が出土した。葺き土の厚さは場所によって異なるが、中央部で10～15㎝ほどである。炭化材は南～西の壁際でよく残る。中央部で炭化材が少ないのは、天窓の存在により、火が中央に集中した可能性があり、葺き土の上面で確認された焼土層も中央部分が勢いよく焼けて崩落した結果とみなせよう。炭化材のなかで注目されるのは、直立して残存していた４本の柱材（径15㎝）である。このほか２ヶ所で主柱穴が確認されており、柱配置は６角形をなす。竪穴の中心にむかって倒れた垂木もしくはサス状の材、あるいは梁・桁状の材も確認できる。

土饅頭形の竪穴住居　建築構造について整理しておく。

①周堤と堰板：周堤そのものはみつかっていないが、竪穴埋土にその崩壊土らしい土層が確認されている。かりに周堤が存在しないならば、竪穴壁際の外周域で垂木の挿込み痕跡が検出されるはずであり、それが確認されないということは、周堤が存在した傍証となる。DF22住においては、壁際に板状の割材が直立した状態で確認され、DE24住でも同様の状況が確認されている。さらに壁際には、杭状の材や竪穴の壁際にならぶ横材も確認されている。杭状の材で横材をつなぎ、竪穴側壁の堰板となる板状の割材が内側に倒れるのを防いだのだろう。

②軸組と小屋組：大型・中型住居においては、柱は楕円形平面に対応し多角形配列をとる。柱穴の頂部を横架材で繋ぎ、垂木もしくはサス状の材を求心的に配列している。柱上を通る材は垂木よりも太く、隅木的な機能を果たしたものと思われる。棟木の有無は不明。

③葺き土と屋根下地：クリの枝を厚く敷いて土屋根の下地としている。この場合、垂木のピッチは草葺きと変わらず密にはならない。

④天窓：DF22住の石囲炉上面において、天窓の痕跡が土層中に確認されたのは画期的なことである。DE24住の焼けかたも、天窓の存在を暗示する。そもそも土葺き住居の場合、屋内の密封性が著しく、煙出し用の天窓を設けないと、そのなかで生活することは不可能であろう。

⑤石囲炉と入口：石囲炉は広場のほうに偏向し、壁と炉の間を一段低く掘りこむ。この掘込み部分は床面の湿気抜きを兼ねた調理場・作業場だったのではないだろうか。この炉端の掘込部分に接して入口を設ける。

以上の考察をもとに、DE24住の復原案を考えてみた。柱や周堤の高さは不明だが、梁を人間の頭にふれない程度の高さでおさめ、土葺きに適当な屋根勾配を想定することによって、おおよそのスケールを把握することが可能だろう。入口と天窓の詳細は不明だが、樺太ニブヒの土葺き竪穴住居の簀子天窓や扉を参考に図示してみた。

（浅川滋男・西山和宏／平城宮跡発掘調査部）

黍田15号墳出土双龍環頭大刀

兵庫県揖保郡揖保川町の黍田古墳群は、山陽本線竜野駅の南西約1.3kmの丘陵上に立地する。揖保川町教育委員会が平成７年３月に実施した15号墳の発掘調査で全長約６ｍの片袖式横穴式石室から、双龍環頭大刀・金環・ガラス玉・鉄鏃・刀子・須恵器・土師器、羨道部から須恵器が出土した。同年９月に、保存法の検討のため奈文研にこの双龍環頭大刀が持ち込まれ、材質分析・Ｘ線観察・実測・写真撮影をおこなった（口絵参照）。

環頭大刀は、玄門付近で、切先を奥壁に向け佩裏を上にした状態で出土した。柄頭部分は折れ、鞘の先端は欠損していた。柄頭は長さ13.5cm、環の長径10.7cm。銅の鋳造製品で、環と環内の龍は別々に鋳造されている。龍の下部に枘を作りだし、環体下部の凹部にはめて鑞付けしたらしい。龍は２匹が向き合い１つの玉を噛む。頭・背の冠毛・角を３本の突起で表現し、目の部分には小孔をあける。顎ひげは口の下の突起で表現する。環の文様は、本来龍の全身を表現したものだが、本例ではまったく崩れており、わずかに足を表現した痕跡がみられるにすぎない。環・龍ともに全体を刻目で装飾する。環と龍を結合後鍍金（Au5Hgに同定）するが、茎（Cu：99.6％，Ag：0.1％，Fe：0.1％）には鍍金していない。茎があたる部分を彫りくぼめた合わせの柄木で茎をはさみ、目釘で留める。鉄刀の茎とは直接結合しない。柄木の上部は舌状に環の下部に被さる。柄木上端に銀板（Ag：97％，Au:0.5％，Pb:0.3％，Cu:2％，Fe:0.5％）を被せ、さらに背・刃側をＵ字状に切り込んだ金銅製責金具をはめて、柄木が直接みえないようにする。責金具は４本の沈線で文様帯を区画し、１つおきに刻み目を施す。出土時の記録によれば、やや下に同様の装飾をもつ責金具がある。おそらく両責金具の間に、筒金具を装着し、責金具で留めていたのであろうと考えられた。柄間には紐を模した刻み目のある薄い銀線（銀板や銀線はほぼ同じ組成を示す。銀黒色に見えるのはAgClが形成しているためである）が巻かれる。柄元には長径4.1cmの銀製八角形喰出鐔が装着される。鎺が一体に作られ、その端部を鉄刀の関で止めて固定する。柄木は鎺まで挿入されているらしい。鞘は１対の鞘木を合わせて作り、全体を装飾用の金具がおおう。鞘口には銀製筒金具をはめ、両端を金銅製責金具で留める。筒金具は背側のみを断面台形状に面取りする。表面には打出しで植物文を施す。刃側の責金具からさらに19.3cmのところにもう１つ責金具がある。この間に佩裏から金銅板を巻き、佩表にはその上にさらに円形浮文と列点文を施した金銅製伏板を鋲留する。金具の佩裏側はほとんど破損し、装飾の有無は不明。ここから鞘尻までは欠損する。鞘の責金具は柄のものと同様で、沈線と刻目を施す。ただし、本例の鞘尻側の２つの責金具は、本来円形の吊手金具を鑞付けした足金物であった可能性が高い。また、鞘の金銅製金具は、鍍金の色が柄よりかなり白っぽく、銀を混合し色調を変えたらしい。鉄刀本体は平棟平造りで浅い両関を持ち、茎尻は栗尻で付近に目釘孔が１ヶ所あく。茎長13.7cm、身幅3.3cm。

本例と共通する刀装具が良く遺存している京都府湯舟坂２号墳出土品と本例を比較すると、環の長径はほぼ同じで、円形浮文金具は本例の方が長い。湯舟坂２号墳例は全長約120cm程度と推定されている。本例も大差ない寸法が考えられ、環頭大刀の中では大型の部類にはいる。新納泉の装飾付大刀編年を参考にすると、環頭や他の刀装具の特徴は上記した湯舟坂２号墳や千葉県金鈴塚古墳石室Ｄ区出土例との共通点が多く、新納の双龍環頭Ⅲ式に比定できる。ただし、双龍環頭Ⅲ式では龍の冠毛・角を４本の突起で表現するのが一般的で、本例の３本の突起による表現は後出的な要素であるので、その中でもⅣ式に近い時期になる可能性がある。双龍環頭Ⅲ式の年代は須恵器田辺編年のTK209式併行期に含まれる。実年代については、研究者により相違があるが、おおまかには６世紀末を前後する時期となる。群集墳のうち、比較的大きな墓に儀杖大刀を副葬する傾向があり、中小豪族が倭の朝廷に服属する一つの証拠である。

今回、顕微鏡観察・Ｘ線透過・材質調査等を加え、環頭大刀を細部まで観察できたのは重要な成果であった。従来、この種の装飾付大刀は内部観察が困難なため、細部の造りが不明なものが多い。そのため、装飾付大刀の系統差や、刀身と刀装の変化の対応について、なお検討すべき点が残されている。本例のような観察例が増加することが期待される。

（肥塚隆保／埋蔵文化財センター、臼杵　勲・町田　章／平城宮跡発掘調査部）

川原寺出土の渦文塼

1957年におこなわれた川原寺の第１次調査において、東回廊南端東側の包含層から出土した緑釉水波文塼は、わが国における施釉技術の開始をつげる資料のひとつとして知られている。この時の調査で出土した、もう１片の文様塼について報告する。

渦文塼の観察　塔に対面する東回廊の南から５間目の基壇付近から出土したものである。10.5cm×6.5cm程の破片で、各辺の全長を知ることはできないが、２辺は直角に交わり方塼とみてよい。厚さは縁辺で1.1cm、中央に向かって次第に厚味を増す。側縁はほぼ垂直になり、断面が梯形をなすものではない。胎土は乳白色を呈し、精良。やや軟質の焼き上がりである。本来緑釉が施されていたものと考えられるが、剝落が著しく確認ができない。表面の渦文は、幅２mm、深さ１mm前後、断面U字状の沈線で４条の同心円弧を描く。裏面は図の左右方向に軽いケズリを加え、側縁に沿って狭い面取りをおこなう。釘穴等の穿孔、刻書・墨書は認められない。

川原寺の緑釉塼　川原寺で使用されていた緑釉塼には、大きく二者がある。ひとつは冒頭に述べたもので、厚さ1.5cm、表面に半肉彫りで水波文を表す。類例は1973年の東大門の調査においても出土している。素地は砂粒を含む粗做なもので、表面から側面にかけて施釉をおこない、裏面には製作時の布圧痕を残す。

他方は、1974年の川原寺裏山遺跡の調査で、火中した塑像・塼仏等とともに、大小30点近くがまとまって出土したもので、大きさのわかるものは縦15.5cm、横25.0cm、厚さ1.2cmをはかる。素地はきわめて精良で白色を呈し、繊細な沈線で静かな水波文を表現したものと、太いヘラ描沈線で渦文と波の泡立つ様子を表現したものがある。裏面に布圧痕はなく、素面で軽いケズリを側縁の方向に平行に加えている。施釉は、前者と同様表面および側面におこない、裏面に及ぶものもある。素地の表面にえぐり込みを設け、施釉・焼成後、その窪みの中に漆喰を塗り込めた箇所がいくつかみられる。また、縁辺に釘穴をもつものがある。

これらの裏面には「八」(川原寺)「第十一□三」「八大」「中」(川原寺裏山) といった刻書・墨書がみえ、堂内の壁面もしくは須弥壇を荘厳した際の番付と考えられている。同一個体に、刻書と墨書でそれぞれ異なる内容を記したものもあるため、こうした記載には製作時・使用時など複数の文脈のあったことがうかがわれる (奈良国立博物館『飛鳥の塼仏と塑像』1976年、８頁　図版17)。

まとめ　これまで寺域内からは、半肉彫りの水波文塼の出土しか知られていなかった。今回報告した渦文塼は、胎土・形状・製作技術などの特徴から、川原寺裏山遺跡出土の緑釉渦文塼と同一のものである。裏山遺跡に埋納された遺物が、本来いずれの堂塔に属するものであったのかを推定する手がかりとなろう。

(次山　淳／飛鳥資料館)

川原寺出土渦文塼

(実測図1：2、写真1：1)

石神遺跡SE800 出土土器の再検討

石神遺跡では、斉明朝と目されるその最も整備された段階（A-3期）には正殿にあたる庇付の東西棟建物を長大な建物で囲んだ南北に長い長方形区画が2つ並んでいる。表題の井戸ＳＥ800は東の区画の南辺中央にあってＡ期の初めから存在し、Ｂ期には廃絶しており、Ａ期の建物等と命運をともにする遺構であり、その出土土器は遺跡の始まりと変遷、性格の究明にとって重要である。

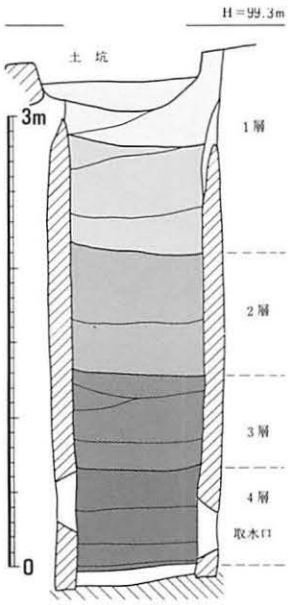
井戸ＳＥ800出土の土器については、『藤原概報 15』上で飛鳥Ⅲに位置づけられるものがあることを報告しているが、提示した土器にはより古い段階の土器が含まれ、すべてが飛鳥Ⅲの標識になるわけでないことは自明のことであった。しかし、主に年代の指標となっている杯類が少ないにも関わらず、一部で飛鳥Ⅲの基準資料にあげたこともあって、無用な混乱を生じる恐れがあった。また、飛鳥藤原宮跡発掘調査部では、近年新たに追加された川原寺下層、豊浦寺下層、山田寺下層、飛鳥池遺跡、甘樫丘東麓など、おもに飛鳥Ⅰ～Ⅱの土器群について当該年度の『藤原概報』誌上に概要を報告するとともに、「飛鳥地域土器編年基準資料」の公刊にむけて飛鳥Ⅰ～Ⅴ全体の再検討を進めつつあるが、その一環として飛鳥Ⅲまでの土器が含まれる井戸の「一括遺物」の検討は必要な作業でもある。

遺構と層序　井戸は杉の巨木を半裁して厚さ18cmにくり抜き杏仁形に合わせた井戸枠をもち、周囲には玉石を方形に敷き詰め、その外側には、北を除く三方に側石を立てて、東西5.3m、南北6.7m、深さ約1mの方形石組池状をなす。井戸枠は東西内法1.2～1.37m、南北内法0.67～0.8mで底から15～35cmの高さに40cm程の円窓をあけて取水口とする。井戸の底は石敷面からの深さ3.8mにあり、深さと狭さから井戸浚えは不可能であったとみられる。井戸の層序は4層に大別される。石敷から1.6mまでの灰褐色粘質土（1層）は埋立の最終段階あるいはその後に掘られた石敷を破壊する土坑に関り、2.4mまでのバラス層（2層）は人頭大の石が詰まった短期間の埋立土で、その下3mまでの砂層（3層）も人頭大の石が多量に混じる埋立土である。これに対して3.7mまでの4層には有機物が多量に含まれ、上・下端が枠に開けられた取水口の高さに一致していることからも使用時の堆積土とみられる。土器は2層の下半、3層、4層上半に多く、約200個体の土師器・須恵器があるが、土師器甕、須恵器平瓶・壺類の出土量の多さが目立ち、杯類は全体の数%程度と少量で、しかも土師器杯Ｃ・杯Ｇ・杯Ｈであり須恵器杯類は全体で数点しかない。

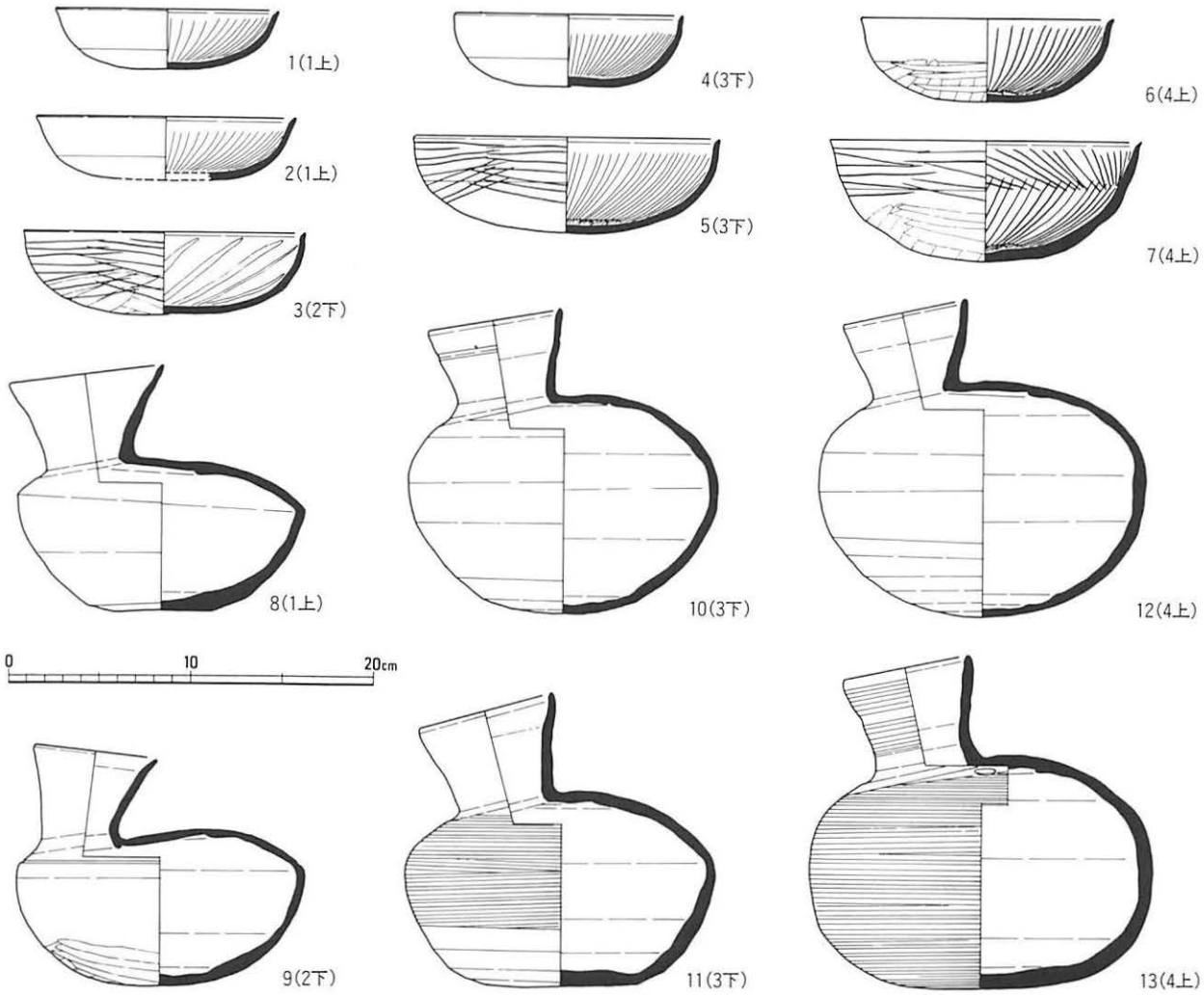
土器の年代観と系統　図は土師器杯Ｃと須恵器平瓶を層位別に示したもので、上層ほど土師器杯Ｃの口径に対する器高の割合（径高指数）が小さくなり、平瓶では体部の丸みが取れて肩が張る傾向にあり、上層ほど新しい傾向にあることは明白である。また平瓶には体部にカキ目を施すものとナデ調整のものがあるが、器形変化の方向は産地を異にするとみられる両者に共通しており、この井戸の層序は安定したものとみなすことができる。

そこで各層の土師器杯Ｃを従来の編年基準に照らすと1層の土師器杯ＣⅡは径高指数25～27前後で飛鳥Ⅳに位置づけられ、2層は口径15.5cm、高さ4.6cm、径高指数30前後で飛鳥Ⅲ、3層は径高指数31～32で杯ＣⅠ(5)の底部をヘラケズリしない点でも坂田寺ＳＧ100を基準とする飛鳥Ⅱに近い内容である。そして4層は、杯ＣⅡ(6)が口径13.8cm、高さ4.6cm、径高指数33で、底部を3分割で削るが、飛鳥Ⅱの坂田寺ＳＧ100には底部を削る杯ＣⅡはみられないこと、杯ＣⅠ(7)が丸底で器高が高く、底部外面を5分割で削り、内面には太い暗文を2段に施すが、二段暗文の杯ＣⅠは飛鳥Ⅰの新しい段階である山田寺下層資料にも残ることから飛鳥Ⅰに属すると考えられる。すなわち、井戸ＳＥ800は飛鳥Ⅰに始まり、飛鳥Ⅲで廃絶し、飛鳥Ⅳに壊されているのである。

ところで、廃絶時を示す2層の3は法量の上では飛鳥Ⅲに属すが通常の杯Ｃとは胎土色調を異にするうえに、底部を5分割でケズリ、暗文はナデ



井戸SE800土層模式図　1：50



SE800出土土器　1：4　(括弧内は出土層位)

調整に近い方法で施した異質の杯Cであり、飛鳥地域の飛鳥Ⅲの基準資料とするには問題がある。

また、4層の6・7は内面の暗文が太い点が特徴で、類例は飛鳥地域では、豊浦宮推定地・山田寺下層から出土しているが、大阪府藤井寺市周辺の遺跡からは同じ太い暗文を施した高杯など別器種と共に多数出土している。SE800からは杯類の少なさもあって4層に細い暗文の杯Cはないが、3層に口径16.6cm、高さ6.3cm、径高指数38で外面を5分割ケズリの後ヘラミガキし、内面に細い一段放射暗文を密に施した飛鳥Ⅰの杯CⅠがあり、両者は太い暗文の杯Cが丸底なるが故に器高が高く径高指数が幾分大きくなるものの概ね一致する。このことは太い暗文をもつ6・7は飛鳥地域で通有の杯Cではなく製作者（地）を異にする別系統の杯Cであるとみられると共に、この時期の土師器にはそうした系統の違いを越えた規格性があることを示しており、土器の年代観はその中にみることができる。

飛鳥Ⅰの杯Cに飛鳥地域に通有の一群とは異なる群別があることについては、すでに甘樫丘東麓の焼け土層出土土器の特徴として報告されているが、それらは内面の暗文が太いものの口縁部の形状などで6・7とも違った一群であり、その単位はかなり小さなものと推定できる。今回除外した杯Gについても口縁部の形と胎土の違いによる細分が可能であって、この時期の杯類は個性的で多様である。そもそも製作技法の異なる杯C、杯G、杯H自体が互いにほぼ似通った法量と器形をもった杯類であり、遺跡や遺構の違いによって互いの構成比が異なることも報告されており、土師器の煮沸具にみられる手法の相違による「型」と杯類の系統・群別を関連づけて把握することによって遺跡の性格を推定する手がかりとなりそうである。須恵器貯蔵具等の産地の検討とともに、後稿を期したい。　（西口壽生／飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

飛鳥寺同笵瓦二題

飛鳥寺と新堂廃寺の同笵垂木先瓦　飛鳥寺の垂木先瓦は4種類ある。『飛鳥寺発掘調査報告』（奈文研学報第5冊1958年）では、これらを「瓣の反りの大きい素瓣九瓣と六瓣のものと、山田寺式軒丸瓦の内區を採ったもの」および「軒丸瓦Ⅲ型式の内區のみを用いて」垂木先瓦としたもの、と報告した。本文中に型式番号は記載されていないが、「第3表」（34頁）には、「種Ⅰ、〃Ⅱ、〃Ⅳ」の記載がある。今回、記述の便宜を計るため、Ⅰ型式：素弁九弁、Ⅱ型式：素弁六弁、Ⅲ型式：軒丸瓦Ⅲ型式の内区を利用したもの、Ⅳ型式：弁央に凸線をもつ八弁、と型式設定する。うち、素弁九弁Ⅰ型式（図1中央）の同笵品が大阪府富田林市新堂廃寺でみつかった。

新堂廃寺は、石川左岸の丘陵裾に位置する飛鳥時代創建の寺院跡である。1959年と翌年の発掘調査により、塔と金堂が南北に並び、金堂の北と西にも基壇建物を配置する伽藍が確認された。藤澤一夫氏は一塔三金堂の伽藍とみる。また、藤澤氏が推定した寺号・烏含寺は、百済の都扶余扶蘇山上にあった寺院名を踏襲したもの（浅野清・坪井清足・藤澤一夫『河内新堂・烏含寺跡の調査』大阪府文化財調査報告書第12輯　大阪府教委　1961年）。

この調査では3種の垂木先瓦が出土したが、問題の垂木先瓦はこの中にはなく、1995年に実施された推定寺域北側の調査で出土した。概要報告書に「ＩＣ01素弁蓮華文」とされた垂木先瓦がそれ（図1左）。これと同笵で、釘孔が貫通せず裏面に丸瓦？接合痕跡を残す「ＩＡ01素弁（9弁）蓮華文軒丸瓦」（図1右）もある（井西貴子『新堂廃寺発掘調査概要』大阪府教委　1996年）。

飛鳥寺垂木先瓦Ⅰ型式は、直径14.6cm、中房での厚さ1.6cmあり、側面と裏面をヘラケズリ調整する。新堂廃寺例は、直径14.5cm、厚さ1.8cm、調整も同じ。いくつかの弁の歪みに加え、瓦当面全体に残る作笵時のノミ跡が全く一致するので両者は同笵。製作技法および胎土焼成にも違いは認め難く、同一生産地から二寺への供給とみてよい。石川中流域での飛鳥寺同笵瓦は初出で、この地域での寺院建立に、蘇我氏と飛鳥寺が関与していたことを推測させる資料となろう。（同笵認定にあたり、大阪府教委の井西貴子氏・広瀬雅信氏の協力を得た。）

飛鳥寺禅院の軒瓦　白雉4年（653）入唐、玄奘三蔵に禅定を学んだ僧道昭。帰国後、彼は飛鳥寺の東南の隅に禅院を建てて住み、また天下を周遊して各種の土木工事をなした。文武4年（700）、齢72歳にして縄床に端座しつつ入寂したのもその禅院。（『続日本紀』文武4年3月10日条）。禅院は平城京遷都に伴い、飛鳥寺とは別に和銅4年（711）右京四条一坊に移り（薬師寺『仏足石記』）、後に禅院寺とも称される。道昭が将来した多数の禅院寺所蔵経論は、「書迹楷好、錯誤あらず」と有名だった。

道昭創建の禅院は永く所在不明だったが、1979年に飛鳥寺南門東南方の南面築地外で7世紀後半に造作された掘立柱の塀や建物がみつかり、禅院の一郭ではないかと推測された（『藤原概報9・10』）。その後、1992年に中心

図1　同笵垂木先瓦（中央：飛鳥寺、左右：新堂廃寺　1：3）

図3　平城京右京三条一坊
十四坪出土軒瓦　1：6

図2　飛鳥寺禅院の創建軒瓦　1：6

伽藍の東方で7世紀後半に建てられた礎石建ち基壇建物がみつかった。建物方位は、中心伽藍ではなく東限塀と揃う。西側に築地塀があり、一院をなしている。出土した瓦も中心伽藍ではめったに出土しないもので、単弁のXIII型式と複弁のXVII・XVIII・XIX・XX型式に三重弧紋軒平瓦が組む(図2)。丸瓦は竹状模骨丸瓦、平瓦はタテ縄叩き桶巻き作り。この礎石建物も寺地の東南隅にある（飛鳥寺1992―1次調査『藤原概報23』)。

いずれの調査地が禅院か。糸口は意外な方面からもたらされた。1993年に奈良市教委がおこなった平城京右京三条一坊十四坪西辺の調査（平城京第291次調査）で、13世紀後半に廃絶した井戸から、飛鳥寺XVII型式軒丸瓦と三重弧紋軒平瓦、それに竹状模骨丸瓦が出土した（図3)。これらの瓦は平城京で出土したことがなかった。出土地の右京三条一坊には寺の所在を確認できない。しかし、三条大路を隔てた南は右京四条一坊。まさに、禅院寺の地だ（原田憲二郎「平城京出土の飛鳥寺軒丸瓦と「竹状模骨痕」をもつ丸瓦」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1994』1995年)。飛鳥寺1992―1次調査地が禅院の一郭となれば、その移転先の近辺から禅院創建瓦が出土するのも腑に落ちる。

軒丸瓦XVII型式はこの他、奥山廃寺(明日香村)、姫寺跡(奈良市)、高田廃寺（桜井市）と横大路（橿原市）に同笵瓦がある。横大路の同笵例は下ツ道との交差点から西約300mの路面上に掘られた土坑から出土した。土坑の底に葉っぱを敷き、底に孔をあけた土師器鍋を置く。その上に曲げ物の側板をのせ、軒丸瓦（飛鳥寺XVII型式）の瓦当部を紋様面を上にしてのせ、さらに石でこれらを固定する。調査者の今尾文昭氏はこれを横大路に対する地鎮め祭式の遺構と認めている（今尾文昭「橿原市新益京横大路発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報　1992年度』1993年。今尾文昭「新益京の鎮祭と横大路の地鎮め遺構」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズVI　1994年)。

当時これらの鎮祭には陰陽師が関連していた。『日本書紀』持統6年（692）2月11日条にみえる陰陽博士沙門法蔵・道基は陰陽僧であろう。道昭自身も出自は土木技術に長けた船連。宇治橋建設は『続日本紀』編纂者の一人で同族の菅野真道の仮託としても、各地で鑿井や港湾・橋梁工事などに関与したことは彼の薨伝にみるとおり。その技術の一つに陰陽道があったとすると、横大路の鎮祭に用いられた軒丸瓦が禅院創建軒瓦の一つだったことも、偶然ではないように思える。

大和以外で、禅院推定地と同笵関係をもつのが摂津の梶原寺（大阪府高槻市）である。ここからはXVIII型式が出土し、最近、梶原瓦窯でも出土した。今、にわかには禅院と梶原寺をつなぐ赤い糸を指摘することはできないが、梶原寺が山陽道に面して建ち、東に山崎津を控えた立地であることは、注意してよいだろう。山崎津には天平3年（732）行基開基と伝える山崎院があったが、周辺からは7世紀代の瓦も出土し、寺院としてはそれ以前からあったようだ(山崎廃寺)。行基は道昭を師とし、二人の密接な関係はその業績にもあきらか。山崎津・山崎院と行基との関係は遡って道昭の時に始まったもので、梶原寺と禅院との瓦の同笵関係もそれにちなむ、とは想像にすぎるだろうか。飛鳥寺東南隅の禅院に関わる同笵関係は、少なくとも飛鳥寺がもっていたそれまでの、またそれ以後とも全く独自の広範囲にわたるものである。それは、「天下の行業の徒、和尚に従ひて禅を学びぬ」とある薨伝の一文を髣髴とさせる。禅院が平城遷都にともない元興寺から離れたことの原因はこのあたりにも胚胎していたのだろう。

（花谷　浩／飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

中世の同笵軒瓦の調査

1995年から1997年にかけて中世瓦の調査を集中的におこなった。本稿では現在までに判明した同笵軒瓦についての概要を記す。なお、中世瓦の年代の細分については、Ⅰ期(1180～1210)、Ⅱ期(1210～1260)、Ⅲ期(1260～1300)、Ⅳ期(1300～1333)、Ⅴ期(1333～1380)、Ⅵ期(1380～1430)、Ⅶ期(1430～1500)、Ⅷ期（1500～1575）とする。

①東大寺再建瓦（岡山県出土瓦と東大寺瓦の比較）Ⅰ期

中央の梵字を囲んで「東大寺大仏殿」と記し、その外に8弁の蓮華文を配する軒丸瓦はA～Ⅰの9種を確認した。岡山県と奈良県で出土したのはA・B・E～Ⅰで、東大寺南大門のCや東大寺蔵のDの2種は岡山県では現在まで未発見である。しかし、胎土や技法及びこれらと組む軒平瓦の技法からみて、この9種がすべて岡山県万富窯産（広義の意味では吉井川添い）であることは、まず間違いない。1997年調査。

②鎌倉極楽寺と京都壬生寺　Ⅱ期

鎌倉極楽寺の瓦を実見した際に、原廣志・小林康幸の両氏から側面蓮華文軒丸瓦が京都壬生寺出土例と同笵の可能性が高いとの教示を受けた。その後、元興寺文化財研究所で壬生寺出土例を実見する機会を得た。両者とも同一箇所に笵傷があり、同笵は間違いない。胎土も酷似する。この文様の軒丸瓦は京都石清水八幡宮から出土していること等を考えると、京都産の瓦が鎌倉へ運ばれたものと理解してよいだろう。1997年調査。

③姫路円教寺・大和薬師寺・唐招提寺・法隆寺と河内竜泉寺　Ⅲ期

姫路円教寺の蓮華唐草文軒平瓦については、1992年に薬師寺・法隆寺例と現物照合し、その成果を「三村山極楽寺跡遺跡群」(1993)で報告したが、今回は河内竜泉寺と薬師寺・法隆寺例との現物照合をおこなった。同笵であり、製作技法も同一であるが、胎土はあきらかに異なる。大和の瓦工の河内での出張製作を示す。竜泉寺例については「南都・在地瓦工が共同で焼造」「顎貼付（包み込み？）」（桃崎祐輔「鎌倉時代蓮華唐草文軒平瓦の系譜と年代」『考古学雑渉　―西野元先生退官記念論文集―』1996年）という見解があるが、現物もみないで報告書の図版だけをもとに過度の論を立てることがいかに恐いものであるかを如実に示す。1997年調査。

④河内須弥寺・獅子窟寺と大和薬師寺　Ⅲ期

交野市教育委員会の真鍋成史氏の協力によって、1997年発掘の須弥寺の巴文軒丸瓦・蓮華文軒平瓦と薬師寺の軒丸・軒平瓦を現物照合する機会を得た。両者は軒丸・軒平セットで同笵になることが判明した。製作技法は同じだが、胎土は異なる。薬師寺の巴文軒丸瓦は玉縁部まで残っており、丸瓦の吊り紐から判断して、この一組がⅢ期まで遡る有力な根拠を得た。

⑤尾道浄土寺と大和大安寺（2種）　Ⅳ期

尾道浄土寺と大和大安寺で同笵の軒平瓦は花菱唐草文軒平瓦と菱形唐草文軒平瓦の2種がある。花菱唐草文軒平瓦は、浄土寺段階では外区が二重圏線となっていた笵型が、大安寺段階では外周を切り縮め一重圏線となっている。両者は技法では差がないが、胎土では、浄土寺例が白色粒を多量に含みあきらかに異なる。この瓦は、嘉暦2年（1327）の浄土寺本堂再建当初の瓦に間違いなく、この時、大和の瓦工人が尾道に出張製作に来たことは間違いない。次に菱形唐草文軒平瓦も、浄土寺と大安寺で同笵関係にある。笵の切り縮めなどの前後関係を明確に示す資料はないが、浄土寺例の方が文様がシャープであるから、これもやはり浄土寺用として使用され、後に大安寺用として使用されたものであろう。この瓦も、文様構成・製作技法の点からみて、Ⅳ期の瓦とみてよい。1995年に浄土寺にて現物照合。

⑥河内宮町遺跡と大和大安寺・西大寺　Ⅴ期

八尾市宮町遺跡出土の2種の軒平瓦は大和大安寺・西大寺出土例と同笵である。1種は花菱唐草文軒平瓦で、大安寺・宮町遺跡例は同一場所で照合。両者は同笵で、胎土も同じ。西大寺の瓦（西大寺所蔵）とも同笵である。他の1種は中心無飾り均整唐草文軒平瓦で、大安寺で使用された後、宮町遺跡・西大寺段階で笵の両端を切り縮め使用されている。宮町遺跡と西大寺の出土例は、胎土も同一である。1996年調査。

⑦河内竜泉寺と大和唐招提寺・喜光寺　Ⅵ期

河内竜泉寺出土の菊水唐草文軒平瓦は、大和唐招提寺出土例と同笵であり、この笵は後に、両端を切り縮めて喜光寺で使用されている。今回現物照合したのは竜泉寺と喜光寺例で、技法は同じだが、胎土は異なっている。1997年大谷女子大学資料館にて調査。

中世の同笵軒瓦　1：8　図の①～⑫は本文小見出しの①～⑫に対応する

⑧紀伊根来寺と大和薬師寺　Ⅶ期

紀伊根来寺出土の蓮華唐草文軒平瓦は大和薬師寺出土のものと同笵である。技法は同一だが、胎土は微妙に異なっている。根来寺出土の瓦は、大和の瓦と同笵とみて間違いないと思われるものが他にもあるが、今回、この瓦は実見できなかった。蓮華唐草文軒平瓦は、1996年、和歌山県立埋蔵文化財センター管理棟にて現物照合。

⑨河内竜泉寺と大和薬師寺　Ⅶ期

宝珠水波唐草文軒平瓦は河内竜泉寺と薬師寺とで同笵。技法は同一だが、胎土は異なる。1997年現物照合。

⑩摂津久安寺と大和薬師寺　Ⅶ期末・Ⅷ期初頭

池田市久安寺楼門と大和薬師寺出土の宝珠唐草文軒平瓦は同笵である。笵傷があるが、傷からは両者の前後関係は決め難い。両者の胎土は異なる。薬師寺例では顎はりつけが明瞭であり、Ⅷ期初頭と考えてよいが、久安寺例は瓦当はりつけ（久安寺は完形品であり、ごく一部の割れの観察から）の可能性があり、Ⅶ期末に遡るものであろうか。1997年、久安寺にて現物照合。

⑪河内大谷廃寺と大和薬師寺　Ⅷ期

交野市大谷廃寺出土の宝珠唐草文軒平瓦は、薬師寺出土例と同笵である。技法は同一だが、胎土は異なる。この瓦は薬師寺西塔で多く出土しており、薬師寺西塔が兵火によって焼失する享禄元年（1528）以前であることは確実である。1997年、交野市文化財事業団にて現物照合。

⑫山城栢杜遺跡・醍醐寺五重塔と大和諸寺　各期

山城栢杜遺跡方形堂出土の3型式の軒平瓦は、いずれも大和と同笵である。軒平Aは東大寺等と同笵（Ⅱ期初頭）。軒平Cは元興寺極楽坊等と同笵（Ⅱ期）。軒平Bは法隆寺等と同笵（Ⅴ期）。このうち同一場所で現物照合できたのは軒平Bだけであるが、胎土は両者酷似する。一方、醍醐寺五重塔の屋根にのっていた軒平瓦のうち、大和と同笵関係にあるのは6型式あり、そのうち現在醍醐寺に所蔵されている5型式と大和の諸例とを現物照合した。第1は興福寺と同笵のもの（平安末）、第2は法華寺・西大寺等と同笵のもの（Ⅲ期）、第3は法隆寺と同笵のもの（Ⅳ期）、第4は法隆寺と同笵のもの（Ⅵ期）、第5は法隆寺と同笵のもの（Ⅵ期）であり、いずれも胎土が類似する。山城伏見区醍醐における栢杜方形堂と醍醐寺五重塔の瓦が大和と同笵で、かつ胎土が同一であるということは、中世の大和の瓦は、京都へは、瓦自体が運ばれるのが一般的であったことを示すものであろう。1994・1996・1997年調査。　（山崎信二／平城宮跡発掘調査部）

山内資料の緑釉塼とその成分

はじめに　今回調査したのは、中国もしくは朝鮮半島で作られたと推定される緑釉塼５点（228～232：『山内清男考古資料８』参照）である。これらの資料について釉薬と胎土の分析および釉薬の鉛同位体比の測定をおこなったので、その概要について報告する。

調査の方法　５点の資料は実体顕微鏡下で観察をおこなったのち、緑釉については蛍光Ｘ線分析法による測定をおこなった。まず釉薬層の厚い部分を選んで、表面の白っぽくなった風化層を取り除いたのち蛍光Ｘ線分析法により定性分析をおこない、検出された各元素を酸化物に置き換えた後、ファンダメンタルパラメータ法により、検出された酸化物（重量％）の合計が100％になるように基準化して定量計算した。定量分析にはK2、BCR126Aなど鉛珪酸塩ガラスを標準資料とした。また、風化して白色と化した表面部分についてはＸ線回折法により生成物質の同定もあわせておこなった。

胎土部分については、胎土の一部を採取してメノウ乳鉢を用いて200メッシュ以下に粉砕した後、Ｘ線回折粉末法により測定をおこない、含有鉱物の同定をおこなった。また、一部の資料については示差熱分析などを用いて胎土の焼成温度の推定もおこなった。

緑釉（鉛釉薬）の鉛同位体比測定は高周波加熱―鉛同位体比法によった（斎藤務氏測定）。

結果と考察　各資料を観察した結果、いずれの釉薬部分も風化がかなり進んでおり、表面の一部は白色を呈し粉状化したり層状剥離が生じていた。また、228，229，230，231の各資料にみられる緑釉表面はブロック状の亀裂が発生したり（図１）、多数の気泡が観察された（図２）。これらの亀裂は製作当時において徐冷操作が充分になされなかったり、冷却時において胎土とガラスの収縮率が大きく異なったことなどが原因していると考えられた。しかし、釉薬層にはまったく亀裂が生じてない資料も存在していた（232）。この資料は緑色と黄褐色の釉薬が観察された。また、緑色釉と白色釉が観察される230資料は、緑色釉部分には亀裂が生じているが、白色釉部分には亀裂は生じておらず、釉薬層に亀裂が発生する原因は上記原因以外にも釉薬の層の厚さにも一因がある。

実体顕微鏡下の観察の結果、今回の資料は胎土の状態から大きく３つに分類された。まず、含有する鉱物や礫が細かく淘汰が良好な230，232に対して、228，229は３～５㎜大におよぶ石英や長石などが混じっており、やや粗雑な砂質土が使用され、かつ鉄分が多く色調はいわゆるレンガ色を呈している。そして231はこの中間的なもので、基質部分は細かく、これに数㎜におよぶ礫が混合していた。以上の胎土と釉薬の観察の結果、釉薬に亀裂が生じてないものや亀裂が少ないものは、胎土も良質である傾向を示した。

各資料の緑色釉部分について蛍光Ｘ線分析をおこなった結果(表１参照)、いずれの資料からも主成分として珪素（Si）および鉛（Pb）を検出したことから、鉛ガラス

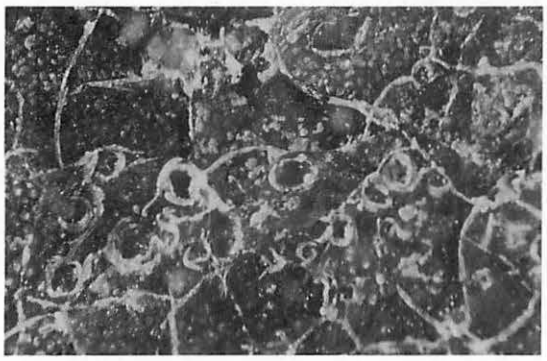


図１　資料230：亀裂や未溶解の石英が観察された（×40）

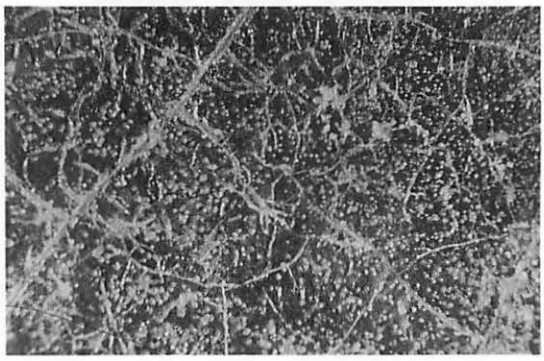


図２　資料229：多数の気泡が残存する（×20）

($PbO-SiO_2$系）が釉薬原料として使用されたことがあきらかである。今回の資料は一酸化鉛の含有量が、ほぼ60～70%に達する高鉛含有の鉛釉で、従来から公表されている緑釉の組成と同じであった。また、緑色の釉薬からは銅（Cu）を検出しており、銅イオンによる着色がなされている。黄褐色部分については定性分析のみであるが、その着色は鉄イオンにもとづくと判断された。上記元素以外にナトリウム（Na），マグネシウム（Mg），アルミニウム（Al），チタン（Ti），カリウム（K），カルシウム（Ca），マンガン（Mn）などを検出したが、Al_2O_3：3%以下、K_2O,CaO：2%以下で、それ以外のNa_2O, MgO, TiO_2, MnOはいずれも1%以下であり、これらの成分に関しても従来のデータと同じ特徴を示した。白色釉および黄褐色釉部分はガラス層が大変薄く（300μm以下)、かつ内部まで風化がすすんでいる可能性もあるため、定性分析のみを実施した結果、同様な鉛ガラスであることもあきらかとなった。

白色に風化した緑釉表層は、X線回折の結果、$PbSO_4$〔Anglesite〕に同定されるスペクトルが観測された。

以上、緑釉などにみられる鉛釉に関しては中国、朝鮮半島のデータは少なく詳細はあきらかでないが、成分的には日本で出土するものと大差がなく、主成分からこれらの地域性を判別することは困難である。今回は資料228、230、232の各資料の緑釉について鉛同位体比の測定を実施した（表-2）。その結果、228と230資料は中国産鉛鉱石が原料に関係していると推定されたが、232に関しては従来の文献などにはみられないものであり、今後の検討課題となった。

胎土のX線回折分析の結果、いずれの資料からも石英、長石のピークが検出された。粘土鉱物が検出されていないことや長石が溶融していないこと、ムライトやクリストバライト、スピネル鉱物など熱変成によって生じる鉱物が検出しないことなどから考慮すると、700℃以上1000℃以下で胎土が焼成されたことが推定される。これは熱分析によって得られた結果とも一致し（図-3)、824℃からの大きな吸熱反応とそれに続く1000℃付近からの減量曲線から判断すると、資料230の塼の胎土は800℃前後で焼成されたことが推定された。なお、824℃の吸熱に続いて1200℃よりやや高い温度で発熱が観測されており、二次鉱物の生成が関与する。

（肥塚隆保・金子裕之／埋蔵文化財センター）

表1　緑釉の蛍光X線分析

資　料	SiO_2	PbO	Fe_2O_3	CuO
228	29.5	66.6	0.2	0.6
229	24.4	73.4	0.3	0.5
230	26.9	69.9	0.3	0.4
231	24.4	69.9	0.8	0.5
232	30.6	64.0	0.4	0.5

(wt%)

表2　緑釉の鉛同位体比測定の結果

資　料	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	$^{206}Pb/^{204}Pb$
228	0.9053	2.1990	17.191
230	0.8988	2.1652	17.377
232	0.7329	2.1411	21.909

（国立歴史民俗博物館　斎藤務氏測定、1997）

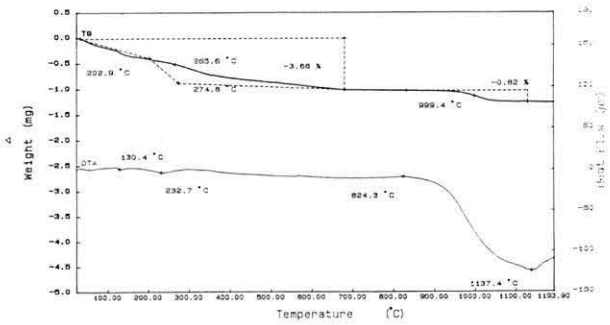


図3　資料230の示差熱・加熱減量曲線

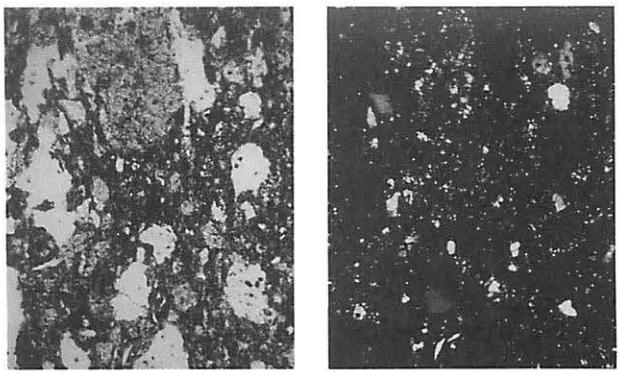


図4　資料230の偏光顕微鏡写真（左：－、右：＋）
（肉眼的には非常にきめの細かい胎土である。偏光顕微鏡下では、微粒子状の石英が多数散在しており、やや角ばった形状を呈している。長石は風化が進んでおりソーシュライト化している。）

藤原宮出土「大贄」木簡補遺

1975年の６月から12月に実施された藤原宮第18次調査は、藤原宮北面中門を対象とするもので、その発掘で宮の外濠ＳＤ145から551点の木簡が出土した。この木簡については『藤原木簡概報２』（1975年）に略報告がなされ、その後『藤原宮木簡１』（1978年）として正報告が刊行された。『藤原宮木簡１』には、１点１画の墨付をのぞき、釈読できたすべてを木簡番号８号から246号まで計239点が掲載されている。それらの木簡の大きな特徴として、評からの荷札が多く出土したことがあげられ、浄御原令制下の地方制度や租税制度を考える上で重要な位置を占めている。

ところが、発掘当初の記録には残っているものの、その後、木簡の所在が不明となり、写真撮影もおこなわれていなかったため、報告できなかったものが１点あった。

それが、じつは盗難にあったものであり、実物が存在することが判明したのは1990年のことである（飛鳥資料館『飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察』1991年）。盗難にあったのは軒瓦などが中心であったが、そのなかに木片９点がふくまれていた。その大半はわずかな墨痕のみで判読できないが、１点だけ当初の記録にあった木簡があり、それは『藤原宮木簡１』に192号として報告したものと接続し、完形となる。そこで、今回改めて全体の写真を掲載し、報告することとした。

写真は右上に掲載した。釈文は次のようになる。

熊野評大贄塩塗近代百廿隻

243×20×３（㎜）　6033型式

『藤原宮木簡１』ではこのうち下端の「百廿隻」部分だけしか掲載できなかった。最初の文字は左半に傷があるが、「熊」のくずしとみてよい。熊野評は後の丹波国熊野郡にあたる。そこから大贄として貢進された塩塗の近代に付けられた荷札の木簡である。

これまでのところ、熊野評の木簡としては「熊野評私里」と記す藤原宮出土の木簡（『藤原宮』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告25　1969年）についで２例目となり、同郡の贄としては平城宮出土のものに１例あるが、これは品目が判読できていない。

本木簡の品目「近代」は魚の名前で「このしろ」と読む。コノシロは『日本書紀』や『和名抄』に「鰶」と記し、これまで木簡にはあまりみられなかったが、長屋王家木簡と二条大路木簡にいくつかの例がある。前者では「西店交易進近志呂五百隻…」（『平城木簡概報25』1992年）、後者では「名錐郷近代味腊」（『平城木簡概報31』1995年）などである。ちなみに前者の「近志呂」は『出雲国風土記』の表記と同じである。

コノシロを貢進した国は文献史料ではわからず、今回の木簡によって丹波国と、二条大路木簡によって志摩国が判明するのみである。

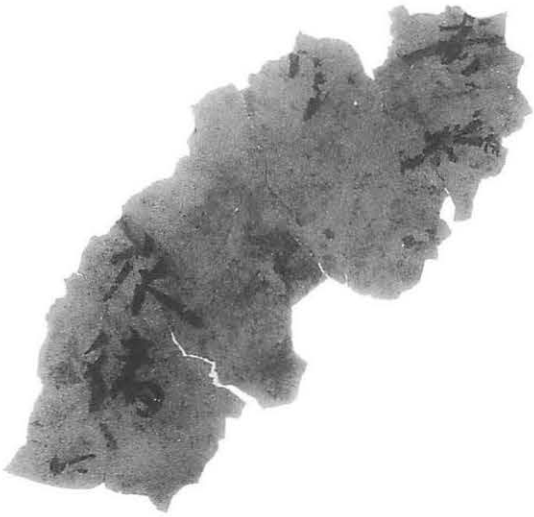
次にコノシロの加工法として、「塩塗」（しおぬり）という語句がある。木簡で類例を探すと、長屋王家木簡に「住吉郡交易進贄塩染阿遅二百廿口…」（『平城木簡概報21』1989年）とあり、ここに「塩染」（しおぞめ）の鯵とみえる。「塩塗」「塩染」ともに、魚類の保存のために塩をまぶした上で貢進したのであろう。

また、平城宮第258次調査で出土した木簡にも「（表）泉遣使請塩■■　彼充魚塗料　五月十七日栗前福足（裏省略）」（『平城木簡概報32』1996年）とあって、「魚塗料」として塩を請求したものがあり、魚の加工に塩を用いた例が知られる。なお丹波国に注目すれば、『延喜式』では諸国貢進御贄として、丹波国の品目の中に「塩塗年魚」とあり、参考となる。

以上、評および贄の関係木簡として１例を追加すべきことを述べた。

（寺崎保広／飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

平城京東市周辺ほか出土の漆紙文書



平城宮第93次調査出土漆紙文書(A)

平城宮第九三次調査出土漆紙文書釈文

A

□□□

□ □□

水猪□

B

[濃カ]
□中

平城宮第一三一―三一次調査出土漆紙文書釈文

□ □

[三カ]
□□□□□□□

平城宮跡発掘調査部史料調査室では、以前の調査で出土した漆紙文書を順次再調査しているが、今回、整理の終了した３次分の調査で出土した資料について報告する。

第93次調査出土文書　平城京左京八条三坊（東市周辺東北地域）を調査した第93次調査（1975年）において、九・十坪の坪境小路南側溝SD1155から１点の漆紙文書が出土した。同じ溝からは他に、郷制下の付札を含む木簡合計25点、「法所」「土寺」「紀伊」「都」などと記された墨書土器、人面墨書土器、漆塗小薬壺、漆塗木製匙、漆皮箱、漆塗冠帽断片、漆濾し布、漆容器（土師器皿・杯、須恵器壺、ヒノキ製曲物）、漆刷毛・篦などが出土しており、付近に漆器工房が存在することを想定できる（『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976年、『平城木簡概報11』1977年）。

漆紙文書は多くの断片に分離している。これらを接合すると11片の断片にまとめることができるが、断片相互の位置関係は不明である。漆容器の液面の縁辺部にあたる円弧状の部分が残っており、これから直径を推定すると、約15～18cmと考えられる。11片の断片のうち、墨書は９片のオモテ面（漆の付着していない面）に判読不可能な文字を含めて計20字確認できる。このうちまとまった墨書の判読できるＡ・Ｂの２片について釈文を別掲した。Ａ断片についてみると字の大きさは約1.4cm四方、行間は約1.9cmである。界線、印影、紙背文書などは確認できない。

第131-31次調査出土文書　平城京左京二条二坊十三坪を調査した第131-31次調査（1982年）において、遺物包含層から１点の漆紙文書が出土した。調査の報告は奈良国立文化財研究所編『平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査』（1984年）において同一坪内の他の調査とあわせておこなっているが、本文書については未報告であるので、ここに収載する。

本文書は漆のパレットに用いたと思われる直径12.6cmのクロメ漆付着の土師器の椀Ａ（平城宮土器Ⅳ）を覆っている。紙自体の遺存状況はきわめて悪い。墨痕はオモテ面に２行分認められ、釈文は別掲のとおりである。残りの良い部分で観察すると、字の大きさは約８mm四方である。界線・印影などは認められない。紙背については水で濡らすなどの方法で観察を試みたが、墨痕は確認できなかった。

第154次調査出土文書　内裏東方を調査した第154次調査において、この地区を南流する宮内の基幹排水路であるSD2700から１点の漆紙が出土した。これも未報告資料である。同じ溝からは漆塗用刷毛のほか、1778点の木簡も伴出している（『昭58平城概報』1984年、『平城木簡概報17』1984年）。

この文書も漆のパレットに用いたクロメ漆付着の土師器の杯を覆っているが、完存せず、本来の直径は不明である。残存部分は約９cm四方の断片となっている。墨痕は確認できなかった。

（古尾谷知浩／平城宮跡発掘調査部）

古代建築における三手先組物について

はじめに　彰国社刊『建築大辞典』の「三手先」の項をみると、「(前略) 壁面から前方へ斗組が3段に出ているもの。比較的格式の高い堂塔に用いられる。(後略)」とあり、薬師寺東塔と唐招提寺金堂と思われる建物の側柱から外の部分の組物の図が掲載されている。ほかの辞書や建築術語解説書等をみても、ほぼこれと同じ内容で大差ない。一般的に組物は、側柱から外側の部分の形態的特徴として捉えられているようである。建築は構造物であり、当然軒を支える組物は構造材である。しかし、上記のように構造的な見方からの説明がない。本稿は三手先を構造的視点から捉えようと試みたものである。なお、桔木等の出現によって構造的意味あいが薄れる中世以降のものは対象外とし、古代建築にしぼって考察する。

古代建築遺構の組物形式　現存する古代建築において組物をもつ建物は56棟あり、その内訳は三手先15棟、二手先1棟、出組4棟、三斗20棟、大斗肘木6棟、舟肘木10棟である。飛鳥・奈良時代に限れば、三手先10棟、二手先0棟、出組2棟、三斗8棟、大斗肘木3棟、舟肘木1棟である。三手先の数に比べて二手先、出組が極端に少ない。東大寺転害門は現状で出組となっているが、これは後世の改造によるもので、当初は三斗であるから、飛鳥・奈良時代において三手先以外で手先の出るものは、東大寺法華堂の出組わずか1棟しかないことになる。

古代の伽藍が残る法隆寺西院で、各建物の組物をみると、金堂、五重塔、中門が三手先、講堂、回廊、経蔵、鐘楼が三斗である。二手先、出組はみられない。

法隆寺金堂・中門・五重塔の組物　側柱、入側柱上に組まれた枠肘木の上に通肘木がわたされ、側柱をこえて外側に出される。入側柱筋に束がたち、その上から先ほどの通肘木の先端にかけて斜材（尾垂木）がわたされる。この斜材の先に三斗が組まれ、桁、母屋をうける。

薬師寺東塔の組物　雲肘木のかわりに肘木、斗が組まれるだけで基本的には法隆寺と同じ原理である。

興福寺東金堂の組物　室町時代の建築であるが、構造は奈良時代の形式を踏襲していると考えられているので、ここでとりあげる。側柱と入側柱の高さが同じであることは、法隆寺、薬師寺と同じである。側柱から外の組物形態は唐招提寺金堂と同じであるが、柱高さを同じにしたことにより、唐招提寺金堂でみられる入側柱上の折点はなく、安定した三角形を構成する。

唐招提寺金堂の組物　前三者と異なり、入側柱が側柱より高い。ここでは外側に出された通肘木のかわりに繋虹梁を肘木形に作り出してのばしている。入側柱上の枠肘木上に平三斗を組み、その上に束をたて、その上に尾垂木をのせる。前の三者が通肘木、束、尾垂木で三角形を形成していたのに対し、三角形は構成するものの入側部分が三斗と束の二つの部分からなり、途中でおれやすい構造となっている。前の三者と異なり、二手のところで組物間を連結する通肘木が入っている。

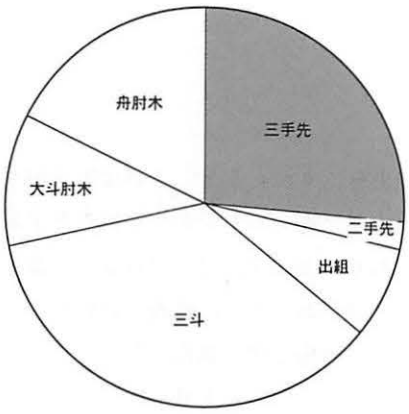
平等院鳳凰堂の組物　これまでは入側柱のある建物であったが、この建物は身舎だけで、庇がつかず、入側柱がない。尾垂木は天井上の盤からわたされる。興福寺東金堂の庇部分を取りのぞき、側柱と入側柱をドッキングしたつくりになっている。

まとめ　以上、古代を代表する建物の三手先組物についてのべた。結論として、三手先は、通肘木、束、尾垂木で三角形（トラス）を構成し、これによって深い軒をささえる構造手法であるといえる。上記以外の三手先についても考察した結果、掲載した図のように三手先には四タイプあることがわかった。このような三手先の構造をみれば、三手先は「壁面から前方へ斗組が3段に出ているもの」という説明が的を得ていないものであることはあきらかである。

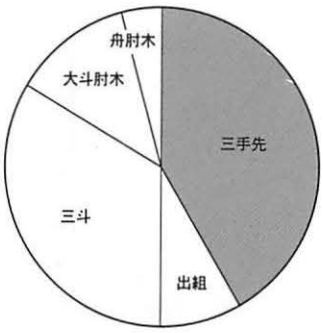
古代において、とくに飛鳥・奈良時代において、三手先以外に手先を出す組物がきわめて少ないということは注目すべき事実である。三手先の構造からいって、中間的な二手先や出組は、基本的には存在せず、東大寺法華堂の出組は例外的なものであった可能性もある。

なお、今回の研究の成果については、平成7年度から実施中の平城宮第一次大極殿基本設計に反映したいと考えている。また、同時に基本設計の中で、法隆寺金堂・薬師寺東塔・唐招提寺金堂など三手先組物をもつ本格的な建築の構造についてコンピュータ解析を実施する予定で、三手先組物の科学的な解明にも挑戦したい。

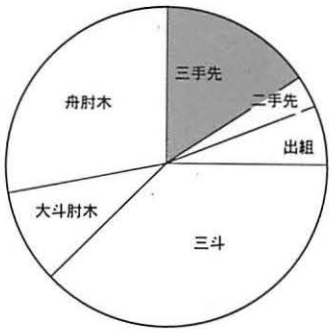
(村田健一／建造物研究室)



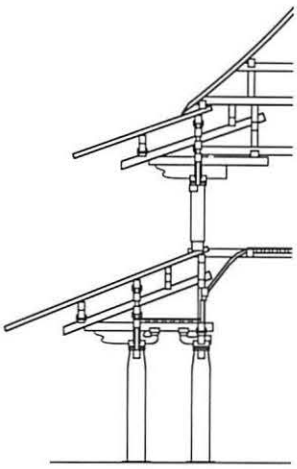
古代建築における組物の割合



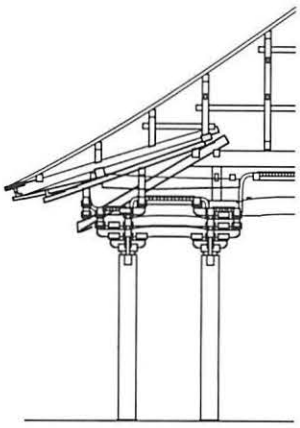
うち　飛鳥・奈良時代



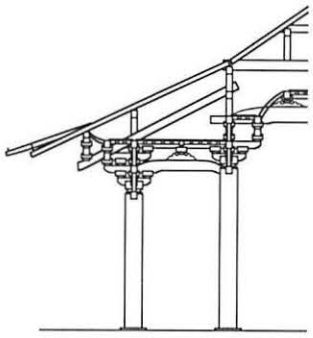
うち　平安時代



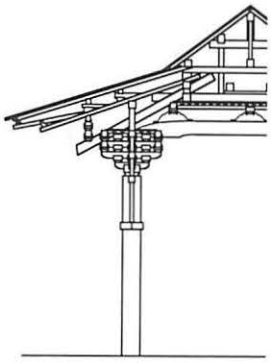
法隆寺金堂



興福寺東金堂



唐招提寺金堂



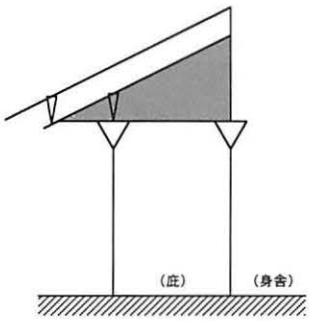
平等院鳳凰堂

和様三手先の種類

組物は、軒を支える装置である。軒を支えるためには、当然のことながら側柱から外の部分だけで対応することは不可能で、内側の部分を含めた架構によってその役割を果たす。特に三手先のようにきわめて深い軒を支える形式においては内側の架構が重要なポイントとなる。

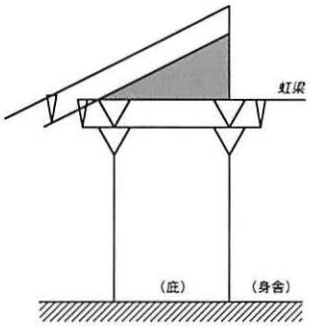
三手先は、通肘木・束・尾垂木で三角形（トラス）を構成し、これによって深い軒の出を支える構造手法である。わが国の和様建築の三手先はこのトラスの作り方によって大きく下の四種類に分類することができる。

▽ 枠肘木
▼ 平三斗



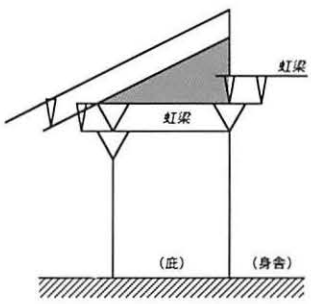
TYPE A　身舎柱と庇柱が同高-1

枠肘木上の通肘木、身舎柱上の束、尾垂木で三角形を構成する。4つのタイプの中で三角形が最も大きい。



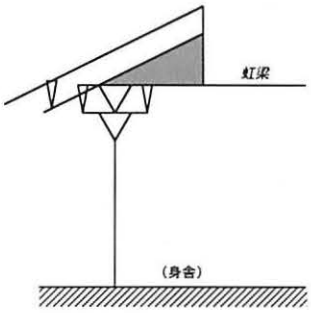
TYPE B　身舎柱と庇柱が同高-2

基本的にはTYPE Aと同じ。枠肘木を2段に組み、その上に三角形をつくる。そのために三角形はTYPE Aより小さくなる。二手目に通肘木を入れ、組物の横の連結をはかっている。



TYPE C　身舎柱が庇柱より高い形式

身舎柱と庇柱の高さが異なる形式。TYPE A、Bのように通肘木、束、尾垂木で完全な三角形をつくらず、構造的には不安定である。TYPE Bの身舎柱を枠肘木一段分高くした形式である。



TYPE D　庇がない形式

TYPE Bの身舎柱と庇柱をひとつにした形式

高御座の考証と復原

平城宮跡発掘調査部では、平城宮第１次大極殿1/10復原模型内に設置する高御座（たかみくら）の1/10復原模型を製作した（口絵参照）。古代の高御座の構造意匠に関する資料はほとんどないので、復原設計にあたっては、現存高御座を基本資料とせざるをえない。現存高御座にもとづきながら、文献史料によって復原できる点をあきらかにし、後世の意匠を反映する点については、できる限り奈良時代初頭に近いものに修正するという方針で設計を進めた。

文献史料からみた高御座　高御座は、治承元年（1177）の平安宮大極殿焼失以降、規模を縮小して紫宸殿・太政官庁に設置されるようになった。そのため、文献の調査対象はそれ以前のものに限定した。史料は『内裏式』『内裏儀式』『儀式』『延喜式』「文安御即位調度図」および裏松固禅『大内裏図考証』、平胤禄『高御座勘物』所引の院政期古記録などを利用した。

院政期古記録にみえる高御座は、壇が上・中・下の３段あり、その上に柱を８本立てて帳をめぐらし、八角形の蓋をのせている。蓋には鳳凰、鏡など多くの装飾品がつく。壇の名称は、下壇が「壇」、中壇が「（御帳）土居」、上壇が狭義の「高御座」である。御帳土居とは帳台の柱が立つ土台、狭義の高御座は天皇が座る壇のことであろう。

表１　装飾品の復原

		史料		デザイン	
		寸法、文様	員数	参考	備考
蓋	鳳凰	大1.7尺小1尺	大１ 小８	百済陵山里寺出土金銅大香炉	
	鏡	大１尺小４寸	大１ 小24（各面３）	正倉院 日光型	大鏡は光芒なし
	玉幡		８（各隅木下）	形態は法隆寺献納宝物広東綾幡ほか	金具は正倉院雑貫などを参照
	玉帽額	１尺	16（各面２枚）	法隆寺金堂天蓋の木製垂飾り	
	障子	表；韓紅花綾 裏；白綾	12	法隆寺献納宝物蜀江錦帯および 正倉院 双鳥連珠文赤綾	正背面を除き各面２枚　半部式
	帳	表；浅紫綾 裏；緋綾	２		正背面
下壇	敷物	赤地唐錦		法隆寺献納宝物蜀江錦帯および 中国新疆トルファンアスターナ211号墓出土の連珠団花文綾	
中壇	敷物	青地唐錦			
上壇	敷物	青地唐錦			
	椅子			正倉院 赤漆欄木胡床	
木階	敷物	纈纈		正倉院 紺地目文纈纈綾	

高御座の研究史をふりかえると、これは常設のものか、臨時のものか、また、唯一のものか、複数存在するものかという議論がある。『延喜式』などをみると、最下壇の「壇」のみは複数常設であっても、狭義の高御座本体は唯一であり、中壇の土居桁と柱、装飾品などとともに、通常は内蔵寮に収納され、儀式に先立って臨時に敷設される建前であったことがわかる。但し、『日本紀略』昌泰２年（899）5月22日条には「未時、飄風吹。傾大極殿高御座於巽方。」とあるので、９世紀末の実態としては、柱や蓋などは撤収されず、常置されていたものと思われる。

現存高御座との比較　まず、現存高御座について記そう。現存高御座は明治42年（1909）の「登極令附式」にもとづき、大正天皇の即位に際して新調されたものである。高御座は３つの壇、すなわち長方形下壇（正面6.06ｍ×側面5.45ｍ、長八角形中壇（対辺距離正面5.55ｍ×側面3.90ｍ）、長八角形上壇（同4.95ｍ×3.30ｍ）からなる。下壇には赤地、中・上壇には青地の敷物を敷き、上壇には畳、椅子を重ねる。下壇から壇下にかけて背面に５級の木階をつけるが、両側面３級の木階は平成度即位儀の後に撤去した。また、下壇と木階には高欄をめぐらす。柱は円柱で上壇に８本立ち、柱上には長八角形方形造の蓋をのせる。各隅木鼻には蕨手をつけ、その上に鳳凰をおき、蕨手下には幡を下げる。蓋の頂上には方形露盤をのせ、その上に蕨手上のものより一まわり大きな鳳凰をおく。軒先各辺には鏡と唐草の装飾を交互に配す。柱間は開放で、各間に引き分けの帷をかけ、内法長押下には帽額を下げる。

次に古代の高御座と比較してみよう。各部の復原設計については後述し、３つの主要な相違点を述べる。

①高御座の壇と柱の立つ位置：現存のものは柱が上壇に立つ。前述のように、古代のものは中壇の御帳土居の上に柱が立っていたとみるべきである。

②平面形：前述のように現存高御座は蓋が長八角形である。これに合わせて、軒先各辺に配された鏡の数も正背面が各５枚と多く、他の６面が各３枚と少ない（鏡の数は院政期古記録も同じ）。しかし、『延喜式』では各面３枚ずつとなっており、蓋および上・中壇の平面形は正八角形であった可能性が高い。

③帳の数：現存高御座は８枚で各面にかけ、柱間の中央で左右に引き分ける（この点は院政期も同じ）。しかし、

『延喜式』では「障子十二枚、帳二条」とあり、障子は正背面以外の柱間6面に各2枚ずつ納められていたと推定される。帳2条は、それぞれ八角形を半周する形で障子と重ねてかけめぐらし、正背面で左右に引き分ける可能性と、正背面各1枚として巻き上げる可能性が考えられる。前者は障子と帳との関係に問題が残り、後者の場合、儀式の際の女官2人による帳の開閉法が問題となる。今回の模型製作においては後者を採用した。

躯体の復原　不明部分が多いが、以上の考察をふまえて、現存高御座や古代の建造物等を参考に設計した。平面規模は、院政期には畳一丈四方が上壇に納まるとされており、上壇を対辺距離15尺の正八角形とした。一方、中・下壇は『大内裏図考証』に記された寸法を参考に、中壇を対辺距離18尺の正八角形、下壇を一辺24尺の正方形とした。下壇には高欄を付け、下壇および高欄の形式は大極殿模型にならった。また、昇高欄は平等院鳳凰堂仏壇を参考にした。木階は現存高御座にならい、背面を5級、両側面を3級とした。柱は中壇に立て、古代の八角円堂にならい八角柱とした。柱間装置は前述のように正背面に帷、他6面には障子を2枚ずつ入れ、障子2枚は半蔀型とする。高さについては文献史料にも記載がなく、3つの壇いずれも現存高御座の寸法をほぼそのまま採用した。また、下壇上端より蓋の項上（露盤の下）までの高さは、現存高御座正面のプロポーションに合わせて17.4尺とした。

蓋の意匠も不明だが、史料に玉幡が帽額から1尺とあり、軒の出を1尺とした。蓋の曲線は正倉院六角厨子残欠のものを採用した。蕨手は東大寺八角燈籠、露盤以上は法隆寺夢殿と東大寺八角燈籠の意匠を参照し、最上部に平城京出土の擬宝珠をおいた。下壇側面の格狭間の形状は、正倉院赤漆文欟木厨子の台脚を参照した。なお、単位尺は大極殿模型にならい、1尺＝29.54cmとした。

装飾品の復原　数量、大きさは文献史料に沿い、デザインについては、正倉院宝物、法隆寺献納宝物などを参考に設計した(表1)。このうち、玉幡は法隆寺献納宝物広東綾幡等の形態を玉で作製することとし、玉の連ね方は阿武山古墳玉枕復原模型にならった。敷物は各壇同デザインとし、帷と障子も同デザインとした。飾金物のデザインは法隆寺金銅小幡の偏向唐草、奈良時代初期の軒平瓦文様などを参考に設計した。調度品は、畳を用いず、椅子式にするという方針から、椅子を製作した。

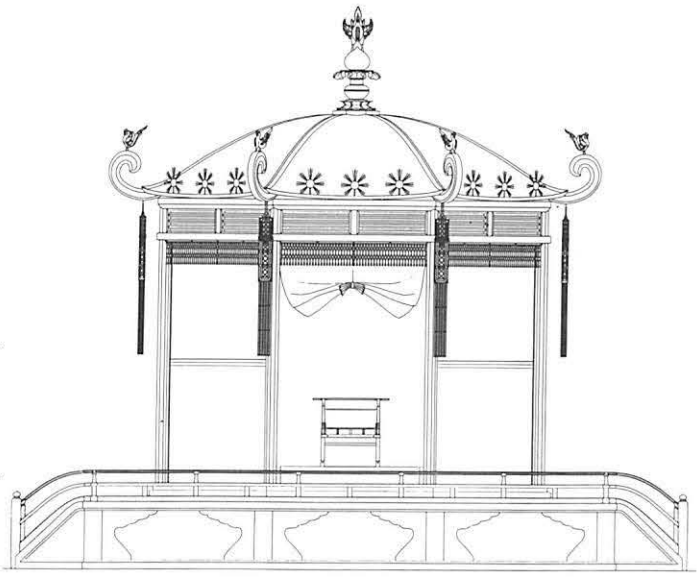


図1　高御座復原平面図　1：100

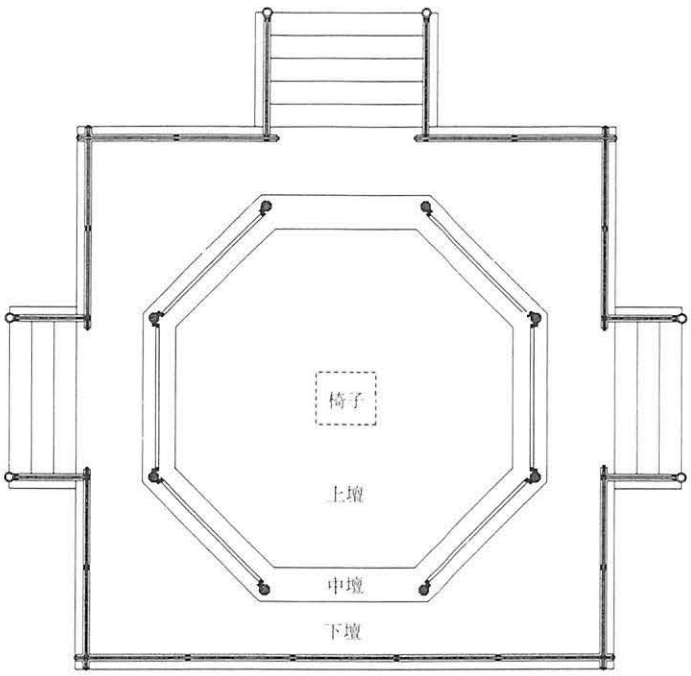


図2　高御座復原平面図　1：100

まとめ　文献上の検討から、高御座は常設で複数存在するのか、唯一にして臨時に設置するのかという研究史上の議論に対し、後者の可能性が高いとの見通しを得た。また、柱のたつ位置や平面形等に現存高御座とは異なる点をみいだし、復原模型の設計に反映させることができた。模型の細部意匠については、資料的制限もあり、思いきって決定せざるをえなかった面も少なくない。諸点について、各方面からのご批判をいただければ幸いである。

（古尾谷知浩・箱崎和久／平城宮跡発掘調査部）

平城宮東院西建物の遺構解釈と復原設計

平成８年度の平城宮跡東院庭園復原事業では、西建物の復原設計をおこなった。復原にあたっての基本的な考え方と復原建物としての西建物の意義を述べてみる。

遺構解釈と復原事業での位置づけ　西建物は、昭和54年度の第120次調査で検出した掘立柱建物遺構SB9360にあたる。桁行７間×梁間２間の身舎に西庇のついた南北棟で、身舎の柱間寸法は10尺等間、庇の出は14尺で柱間寸法よりも長い。身舎柱の掘形は一辺が約140cm、深さが遺構面から140～150cmとかなり大きいが、庇柱の掘形は一辺が60～80cm、深さも約70cmと小さい。

SB9360は、すでに復原された東院南門SB16000Cの北東に位置する。第243次および第245-1次調査（平成５年度）の所見によると、南門とSB9360は奈良時代後半のＥ期で共存しており、SB9360は南門から北にのびる道路の脇に設けられた施設と推定されている。また、SB9360の東側には、SB9360と柱筋をそろえて２条の掘立柱南北塀SA9289・SA9320Bがとおり、東院庭園地区と南門周辺地区を厳重に区画している。このように、西建物SB9360は東院庭園とは別の区画に含まれる建物であり、おそらく南門と関係の深い政務機関の施設の一つであったろう。したがって、西建物は東院庭園に対するアプローチとも本来は無縁なはずだが、復原事業の全体計画では、駐車場を西におき、西建物を経由して庭園に入ることになっている。このため、西建物は庭園への導入施設であると同時に、集客のための管理・休憩施設として位置づけている（61頁参照）。

平成５年度復原案の問題点　東院庭園復原全体計画を作成した平成５年度の段階では、西建物の上部構造は、今回とは異なる復原案を考えていた。身舎柱間10尺に対して庇の出が14尺と長い点に着目し、庇の垂木を身舎垂木の先端につなぐ打越垂木の技法を用いて、神社建築様式でいう「流造」のような構造を推定していたのである。しかし、この案には以下の問題点がある。

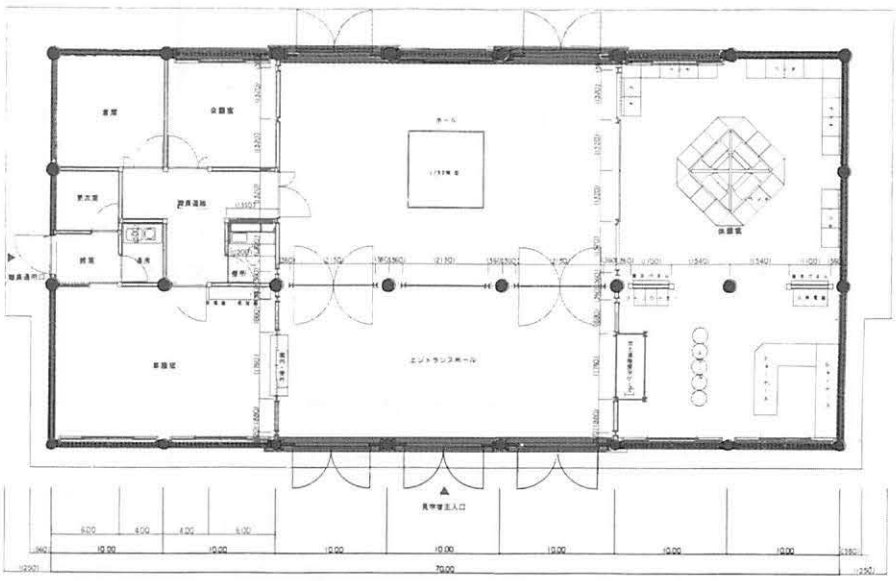
1)身舎と庇を一体化した流造のような構造ならば、身舎と庇の柱寸法がそれほど違わないはずだが、庇の柱穴は身舎のものに比べて小さすぎる。

2)流造のような屋根にすると、庇の軒先で雨仕舞に必要な屋根勾配が充分確保できない。

3)庇の出を身舎柱間寸法よりも長くする掘立柱建物は、平城宮・京で非常に多く検出されており、これらの建物が、すべて流造のような構造をしていたとは考えにくい。

また、第243次の所見では、SB9360身舎の南から４間目に間仕切りの柱穴を認めているが、今回の再検討では、それは別の建物の側柱列の一つであることが判明した。

復原再考　以上から西建物は、身舎と庇が一体化しない構造で、しかも身舎内部には間仕切りのない建物と考えられる。とくに、身舎に比べて庇の柱穴が著しく小さい点が注目される。これは身舎と庇の屋根構造・葺材が異なった可能性を示唆するものである。この場合、葺材は、①身舎＝瓦／庇＝桧皮、②身舎＝瓦／庇＝板、③身舎＝桧皮／庇＝板の組合せを想定できるが、SB9360周辺では奈良時代後半の軒瓦がほとんど出土しておらず、掘立柱と瓦屋根の複合性も考えにくいので、③身舎＝桧皮葺／庇＝板葺の案を採用した。以下、各部位について概説する。なお、設計の基準尺は、遺構の計測値から、１尺＝



西建物平面図 1：200　赤色付部分のみ古代建築（立面図・断面図も）

30.0cmに復原した。

(a)柱径：柱掘形の規模の差から身舎の柱径を根元で1.2尺（36.0cm）、柱頭で1.1尺（33.0cm）、庇の柱径を根元で9寸（27.0cm）、柱頭で8寸（24.0cm）とした。

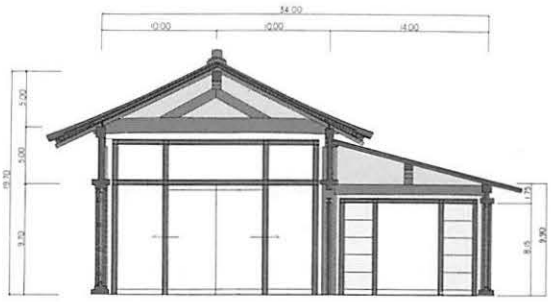
(b)柱間装置：庭園への導入部分をひろくとるため、正面は中央3間を扉口とし、両脇2間を連子窓とした。一方、背面については、背面らしく壁体を多くした。背面扉口30.0cmに復原した。

(c)構造：身舎の組物は舟肘木で、軒は一軒とした。軒の出は、庇のつく正面側で3尺、背面側で4尺とした。身舎の梁は直材、架構は叉首組とした。身舎の構造・寸法は、軒の出以外、復原した宮内省西南殿および西北殿にほぼ準じている。庇では柱頭に組物を用いず、柱が直接繋梁をうける構造とした。

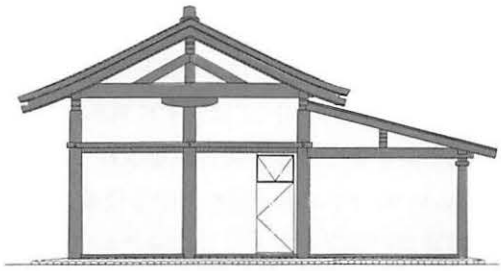
(d)庇屋根：庇の屋根は鎬つきの目板葺とした。目板葺材の寸法は、昭和修理前の法隆寺金堂・五重塔の裳階の板葺を参照した。屋根勾配、軒高の確保のため、身舎側柱の上端外側に台輪状の材をとおして板掛けの材とした。

現代建築としての西建物　すでに述べたように、西建物は東院庭園への導入施設であると同時に、管理・休憩の施設でもある。この複合的機能に対応するため、中央3間をエントランス兼通路、北側2間を管理事務所、南側2間を休憩スペースとした。このような現代的機能を充足させるため、建物内部に古代建築とは関係のない間仕切り等を設けなければならない。これについては、奈良時代の復原構造部分と現代建築として必要な構造部分を、一見して区別できるような配慮を考えた。たとえば間仕切り壁については、古代建築の白漆喰壁に対して、可能な限り、ガラスやステンレスパネルなどの現代的な素材を用いる。また、柱の取り付き部分は、独立したH型鋼をたてて間仕切り壁を支持することにより、古代建築の木柱と分離させる。もちろん、現代的な天井は張らず(管理事務所部分をのぞく)、古代建築の架構を露出させる。このほか、建築基準法や消防法上の問題点を解決するために、やむを得ず、壁体部分に小窓や扉を設けるが、これらは外観上目立たないよう工夫した。また、構造的に必要な桁行方向の耐震壁は、展示パネルや管理事務所の間仕切りとして利用するなど、現代的機能に還元した。

復原建物としての西建物の意義　今回復原した西建物の形態は、現存する文化財建造物にはみられないが、発掘事例には類似する平面を多数確認できる。このような片面庇付き掘立柱建物に対する一つの具体的な復原案を示したことの意義は大きいだろう。もっとも、便益施設を兼ねる建物として設計したために、西建物SB9360本来の性格に基づいた、純粋な古代建築としての復原ができたわけではない。しかし、設計上の最大の課題は、これまでの平城宮内の復原建物と異なり、現代的機能を古代建築の意匠・構造といかに共存させるかという点であった。このテーマに対し、現代的機能と古代建築の構造を完全に分離させ、便益施設としての用途を古代建築に内包させるという方法をとって答えてみた。この構造分離手法によって、見学者は現代的空間の中にいながら、古代の空間を感じることができるだろう。そして園内に足を踏み入れれば、古代の庭園と建物を体感でき、西建物はいわば現代と古代をつなぐ架け橋となる。



西建物　ホール・休憩室断面図　1：200



西建物　北立面図　1：200

遺跡の上にたつ復原建物には、たんなる復原建物以上の用途を求められる場合がある。西建物の設計はその命題に対する先駆的な解の一つに位置づけられるだろう。

なお、西建物の基本設計に関しては、鈴木嘉吉・岡田英男両先生にご指導を仰ぐとともに、西尾信広・手島知恵両氏（京都環境計画研究所）の全面的な協力をえた。

（箱崎和久・浅川滋男／平城宮跡発掘調査部）

発掘された庭園遺跡
古墳時代〜飛鳥時代の出土例

日本庭園史の研究に、発掘された庭園遺跡(発掘庭園)の資料が大きな寄与をなすようになっておよそ30年が経つ。現在、発掘庭園は部分的なものも含めると、全国で約230件が報告されており、年代的にも古墳時代から江戸時代までにわたる。発掘庭園については、『佛教芸術』109号(毎日新聞社、1976年)と192号(1990年)で特集が組まれたほか、『京都の庭園』(京都市文化財ブックス、1989年)では平安時代の庭園遺跡について、『発掘された古代の苑池』(学生社、1990年)では、主に飛鳥・奈良時代の庭園遺跡についてまとまった報告がなされている。また、『古代庭園の研究』(牛川喜幸京都大学学位論文、1993年)でも、発掘庭園の成果をもとにした論考が主要部分を占めている。

平城宮跡発掘調査部計測修景調査室では、かねてから発掘庭園の資料収集をおこなってきたが、1996年度に重点的な研究を実施し、新資料の収集とそのデータベース化を進めた。ここでは、上記掲載論文をはじめとした先行諸研究の成果も含め、古墳時代から飛鳥時代の庭園遺跡についてとりまとめ報告しておきたい。

古墳時代の庭園遺跡　城之越遺跡(三重県上野市、図1)は、1991年に発掘された古墳時代の遺跡である。木津川右岸、周囲を丘陵に囲まれた盆地の山裾部に位置するこの遺跡では、4世紀後半にさかのぼる流路の遺構が発見された。3ケ所の自然の湧水を玉石によって護岸して水量調節のための桝を作る。それぞれの桝から流れ出した流路は、おおむね自然流路を踏襲したものとみられ自然な屈曲を示すが、まず南の二本が合流、さらに北のものが合流して西方に流下する。流路両側の斜面には、古墳の葺石の技術を援用した石張りが施され、さらに流路合流地点には集中的に石が置かれ、あきらかに人為的に立てた石もみられる。この遺跡は、出土遺物から祭祀遺跡と位置づけられているが、その形態・意匠は、遣水(流れ)・洲浜・立石など奈良時代以降の日本庭園の意匠を想起させるものがある。共同体あるいは共同体を統率する支配者にとって、重要な屋外空間を一定の美意識に基づいて造形したのが庭園のはじまりと考えると、その役割の中心が祭祀であるのは当然である。城之越遺跡は、日本における庭園出現段階のひとつの形態を示すものであり、その意匠には、すでに後世の日本庭園の自然風景指向的な性格が看取できる。

南郷大東遺跡(奈良県御所市、5世紀)は、自然流路湾曲部に張り石を施し、流路中の建物への導水施設を設けたものである。阪原阪戸遺跡(奈良市、5世紀前半)は、自然流路を利用し湧水地点等に集石を施したもので、いずれも城之越遺跡と形態が異なるとはいえ、水辺祭祀の場である屋外空間の修景を地形にあわせておこなっている点で注目にあたいする。また、南紀寺遺跡(奈良市)で検出された井泉遺構は、中央付近に円形の水溜をともなう一辺4.5m、深さ50cmの方形石組である。水溜から溢れた湧水は、方池にひろがり、方池からのびる素掘溝で西北西に流出する構造をとる。5世紀中葉に築造され、後半まで存続したとみられる。この井泉遺構は水辺祭祀の場と推定されているが、その整形的な意匠には飛鳥時代の方池の萌芽をみる思いがする。

飛鳥時代の庭園遺跡　飛鳥時代の庭園を特徴づける意匠は方池である。これまでに発掘された方池のうち、規模

図1　城之越遺跡・流路遺構

図2　石神遺跡・方池遺構

図3　小墾田宮推定地・園池遺構

が確定できた最大のものが、多武峰西麓の緩傾斜地に立地する島庄遺跡の方池（奈良県明日香村）である。一辺約42ｍの隅丸方形で、深さは最大２ｍ以上。石積護岸をほぼ垂直に施し、底部には20～30㎝の平らな石を敷き詰める。池の北岸中央付近の池底に排水用の木樋を据えて、完全に水が抜ける構造となっている。方池の意匠は朝鮮半島に類例があることから、おそらく大陸の影響をうけたものであろう。築造されたのは、条里制以前の古地割にのることから７世紀前半で、９世紀ないし10世紀まで存続したものとみられる。この池を『日本書紀』推古天皇34年（626）５月条に記載のある蘇我馬子邸の池とみる説もあるが、池中に小島をもつ小池、という描写との相違が大きく、別物とみる方が妥当であろう。用途としては、大規模な方池という形態から考えて、たんなる鑑賞のためというよりも、仏教関連施設としての意味あいが強いように思える。

また、石神遺跡（明日香村）では方池が２基検出されており、一方は７世紀中葉の斉明朝の頃のもの（図２）、他方は７世紀後期の天武朝の頃のものと推定される。このうち前者は、１辺６ｍ、深さ80㎝、側壁には川原石を２～３段積み上げ、４隅は立石で押さえる構造をもつ。底は粘土上に小石を敷き詰めているが、取水・排水の施設は設けられておらず、使用時にのみ水を溜めたものとみられる。方池は、大規模な建物で囲われた石敷広場のなかにある。『日本書紀』斉明天皇６年(660)５月条には、石上池辺に須弥山像を作り粛慎に対する饗宴をおこなった、との記載がある。一方、明治35年(1902)、この付近で須弥山像が発見されている。この方池と須弥山像こそ、同条に記載された遺構・遺物であり、これらを重要な舞台装置として石敷広場で服属儀礼としての饗宴が執りおこなわれたのであろう。

明日香村では、このほかに坂田寺跡（７世紀前半）や平田キタガワ遺跡（７世紀）でも、方池の一部とみられる直線的な石積護岸がみつかっている。さらに、仙台市の郡山遺跡でも方池が検出され、方池が地方官衙にも築造されていたことがあきらかとなった。この方池は東西3.7ｍ、南北3.5ｍのほぼ正方形で、深さは80㎝、川原石を４～５段小口積みにし、底は円礫を敷き詰めていた。７世紀末の築造。形状や大きさ、石敷広場が同時期に併存する点で、石神遺跡の方池と類似し、中央官人による

図４　キジル第118窟（『中国石窟・キジル石窟２』平凡社、1984年）

蝦夷・粛慎に対する服属儀礼的饗宴の舞台装置として、石神遺跡と同様の用途に供されたものと推定される。

一方、こうした方池とは系統を異にする園池遺構も発見されている。上の宮遺跡（奈良県桜井市）で検出された園池遺構は、６世紀末から７世紀初頭にかけて存続したものである。直径約5.6ｍ、延長10ｍ以上の馬蹄形の石組溝（幅40㎝、深さ30～40㎝）の内側に石敷を施し、その中心部には石組の長方形池(1.5ｍ×2.6ｍ、深さ1.5ｍ)を設ける。さらに、そこを起点に石組排水溝（幅50㎝、深さ１～1.4ｍ)が北東方にのびる。他に類例をみない特異な形態であるが、どちらかといえば幾何学的な平面プランや石積の手法は、大陸からの影響が想定できる。出土遺物からみて、園池をともなう邸宅の居住者が高い地位・身分の人物であったことが推定できるが、園池の具体的な用途はあきらかでない。

小墾田宮推定地（奈良県明日香村）で検出された園池遺構（図３）は、不整円形・玉石組の池（南北2.4ｍ、東西2.8ｍ、深さ50㎝)と、池西南隅から発し南西方にＳ字状にのびる石組溝（幅25㎝、深さ20㎝）で構成される。この意匠もまた、自然景観を模したものとはいいがたく、大陸由来のものと考えられる。その平面形は中国新疆ウィグル自治区キジル千仏洞第118窟（４～５世紀）の窟項部壁画（図４）に多数描かれている不整円形の池から、Ｓ字状の溝が発する絵柄との類似が指摘でき、その関連性の検証が今後の大きな課題である。

また、前述した島庄遺跡の方池の東方で検出された流路遺構は、幅３～５ｍ、深さ1.2ｍ。自然の渓流を模した石組の護岸が施されている。7世紀中葉に築造され、末には埋め立てられている。この流路は、方池が盛んに築造される時代にあっても、一方で自然風景指向的な意匠が存在したことを示している。(小野健吉／平城宮跡発掘調査部)

養翠園・滴翠園の調査

本年度おこなった養翠園(和歌山市)、滴翠園(京都市)の調査は、ともに後年度に控える庭園改修にともない、実測図の作成を主眼としたものである。調査対象となる各庭園の面積、調査回数および日数は、養翠園が約27,000㎡（うち園池部分が約9,000㎡)、計６回、延べ26日間、滴翠園が約4,300㎡（うち園池部分が約900㎡)、計３回、延べ15日間である。調査にともない、養翠園では1/100、滴翠園では1/40で野帳を作成し、それぞれ1/200、1/50の清絵図と1/400、1/100の編集図（図１、図２）を作成した。

養翠園　―庭園の概要と保存整備―　養翠園は、文政年間（1818～30）に紀州徳川家第十代藩主治宝（はるとみ）が和歌山藩士山本理左衛門の下屋敷を改修し、西浜御殿の別墅「水軒御用地」の庭園として造営したのを始まりとしている。治宝の死後、「水軒御用地」は家老三浦家に下げわたされるが、明治21年に徳川家が買い戻し、これを昭和８年、藤井家に売却、昭和23年の農地買収令によって、現在は庭園の部分のみが残っている。藤井家ではこの養翠園の保存に努め、同29年より公開のため飛び石を新たに施すなどして改修・整備を手掛けるとともに、「養翠園保存協会」を設立し、養翠園は同33年に和歌山県指定文化財「名勝　紀藩水軒御用地」の指定を受けた。同36年には第二室戸台風来襲の折、庭園内浸水や多くの倒木などによって多大な被害を蒙ったが、よく復旧に努め、同45年に保存事業経営の安定化のために「株式会社養翠園」を設立した。平成元年には国指定名勝「養翠園」となり、現在に至っている。

庭園は池泉回遊式を主要な骨格とするが、大浦湾に面する汐入式の園池、敷地面積の1/3を占めるこの園池を利用した舟遊式、天神山・章魚頭姿山（たこずしさん）を背景とした借景式、中国西湖の風景を模した縮景式、露地など、種々の庭園様式が組み合わされている。

Ｌ字型の敷地は西辺と南辺を大浦湾に囲まれ、南側にある東西に長い園池を中心にひろがる。園池の北西には「養翠亭」（文政４年建築、平成３～６年改修）があり、園池南岸の狐山の石組や東方の中島、三ツ橋、天神山などを望む「御座の間」、あやめ池の正面に「御次御座敷」、露地をともなう茶室「実際庵」などが付属している。

養翠園は海浜地にありながら、とくに海景を取り入れず、平坦な地形と大浦湾に接する部分を「松ヶ枝堤」で仕切って閉じた庭園空間を形成している。松ケ枝堤は高さ約２ｍ、幅約５ｍの土手の上に、胸高直径20～60㎝の大分のクロマツを列植したもので、往時は湾岸に独特の風致をなしていたが、第二室戸台風以後、防潮のためのコンクリート堤防が堤の南側に接して設けられている。園内の植栽はこの「松ヶ枝堤」に代表されるように、大小のクロマツが大部分を占め、その他もウバメガシ、イヌマキ、マサキなど、耐潮性、防風性に富んだものを使用している。

園池は中島とこれに付属する三ツ橋、太鼓橋によってほぼ東西に二等分割される。庭石は紀州青石(緑泥片岩)を基調としており、護岸の石組はこれを石垣風に積むのを基本として一部を乱杭打ちとし、汀線は中島辺りを境に西側は自然風、東側は直線的な作りとなっている。紀州青石で作られた護岸は、築造以後の堆積などによって埋もれている部分があり、とくに南岸の狐山にみられる築山石組の本来の姿の解明には今後発掘調査等を含めた詳細な調査を必要とする。

今後、養翠園では「護岸の改修」「池の浚渫」「御門長屋の修理」などの事業を順次予定している。庭園内部だけではなく、天神山の借景や松ヶ枝堤など周辺環境を含めた名勝の保全を進めるためには、緑地や港湾など、関係他部局と協力し、緑の基本計画や都市マスタープランのなかで総合的に位置づけた保全計画が必要である。

（平澤　毅／平城宮跡発掘調査部）

図１　養翠園平面図

滴翠園　―洛中洛外図から読む築造年代―　西本願寺の東南隅にある滴翠園は、飛雲閣をめぐる庭園である。飛雲閣については、豊臣秀吉の京都邸第・聚楽第の遺構を移築したとの伝承が江戸時代からある。聚楽第遺構の移築説については、近年の解体修理の際の所見から否定的な見解が優勢であるが、なお、その真偽は決定的にはあきらかになっていない。飛雲閣が移築であるにせよ、新造にせよ、滴翠園の築造とは不可分の関係にある。滴翠園の築造およびその後の変遷については、文献史料と絵画資料を駆使した飛田範夫の論考(「西本願寺滴翠園の変遷」『史跡と美術』532号、1983年)がある。飛田は、洛中洛外図、なかでも《林家本》を手掛りに滴翠園の築造年代を考察しているが、《大阪市美術館本(田万家本)》に描かれた滴翠園の前身庭園および楼閣建物の存在をみおとしている。ここでは、二条城築造後の景観を描いた第二期洛中洛外図に属する《勝興寺本》と《大阪市美術館本》をとりあげて、築造年代を考察する。

《勝興寺本》の景観年代は、再建のなった方広寺大仏殿が描かれ、同寺鐘楼が描かれていないことから、慶長16年(1611)と元和元年(1615)の間と推定されている(日本屏風絵集成第11巻―洛中洛外』講談社、1978年)。左隻左下隅に描かれた西本願寺の東南隅をみると、塀にとりつく二層の建物と鐘楼が描かれるだけで、飛雲閣を思わせる建物はもちろん、池や庭園らしい木立なども全く描かれていない(図3)。一方、《大阪市美術館本》の景観年代は、内裏の形状と焼失以前の西本願寺の伽藍配置から、慶長19年(1614)と元和3年(1617)の間と推定されている(上掲書)。こちらには、鐘楼の南に平屋の建物が描かれ、さらにその南に園池が描かれている(図4)。園池は、堀川から導水したのであろう、東から直線的な水路が引き込まれる。北岸は、この水路北岸を延長したかたちで直線状にのびる。また、池の南岸には出島(または中島)とみられる突出部がある。この出島の東・北・西の護岸も直線状を呈し、池北岸からは木製反橋が架かる。さらに、この出島上には二層の楼閣建物が建つ。この出島西方の池南岸および西岸の護岸線は曲線を描き、池全体としては直線的な護岸と曲線的なそれとが併用されていることがわかる。《大阪市美術館本》に描かれたこの池を中心とする庭園が滴翠園の前身であり、楼閣建物が飛雲閣そのものではないにしても、少なくともその前身建物であることはあきらかであろう。

以上の結果、飛雲閣の前身建物とそれをめぐる庭園が西本願寺東南隅のこの場所に築造されたのは、両図の景観年代に関する上記の推定が正しいとの前提に立てば、元和元年(1615)から同3年(1617)の間に絞られる。また、小堀遠州が直線的なデザインを庭園に導入しはじめたのがこの時期であり、この庭園には時代の先端を行くデザインが採用されていたといえる。さらに、反橋の存在は池での舟遊びがなされた可能性が高いことを示し、描かれた楼閣建物にも飛雲閣同様の舟入りの施設があった可能性を示唆している。

(小野健吉／平城宮跡発掘調査部)

図2　本願寺滴翠園平面図

図3　《勝興寺本》

図4　《大阪市美術館本》

滋賀県の近世民家

調査・研究の経緯　平成７年度から３ヶ年計画で、滋賀県近世民家調査をおこなっている。滋賀県の近世民家に関する先行研究としては『滋賀県緊急民家調査』（滋賀県教育委員会、昭和41～43年）があるが、おもに近世中期までの民家を対象とした調査報告であり、近世末期、あるいは近世の伝統を鮮明に継承した近代初期の遺構についてはとりあげられていない。また、近年の都市化の進行や生活様式の変化により、滋賀県でも近世民家の遺構は急速に減少してきている。このような現状を踏まえて、全県下での調査が、県教育委員会により再度企画された。調査委員会は奈文研の建造物研究室を中心に、室谷誠一（福井工業大学教授）、吉見静子（岐阜女子大学教授）、山岸常人（京都大学助教授）の各氏を迎えて構成された。また、委員長は建造物研究室長がこれにあたる。

平成７年度は市町村主体の一次調査（所在調査）を実施し、50市町村で805件2095棟がリストアップされた。これをもとに、委員会で２次調査（詳細調査）対象を選びだし、13町の50件63棟について、調書作成、史料収集、聞き取り、平面実測、断面実測、敷地内配置、写真撮影などをおこなった。平成８年度は、36市町村の112件119棟について、５回に分けて２次調査を実施した。各回の日程と対象地域を表に示す。

日　程	対象市町村と２次調査件数
7/22-26	彦根市７　永源寺町３　愛東町２　湖東町１　秦荘町４　愛知川町１　豊郷町１　甲良町３　多賀町２　米原町４
8/5-9	長浜市６　山東町２　伊吹町１　浅井町２　西浅井町３　虎姫町２　湖北町４　マキノ町３　今津町３　新旭町３
9/9-13	大津市９　草津市２　守山市３　志賀町４　信楽町２　安曇川町３　高島町２　朽木村２
10/21-23	八日市市１　安土町５　蒲生町３　日野町５
11/18-20	近江八幡市４　中主町３　五個荘町３　能登川町４

近世の滋賀　滋賀県は周囲を山地に囲まれ、面積の６分の１を占める琵琶湖がその中央にあって、湖北・湖東・湖南・湖西の４地方に分ける。近世には湖東の彦根藩の他に大藩はなく、幕府領・他国大名領・旗本領・寺領などがモザイク状に入り交じる複雑な支配をうけた。「近江石帳」（文政６年）は、近江84万石を248家が分けあう様子を伝えている。一方、滋賀県は近畿と東海・北陸を結ぶ交通の要地でもある。東海道・中山道・北国街道・西近江路などの街道が整備され、琵琶湖の水運は沿岸各地を密接に結びつけた。さらには近江商人の活躍により物資・情報の伝達は活発で、封建的閉鎖性とは無縁な土地柄であったといえる。

このような地域的特性は、民家の様態に大きな影響を及ぼしている。地方ごとの特色に、周辺地域との交流の影響が複雑に組みあわさって、多様な形態をみせるのが滋賀県の民家といえる。ここでは平成８年度の２次調査対象から、特徴的な建物事例の概要を報告する。

西浅井町・ＨＴ家住宅　入母屋造、茅葺、妻入の小規模民家である。三和土仕上の土間、ニュウジ（モミガラ・ムシロ敷の土座）のダイドコロ、床上の座敷・寝間という古い空間構成をのこす。この家の土間は下足では決して入らず、掃除は雑巾掛け、日常はメザラ（竹簀子）でわたる。湖北地方東部を代表する余呉型の発展形と位置づけられるが、食い違いの平面や、土間上に掛けた十文字梁の交点に柱を立てるのは、越前地方の影響である。創建を示す資料はないが、19世紀前半の遺構であろう。

西浅井・ＨＴ家　土間・ニュウジ境の竈・炉

西浅井・ＨＴ家　平面　1：300

今津・ＹＦ家　平面　1：300

長浜・YS家　平面 1：300

朽木・SI家　座敷

朽木・SI家　平面 1：300

長浜・YS家　座敷・仏間境に立つ柱

近江八幡・YI家　断面 1：200

今津町・YF家住宅　入母屋造、茅葺（鉄板被せ）、平入の建物で、湖北地方西部を代表する大浦型の典型例である。平面は桁行方向に3分割し、前側全面に通した土間の中央部を入口とする。居室は2列×3室で、右手から座敷と寝間、デイ、ダイドコロとならぶ。前側の土間は入口左手を食堂、右手を寝室とするために床を張った。ダイドコロ奥も作業用の土間であった。明治中期の移築と伝えられ、前身建物は19世紀中頃の創建であろう。

長浜市・YS家住宅　中世に遡る歴史をもつ土豪の屋敷である。敷地外周には土塁・濠が残り、敷地内に自家の菩提寺をもつ。入母屋造、葦葺、平入の主屋は、数度の改修を受けているが、床上居室部の中央棟通りに、1間おきに柱を建てる古い形式が確認された(上図参照)。当初平面は整形六間取に復原される。創建を示す資料はないが、18世紀前半に遡りうる遺構である。

朽木村・SI家住宅　寄棟造、茅葺、平入の建物で、食違いの四間取平面をもつ。座敷は高い根太天井で、内法以上を2段の貫をみせた板壁とする独特の意匠である。ナンド（寝間）は当初3畳2室でダイドコロ側から入るが、1.5間の両端半間を板戸、中央半間を板壁とする特徴ある「納戸構え」に復原される。年代を示す資料はないが、集落内の同形式の建物（文政年間）との比較から19世紀初頭の創建と考えられる。県内他地域には類例をみないが、平面形式は京都府の「北山型」に属する。ただし小屋構造は叉首組で、北山型に特徴的なオダチ・トリイ組の形式はとらない。朽木村でも最も奥まった集落にあり、山越えで京都府美山町に至る。丹波地方の山村民家との影響関係をうかがわせる遺構である。

近江八幡市・YI家住宅　切妻造、桟瓦葺、平入の町家で、「耐震構造」の伝承がある。間口6.5間、奥行8.5間に達する大規模な建物であるが、セイの高い差物を多用し、二階床組の大引・根太で固めることによって、剛性を高めている。また、土間境では内法以上の壁に半間ごとに束を立て、貫を多用する様子もみられる。食い違いの平面も建物の変形を減じようとしたのであろうか。寛政6年（1794）の棟札が残るが、諸室の意匠はこれより新しく、小屋組にも改造の痕跡がある。創建は18世紀末で、19世紀中葉に改修を受けた遺構とみるべきであろう。

おわりに　平成7～8年度の2ケ年で、162件の詳細調査をおこなった。対象とした建物の大半は良好に維持されており、往時の姿と生活様式をよく伝えている。江戸時代中期に遡る可能性のある遺構も発見され、予想以上の成果が得られた。また民家を現代生活に適合させるための工夫が随所にみられ、民家遺構の将来を考える上で貴重な情報が収集できたものと考えている。一方、調査後に解体された建物があったことは残念である。1次調査の2割という限られた件数の調査ではあるが、滋賀県における近世民家の多様な展開をみることができた。この「多様性」を、平面・構造の両面から系統立てて理解していく作業が、今後の課題となるであろう。平成9年度は補足調査とテーマ別調査をおこない、年度末には報告書の刊行を予定している。　（長尾　充／建造物研究室）

「文化的景観」研究の課題

文化的景観の定義　世界遺産における文化的景観は3つのカテゴリーに分類される。第一は、公園や庭園のように「人間の意志によって設計され、意識的に創り出された景観」である。第二は「有機的に進化してきた景観」で、「進化の過程が過去のある時期に突然あるいは時代を越えて終止している残存景観」と「伝統的な生活様式と密接に結びつき、現代社会の中で活発な社会的役割を保ち、進化の過程が今なお進行中である継続中の景観」に分けられ、後者の事例としては、フィリピン、イフガオ地方の高地性棚田景観がある(1995年登録)。第三は自然的要素の強力な宗教的、芸術的または文化的な関連性によって定義される景観で「文化的複合景観」と訳される。我国の和歌や文学にあらわれる「名勝」もこのカテゴリーに入るが、棚田景観や「名勝」に指定されていない物件については、保存が危ぶまれており、以下に若干の研究課題を記す。

日本の棚田をめぐる状況　近年、写真集『たんぼ　―めぐる季節の物語―』(NTT出版、1994年)が話題に上るなど、棚田については一般の人々の間でも関心が高まっている。棚田の審美的な形態が稲作にかけた人々の営為を伝え、見る人つまり非耕作者の心を引きつけるのであろう。ところが、棚田の多くは大型機械化のできない立地条件にあり、耕作者に過酷な労働を強いる。棚田は農山村地域に分布し、耕作者の高齢化、地域社会の人口減少、減反による耕作放棄地の拡大など、社会環境・農業構造の変化を被って、その保全がきわめて難しい状況であるが、具体的な保護の取り組みもいくつか報告されている。第一は生活雑排水の流入しない安全性などを売り物にしたブランド化により農業経営を安定させ、景観を維持しようというものである。第二は棚田での耕作作業等を都市住民に開放し、地域社会との交流の場として保存をはかる試みなどである。後者の場合、棚田の稲作風景は保持できても、農業景観は都市住民のためのレクリエーション景観に変化する。保存するのは、地形の形態か、稲作にともなう農業景観か、景観の意味を含む社会システムかという問題を、農業経営者あるいは都市住民がそれぞれ生活者としての視点から論じる必要がある。

万葉ゆかりの地の現在　万葉集に詠まれた和歌山市の景勝地「和歌の浦」では、市末川河口に架けられた江戸時代末の石造アーチ橋である不老橋の隣に車道橋の建設が計画されたが、住民団体はこれを歴史的景観の破壊であるとして、公金の支出差し止めを求める訴訟を起こした。県側は海苔漁業と観光の沈滞からの脱却のため、体系的な交通システムの確立が必要で、新しい橋は新たな魅力の創造と主張した。また、歴史的風土特別保存地区の大和三山では、松が松くい虫などの被害でほとんど立ち枯れ状態となり、県側は松にかわってサクラやモミジを植え、四季を通じて楽しめる山にする計画をまとめたところ、万葉学者らは古代人の詠んだ三山は穏やかな緑であるから常緑樹を植えるべきと主張し、風景観の違いを鮮明にした。さらに、万葉歌人志貴皇子の陵墓とされる田原西陵、古事記編纂者太安麻呂の墓などが茶畑の中に点在する奈良市東部の田原にはヘリポートが計画され、静寂と歴史的環境を守ろうとする反対運動があった。これらの3例は、地域の将来像をどのように合意形成し、景観をどのようにコントロールしていくかという広域の景勝地保存の課題を示すものといえよう。

研究の課題　遺跡、遺物、歴史的建造物など文化遺産は、その価値を理解しやすいが、棚田景観や文学に表現された景観については、情緒的な側面が強く、社会的、経済的な要請に対抗し得るだけの保存理論が構築されてこなかった。風景の科学的な研究では、風土を自然と歴史に分け、さらに、目にみえる景観構成要素のみを分類、数量化して、いかにも客観的な手法で風景を評価する方法をとってきた。そのため文学というメディアを通して形成されたイメージなどは、近年まで景観研究の対象外であった。これらを文化的景観の対象とし、自然と歴史を一体的に把握する研究手法の開発が急がれよう。

(内田和伸／平城宮跡発掘調査部)

不老橋（和歌の浦）

「文化的景観」研究の課題

文化的景観の定義　世界遺産における文化的景観は3つのカテゴリーに分類される。第一は、公園や庭園のように「人間の意志によって設計され、意識的に創り出された景観」である。第二は「有機的に進化してきた景観」で、「進化の過程が過去のある時期に突然あるいは時代を越えて終止している残存景観」と「伝統的な生活様式と密接に結びつき、現代社会の中で活発な社会的役割を保ち、進化の過程が今なお進行中である継続中の景観」に分けられ、後者の事例としては、フィリピン、イフガオ地方の高地性棚田景観がある(1995年登録)。第三は自然的要素の強力な宗教的、芸術的または文化的な関連性によって定義される景観で「文化的複合景観」と訳される。我国の和歌や文学にあらわれる「名勝」もこのカテゴリーに入るが、棚田景観や「名勝」に指定されていない物件については、保存が危ぶまれており、以下に若干の研究課題を記す。

日本の棚田をめぐる状況　近年、写真集『たんぼ　―めぐる季節の物語―』(NTT出版、1994年)が話題に上るなど、棚田については一般の人々の間でも関心が高まっている。棚田の審美的な形態が稲作にかけた人々の営為を伝え、見る人つまり非耕作者の心を引きつけるのであろう。ところが、棚田の多くは大型機械化のできない立地条件にあり、耕作者に過酷な労働を強いる。棚田は農山村地域に分布し、耕作者の高齢化、地域社会の人口減少、減反による耕作放棄地の拡大など、社会環境・農業構造の変化を被って、その保全がきわめて難しい状況であるが、具体的な保護の取り組みもいくつか報告されている。第一は生活雑排水の流入しない安全性などを売り物にしたブランド化により農業経営を安定させ、景観を維持しようというものである。第二は棚田での耕作作業等を都市住民に開放し、地域社会との交流の場として保存をはかる試みなどである。後者の場合、棚田の稲作風景は保持できても、農業景観は都市住民のためのレクリエーション景観に変化する。保存するのは、地形の形態か、稲作にともなう農業景観か、景観の意味を含む社会システムかという問題を、農業経営者あるいは都市住民がそれぞれ生活者としての視点から論じる必要がある。

万葉ゆかりの地の現在　万葉集に詠まれた和歌山市の景勝地「和歌の浦」では、市末川河口に架けられた江戸時代末の石造アーチ橋である不老橋の隣に車道橋の建設が計画されたが、住民団体はこれを歴史的景観の破壊であるとして、公金の支出差し止めを求める訴訟を起こした。県側は海苔漁業と観光の沈滞からの脱却のため、体系的な交通システムの確立が必要で、新しい橋は新たな魅力の創造と主張した。また、歴史的風土特別保存地区の大和三山では、松が松くい虫などの被害でほとんど立ち枯れ状態となり、県側は松にかわってサクラやモミジを植え、四季を通じて楽しめる山にする計画をまとめたところ、万葉学者らは古代人の詠んだ三山は穏やかな緑であるから常緑樹を植えるべきと主張し、風景観の違いを鮮明にした。さらに、万葉歌人志貴皇子の陵墓とされる田原西陵、古事記編纂者太安麻呂の墓などが茶畑の中に点在する奈良市東部の田原にはヘリポートが計画され、静寂と歴史的環境を守ろうとする反対運動があった。これらの3例は、地域の将来像をどのように合意形成し、景観をどのようにコントロールしていくかという広域の景勝地保存の課題を示すものといえよう。

研究の課題　遺跡、遺物、歴史的建造物など文化遺産は、その価値を理解しやすいが、棚田景観や文学に表現された景観については、情緒的な側面が強く、社会的、経済的な要請に対抗し得るだけの保存理論が構築されてこなかった。風景の科学的な研究では、風土を自然と歴史に分け、さらに、目にみえる景観構成要素のみを分類、数量化して、いかにも客観的な手法で風景を評価する方法をとってきた。そのため文学というメディアを通して形成されたイメージなどは、近年まで景観研究の対象外であった。これらを文化的景観の対象とし、自然と歴史を一体的に把握する研究手法の開発が急がれよう。

(内田和伸／平城宮跡発掘調査部)

不老橋（和歌の浦）

遺跡探査で何がわかるか

遺跡探査という場合、通常は地下に埋没している遺構、遺物を地上から非破壊の方法で推定することをいう。しかし、最近では地上に遺存する石造、木造の建造物の内部診断や、発掘で検出された遺構の性格を推定する化学的方法もそれに含めて、文化財探査というように、ひろく理解することが始まっている。

地下の遺構、遺物を推定する物理探査の方法には各種あり、そのときの対象によって採用する方法も選択されるが、できる限り複数の測定原理の異なる方法を用いて、それらで得た結果を照合することが望ましく、それによって探査成果の信頼度もたかまる。

いずれの物理探査でも、求めているのは「土」と「土」の何らかの差異である。それを知ることにより、周囲と異なる土の範囲、形態や深さを限定する。あるいは、土中の「異物」の存在を推定する。この場合の異物としては、周囲の土と大きく質が違う、金属や空洞、孤立した大きな石などがあげられる。

土の判別が最も困難な対象例としては柱穴や竪穴住居がある。柱穴では、掘削に際しては内部の土は周辺に一時おき、柱を立てた後にその土を再度埋め戻す。すなわち、柱穴の内部と周囲の土には基本的差異がない。竪穴住居でも、通常、住居の中に堆積している土は周囲より徐々にもたらされたもので、内外の土質の差は小さいといえる。

物理探査の方法の中で、電気探査では、地下に電流を流すことにより土を判別する。周囲と異なる土質状態にある部分では、例えば濠や溝がある個所ではそのために水分が多く、したがって比抵抗が低かったり、礫や砂などが多ければ抵抗が高くなるわけである。

磁気探査では、土と土の差異は、土壌帯磁率の違いや熱残留磁気を帯びている個所を限定することにより求める。帯磁率をみるときには、土壌の内外で鉄など磁性体の含有量に差があれば、その違いで土が判別できると考える。熱残留磁気を帯びた個所は、地磁気に大きな影響を与えており、地磁気の異常な部分として観測される。

地中レーダー探査では、電波を地中へ強制的に送り込み、それの反射、屈折、減衰の状態から、土の差異や異物の存在を知る。電波は媒質の違う部分から多く反射する。金属や空洞あるいは孤立した大きな石など、周囲の土質と質が著しく異なる個所では大きな反射がおこり、土層が違う境界面でも反射する。

以上のように、各種探査方法はそれぞれ異なる物理的要因から土を判別したり、異物の存在を推定する。言葉を換えていえば、求めているのは何らかの要素で判別できた現象や、それの規模や形態が知られるのみで、如何なる遺構であるのかの性格、どのような材質の遺物であるのかの判断は、遺跡調査にたずさわる者がしなくてはならない。

そのためには、調査者は探査で限定できた要因が、何に起因する可能性があるかを知る必要がある。すなわち、各探査の方法で求めている物理的要素から考えられる可能性を限定しなくてはならない。たとえば、線状に連続する幅狭い土質の異なる構造が捉えられた場合、電気探査でみたとき、その部分が低比抵抗であれば溝や濠である可能性があるし、高比抵抗であれば道路とか石からなる構造物を考えなくてはならないだろう。

このような探査の方法や原理を理解することのほかに、探査を採用した遺跡における考古学的基礎調査を照合することも重要である。散布している遺物からの年代推定や立地と地形観察により、遺跡の性格も限定して考えられる。周辺遺跡における既往の調査成果を検討することも、欠かすことのできない基礎作業である。

ある現場へ臨んで探査を採用する実際においては、当然ながら、目的をもってそれをおこなう。古墳であれば、主体部を探るとか、周濠の規模や形態を求めるとか、葺石の存在位置を知りたいなどである。この例では、求める対象がある概略の位置はわかるし、測定すべき範囲も限定できる。

しかし、住居跡すなわち集落を対象とする場合には、個々の住居の位置は予め推定できない。また、それ以外の溝や土坑など各種の遺構が存在することも仮定しておかなくてはならない。

一度の探査で、多数の性格の異なる遺構や遺物を対象とするのは難しいといえるのである。

（西村　康／埋蔵文化財センター）

発掘調査支援機械システムの試作研究

本研究は、遺跡発掘作業の「迅速化」「省力化」「精密化」を図ることを目的として、発掘調査支援に有効な機械システムを新たに考案し、試作と実験をおこなうものである。平成5年度から「掘削」と「測定」の2点に重点を置いて研究を進めている。

掘削機械　これまでに、遺物包含層の掘削を対象とし、平刃やワイヤーブラシなどを用いた回転掘削刃および、排土処理装置を試作して実験をおこない、その性能と問題点について検討を進めてきた。これらの検討の中で、1)掘削中に出現する遺物を損傷または破壊してしまう可能性があること、2)掘削後の遺構面の状態が従来の手堀りによる状態と異なること、の2点が課題となった。そこで遺物を傷つけず、掘削後、遺構表面を確認しやすくする方法として、手による掘削動作をそのまま機械で実現する方向を検討した。

本体内部には、中子を介して前後に往復運動する掘削刃が4本設置されており、刃先は掘削面と一定の角度で接する。実験上、動力源（AC100V）を圧縮空気とした。空気圧シリンダーの動作により、掘削、掘削刃跳ね上げ、排土ワイパーの操作をおこなうが、これらの制御は本体に搭載されたマイコンによる。掘削実験では、従来の手作業とほとんど変わらない掘削面を再現できたが、凹凸の激しい掘削面では対応が難しい問題点が残り、掘削刃押し付け力の自動調整機構の付加などが課題となった。

また、遺構面清掃にともなう排土の処理や、降雨後遺構上に残存する水の速やかな排出など、掘削作業に付随する作業の機械力による効率化も試みている。遺跡発掘作業全体の支援のためには、掘削作業以外での効率化をいかに図るかを再検討することも重要な課題である。

（内田昭人／埋蔵文化財センター）

発掘調査支援データベースシステム　従来より開発を進めてきた本システムは、現状で「CG平板測量システム」と「遺構データ管理システム」の2つのサブシステムからなる構成をとっている。主な使用機器は、発掘現場作業用の自動追尾トータルステーション、ペンノート型パソコン、屋内作業用のデスクトップ型パソコンである。

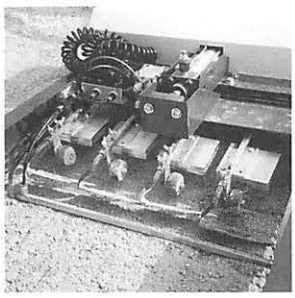
CG平板測量システムは、従来、調査員の実測や空中写真によって作成してきた遺構図を、発掘現場において、直接、3次元データとしてモニタリングし、デジタルマップを作成するシステムである。また、同時に遺物の取上げ位置や属性情報などのデータも記録する。

遺構データ管理システムは、発掘現場で採取したデジタルデータを管理するものである。地形図や既存の発掘調査の成果（遺構図、発掘調査所見、遺物データ、画像データなど）をあらかじめ入力しておくことによって、新たなデータと既往調査の関係を即座に確認することができ、日々の調査の検討に役立てるものである。

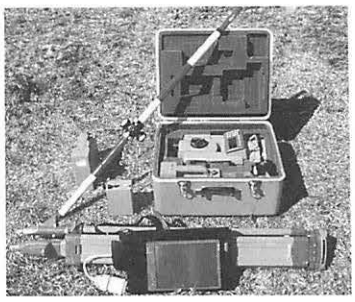
一般に普及率の高いMS-Windows用のCADをシステム全体の中心にしていることから汎用性は高く、必要なアドインソフトウェアの開発をおこなうことで様々な発展の可能性をもっている。たとえば、遺構のデジタルマッピングデータをもとに、CGによる発掘遺跡復原のシミュレーション、整備基本計画の作成や造成土量の計算など、遺跡復原整備設計支援ツールを加えたシステムに発展させるなど、発掘調査支援の範囲を広げることができる。現在、システム自体やGUIを改良するとともに、発掘調査現場での段取りや調査の進行状況において、このシステムをどの過程にどのようなかたちで導入すれば、より有効な発掘調査支援をおこなえるのかを検証している。

（平澤　毅／平城宮跡発掘調査部）

掘削実験装置の外観



装置内掘削刃部



「CG平板測量システム」機器

測量準備状態

文化財建造物写真ガラス乾板のデジタル・データ化

奈文研では、かつて文化庁建造物課が保管していた文化財建造物の写真ガラス乾板を約32,000枚所有している。

写真は戦前から昭和30年代に撮影されたもので、なかには戦災等で焼失した建物の写真、過去の修理前・修理中の写真など、現在ではみられない姿を撮影したものがあり、これら乾板は高い資料価値をもっている。しかし、乾板は当研究所に移された時点で、すでにガラスが割れたり、膜面の剝離、銀化等、劣化が甚だしかった。現在は空調設備の整った保管庫に保存しているものの、今後とも乾板の劣化を完全にくいとめることは不可能である。

乾板の整理・保管に際しては、台帳の作成と同時に35ミリ撮影をおこなって検索用アルバムを作成した。現段階では、台帳・アルバムを一般には公開していないが、関係機関からの要請があれば、必要な写真の焼き付けを提供している。焼き付けは、ガラス乾板からの密着焼き付けをおこなっているが、ガラスが脆弱なうえに、原板が四ツ切もしくはキャビネサイズと大きく、その作業を慎重におこなっているものの、作業時における破損の危険性が大きい。

このような状況のもと、将来的な乾板の劣化、焼き付け作業時の破損を回避するため、さらには、資料の公開を目指して、ガラス乾板のCD-ROM化に着手し、本年度は約700枚の乾板をデータ化した。

画像データの保存形式は、現在広く一般に利用されているTIFF形式とし、原板がすべてモノクロ写真であるところから、モノクログレースケール(解像度は、フォトCDの64ベース相当)が最適と判断した。今後、ハードやソフトが進化しても、データはそのまま利用可能である。

デジタルデータから得られる精度の高い焼き付けは、フィルム出力したものからのプリントである。フィルムを作成することによって、大きなサイズへの引き伸ばしにも対応できる。また、デジタルデータからのプリンター出力についても、プリンターの性能に大きく左右されるが、レーザー露光熱現像転写方式のプリンターを使用すれば、再現域が若干狭いものの、原板からの焼き付けに近い画質が得られる。したがって、今後原板の劣化が進んでも、このデータが保存されている限りは半永久的な資料となり得る。今後も、この作業を継続し、データ検索システムにのせたうえで、関係機関には公開をおこなって、資料要求にも応える予定である。

上：乾板からの焼き付け
中：デジタルデータをフィルム出力したものからの焼き付け
下：デジタルデータからのプリンター出力したもの；プリンターはピクトログラフィーを使用　(いずれも1/2縮小)

(井上直夫・島田敏男／飛鳥藤原宮跡発掘調査部)

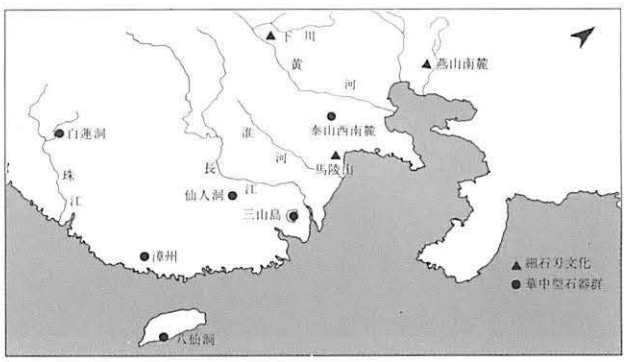
華中・華北の後期旧石器文化

平成８年12月、中国江蘇省の蘇州市博物館を訪れる機会に恵まれ、太湖三山島の旧石器を見学することができた。この石器については、陳淳氏らが、フリントなどを用いたもので、小形の剥片や石核が多く、狭義の石器には削器、尖頭石器、石錐、敲打器があること、多くの剥片に鋸歯状の使用痕がみられる点が特徴と報告している。今回の見学でも、一般的に小形であり、剥片の多くには打面調整や頭部調整、さらには二次加工もほとんどみることができないことを確認した。さまざまな調整を用いない単純な手法で剥離した剥片を、そのまま利用するという石器使用のあり方を推定できる。筆者がかつて実際に観察した資料では、広西チワン族自治区白蓮洞、台湾・八仙洞の石器群と類似していた。また、江西省仙人洞下層や福建省漳州などの石器群も同様の特徴をもつようで、この種の石器群は、中国大陸の華中以南の海寄りの地域に展開しているといえる。ここでは、これらを華中型石器群と仮称する。この華中型石器群は、発達した骨角器が共伴した可能性が高く、こうした石器の単純さは、石器への依存度が低く、石器の役割が比較的限定されていたことを反映していると考えている。華中型石器群の年代は、白蓮洞や仙人洞の年代測定値から約２万年前以後、後期旧石器時代末である。この時期、淮河―秦嶺山脈以北では細石刃文化が展開する。細石刃文化では、石器は華中型石器群と大きく異なり、様々な器種に分化しており、道具の中できわめて大きな位置を占めていたとみなすことができる。

こうした南北の石器の差はなぜ生じたのだろうか。一つには、それぞれの石器群がおかれた環境差と、それに起因する生活様式の違いによると考えている。華中型石器群が分布する地域は、より低緯度で、海にも近いことから、比較的温暖で氷期の影響も少なく、森林が優勢であったとされている。華中型石器群の遺跡では、遺物量の比較的多い洞穴遺跡が多く、出土する動物種も多種で、食用にした淡水性巻貝の貝層をもつ例もしばしばみられる。これらから、さまざまな資源を利用しつつ、比較的長期にわたる固定的なベースキャンプを中心とした生活様式を想定できる。比較的多種の資源が分散して存在していたと考えられる森林環境下で、華中型石器群を残した人びとは、ある特定の資源を偏重することなく、多様な資源を利用することで、さまざまな危機を回避する戦略を選んだようである。逆に、細石刃文化が盛行した地域は、最終氷期の影響が強く、乾燥化が進み、草原が優勢であったところである。細石刃文化では、河北省の燕山南麓や山東・江蘇両省の馬陵山、山西省の下川など、小規模な遺跡が密集して分布するケースが多く、遺跡からはシカ・ウマ・ガゼルなど、比較的限定された種類の動物骨が出土する。これらから、細石刃文化の集団は、特定の動物の狩猟に依存、頻繁な移動を繰り返す生活を送っていたと判断している。草原という、少種の資源がパッチ状に分布したであろう環境下で、細石刃文化の人びとは、少数の資源に依存度をたかめ、これを効率的に利用する戦略をとったと考えられる。こうした生業様式の差が、石器・石材に対する依存度の差を生み、大きな外見上の差異が顕示されたのだろう。

ここで興味深いのは、山東省の泰山西南麓や河北省黄驊などから、華中型に類似した石器群が検出されていることである。後期旧石器時代末期に、細石刃文化が展開していた地域の一部で、細石刃文化から華中型石器群への転換、つまり生活様式の転換がおこなわれていた可能性を示すからである。また最近、華中型石器群・細石刃文化いずれでも、１万年前以前にさかのぼるきわめて古い土器が共伴することが判明してきた。華北の新石器文化の源流がどちらにあるかを考える上でも、この現象は重要であろう。華中・華北の後期旧石器文化には多くの未解決で興味深い問題が残っている。今後とも、研究を続けたい。

（加藤真二／平城宮跡発掘調査部）



関連遺跡分布図

古代壁画の色と再現

中国古墳壁画の調査・保存に関する中日共同研究

中国唐代の古墳壁画は、地下を掘りだしてつくった墓道や墓室の壁面に描かれている。墓道の壁面には漆喰を塗って、その上に絵を描いている。なかには、漆喰を塗らずに土面にじかに絵を描いている例もあるという。墓室には、墓道と同じ手法で絵を描いている例もあるが、多くの場合、墓室は塼を積み上げてつくっており、塼の表面に漆喰を塗り、絵を描いている。唐代の古墳壁画では、房陵公主、永泰公主、章懐太子、懿徳太子などの墓から発見されたものがよく知られている。

陝西省では、こうした古墳壁画の保存について、壁画面を薄く剝ぎ取って室内に持ち帰り保存する方式をとっている。70年ほど前からこの手法で剝ぎ取り保存しており、現在までにおよそ800点の壁画を保存し、あるいは博物館で展示公開している。ヨーロッパでも、フレスコ画を同様の手法で剝ぎ取り、保存してきたが、最近ではこの種の保存作業はあまりみられないようである。

陝西省考古研究所では、恵荘太子墓（玄宗皇帝の第三子）の発掘調査と壁画の剝ぎ取りを実施した。図1は、発掘調査中の恵荘太子墓の全景、図2は、墓道内の壁画の剝ぎ取り状況を示す。桃ヤニ（桃胶）を水で溶いた接着剤を塗布し、布を張りつけて画面を補強し、剝ぎ取る。この接着剤は水に可溶なので、必要に応じて、一度張りつけた布を、容易に取りはずすことができる。

古墳の墓道は、当初から土で埋めもどしている。そのため、壁画は土中に埋まった状態にあり、やや湿潤な環境を保っているのが普通である。土中では光を受けることもなく、温度も低く安定しているので、顔料に対しての保存環境はむしろ良好といえよう。しかし、いったん掘り出され、室内に運ばれた段階から、褪色がはじまり、顔料が剝落するものもある。

当研究所は、平成8年度から中国・陝西省文物管理局・陝西歴史博物館・陝西省考古研究所・陝西省文物保護中心と「中国古墳壁画の総合的調査と保存法の開発研究」（代表者・田中琢）に関する共同研究をおこなっている。壁画の保存問題は、たんに保存環境の制御というばかりでなく、保存技術や保存材料そのものの改善改良、あるいは開発も必要である。

共同研究では、以下のような研究課題をとりあげることにした。すなわち、①光、とくに紫外線の顔料に及ぼす影響の究明、紫外線に対する抵抗力の小さい顔料、逆に比較的抵抗力がある顔料などの確認をおこなうこと、②壁画の下地である漆喰は、長年月の間に地下水などの影響を受けて化学的変化を起こす可能性があり、化学的な変化が顔料に及ぼす化学的影響がありえるかどうかの実験的解析、③壁画は単色で描くばかりではない。複数の色を混ぜた混色も使う。混色の褪色に関するメカニズムの解明、④顔料の剝落が顔料の新しい層を披瀝し、さらに褪色を促進する。つまり、顔料の剝落が壁画全体の色相や色調を微妙に変化させることがある。剝落の対策の研究も重要課題である。

褪色試験に先立ち、まず従来の古代壁画顔料の同定結果をもとにし、また美術史関連資料などを参考にしながら、古代に使われていたであろうすべての顔料をリストアップした。そして、実際に絵を描く要領で、方形の和紙片（縦6cm×横5cm）に各種の顔料を塗り、試験用の色見本を作成した。これらの試験片は、研究室内で暴露し、褪色状況を観察し、逐次分析することにしている。色見本は、同一のものを2セット作成し、中国陝西省と当研究所において暴露し、褪色状況の観察と逐次分析をおこなう。また、②の問題点を究明するため、板に漆喰を塗り、その上に各種の顔料を塗り、和紙の色見本と同様に褪色試験を実施中である。

わが国における古代壁画の代表例は、奈良県法隆寺金堂の壁画であろう。1990年、法隆寺のものとほぼ同時期の古代寺院壁画が鳥取県上淀廃寺跡から出土した。それ

図1　発掘中の恵荘太子墓

表1　古代の使用顔料一覧(山崎一雄氏作成の表に追加)

種　類	九州装飾古墳	高松塚	法隆寺	上淀廃寺
赤	不純なベンガラ	ベンガラ 朱	ベンガラ 朱 鉛　丹	ベンガラ 朱 鉛　丹
黄	黄色粘土	黄　土	黄　土 密 陀 僧	黄　土 密陀僧？
緑	緑色岩石粉末	緑　青	緑　青	緑　青
青	—	群　青	群　青	群　青
白	白色粘土	不　明 下地漆喰	白　土	白　土
黒	炭　素 マンガン鉱物	墨	墨	墨

表2　各種顔料の熱変化

顔　料　名	化　学　成　分	火災による変化
ベンガラ 朱土・紫土・代赭 (鉛　丹) 朱	酸化鉄(Fe_2O_3) 四三酸化鉛(Pb_3O_4) 硫化水銀(HgS)	不変(鉄、酸化鉄) 密陀僧(PbO)に変化 揮発分解し、消失する
黄　土 (密陀僧)	含水酸化鉄($Fe_2O_3 \cdot nH_2O$) 一酸化鉛(PbO)	水分を失い、赤色に変化 溶融するが、変色せず
緑　青	塩基性炭酸銅 ($CuCO_3 \cdot Cu(OH)_2$) 鉱物名：孔雀石	酸化第一銅、酸化第二銅
群青	塩基性炭酸銅 ($2CuCo_3 \cdot Cu(OH)_2$) 鉱物名：藍銅鉱	酸化第一銅、酸化第二銅
墨	炭　素	消失する
白　土	珪酸アルミニウム	水分を失うが、外見は不変

図2　恵荘太子墓壁画転写作業

までは日本の古代仏教壁画の遺例は法隆寺金堂壁画しかなく、数少ない壁画資料の発見となった。しかしながら、上淀廃寺の壁画は火災のために熱を受けて変色したものであり、中国の古墳壁画にみられるような、長年月の時空を経て褪色したものとは異なっている。

褪色した顔料の分析をもとに当初の色の再現を試みることも、壁画研究には重要なことである。第一段階として、上淀廃寺出土の壁画片を分析試料として顔料の同定を試みた。顔料は熱をうけると変質し、あるいは消失する。上淀廃寺出土の壁画片からは、鉄や酸化鉄を検出した。古代の赤色顔料には、酸化鉄を主体にしたベンガラがあり、それは熱をうけても変化することなく、安定した酸化鉄のままである。赤色顔料のうち、鉛丹は熱をうけると密陀僧に変化する。したがって、鉛成分を検出すれば、そこに鉛丹か密陀僧が存在したことがわかる。壁画のモチーフ別に美術史的な観点から検討して、いずれかを推定した。朱は揮発分解して消失するので、化学分析をしても主成分の水銀などを検出することはない。しかし、古代壁画の実例をもとに、あるいは美術史的な見地からすると、たとえば、神将像の唇部分には朱を塗っている例が多い。被災した像の唇部分から水銀を検出しなかったことが、逆に朱の存在を示しているということもできる。

被災したものに限らず、分析化学だけでは壁画の同定には限界がある。美術史や画家などとの共同作業によってこそ、より確かな分析的研究を可能にする。その他の顔料についても同じように分析し、各分野との共同作業を得て、上淀廃寺出土壁画については、赤・黄・緑・青・白・黒の6系統9種類の顔料を同定することができた。

法隆寺金堂壁画では、金堂が焼損する前に、顔料の同定作業がおこなわれており、白・赤・黄・緑・青・紫・黒色の7系統11種類の顔料が確認されている。白色系の顔料では、白土（珪酸アルミニウム）・胡粉（炭酸カルシウム）の2種の顔料を同定している。以下、赤色系では朱（硫化水銀）・鉛丹（四三酸化鉛）・ベンガラ（酸化鉄）の3種、黄色系では黄土（含水酸化鉄）・密陀僧（一酸化鉛）の2種、緑色系では岩緑青（塩基性炭酸銅）、青色系では岩群青（塩基性炭酸銅）、紫色系では明白ではないが、何らかの混合物である。黒色系では墨（炭素）が使用されていることを確認している。

日本の古墳壁画では、高松塚古墳の壁画が有名である。そのほか、装飾古墳にみられる壁画がある。とくに、九州北部地方に装飾古墳が集中して存在している。およそ、5世紀から6世紀にかけてつくられたものである。これらの装飾古墳をはじめ、極彩色の高松塚古墳壁画、法隆寺金堂壁画、そして、上淀廃寺出土壁画に認められた顔料を表1にまとめた。また、表2には、各種の顔料が熱を受けた場合の変化を示している。(沢田正昭／埋蔵文化財センター、田中　琢／所長、町田　章／平城宮跡発掘調査部)

アンコール遺跡群の調査

奈良国立文化財研究所は、文化庁が平成5年度より開始した「アンコール文化遺産保護共同研究事業」において、カンボジアでの現地調査と、日本における研究の実際を担当している。

事業を開始した当初の3年間は、予備調査の期間と位置づけて、現地調査では、諸外国を含む各調査隊がおこなっている現状の研究と実績を点検し、従来取り組まれていない課題、あるいは研究として希薄な点を洗いだし、独自に貢献できる項目の選定に努めてきた。

その結果、われわれの取り組む事業としては、当分の間、1)基準点測量や写真測量を含む測量調査、2)遺跡探査、3)柱穴など詳細な土壌判別が要求される精密発掘調査などに目標をおき、事業を推進することにしている。

遺跡探査では、乾期と雨期と季節を違えて実験測定を実施して、探査の実際における問題点をあきらかにしながら、探査成果も得ている。

ここで今までに採用した探査の方法は電気探査、磁気探査、地中レーダー探査である。

電気探査　イギリスGeoscan社製のRM15型装置を用いた測定で、2極法を基本に検討した。乾期には地表面と上層50～60cm程度までが極度に乾燥しているために、電極と地面との十分なコンタクトがとれず、有効な測定はできない。しかし、雨期であれば目的通りの測定が可能なことが判明した。

磁気探査　これもイギリスGeoscan社製の装置であるFM18型のフラックスゲートGradiometerを採用した。磁気傾斜を求める本装置による測定では、遺跡が低緯度に位置するために、磁気異常の変化が小さく観測されることにまず気がついた。

改めて考えれば当然のことながら、測定には細心の注意が要求され、熟練した測定者でないと、信頼できる観測値が得られない点が注目される。

また、現地は雨期、乾期をとわず常時気温が高いので、その熱によりフラックスゲートのセンサーとアンプは影響を受けることも注意される。そのために、測定値はドリフトして、短時間の測定でも変化する。

そして、このドリフトはどうやら直線状の変化ではなく、不規則であることも確認した。したがって、通常おこなう補正の方法は有効ではなく、独自の手法を用いる必要があった。

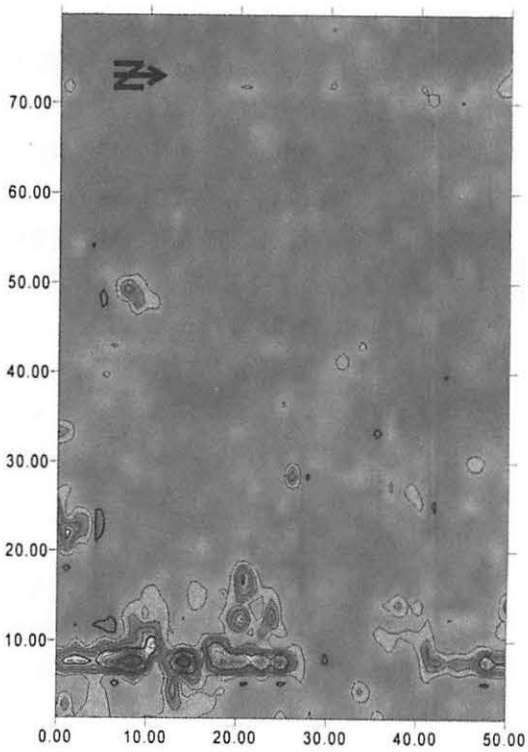
地中レーダー探査　アメリカG.S.S.I.社製SIR-2型装置で、300MHzアンテナを用いて検討した。

この方法では、乾期のみの測定であるが、深さ約2m程度までであれば、有効な測定ができることを認めた。また、乾期であっても石造の構造物が明瞭に捉えられることが確認できている。

測定の一例がスラ・スラン沐池の西側における測定である(口絵参照)。ここでは、小規模な火葬墓を探ることを目的として実験的に探査したものであるが、結果には南北方向に連なる、反射の大きな構造物のあることを認めた。探査位置の北方で、先年、発掘調査をしたフランス隊の結果を参考にすると、この構造物は石組みの溝であることは、ほぼ間違いないといえる。

アンコール遺跡において、はじめて探査の方法で確実な遺構をあきらかにできたのである。

(西村　康／埋蔵文化財センター、杉山　洋／飛鳥資料館)



スラ・スラン沐池西側での探査結果
(地中レーダー平面図　20-30ns)

II 事業の概要

II-1. 調査と研究 42

飛鳥藤原京の発掘調査 42

平城京の発掘調査 42

建造物の調査と研究 43

書跡資料の調査 43

埋蔵文化財センターの研究活動 44

国際学術交流 45

1．国際学術交流の現状 45

2．中国社会科学院との第2次友好共同研究 45

3．唐大明宮含元殿の保存整備事業への協力 46

4．遼寧省文物考古研究所との共同研究 46

5．南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究 47

6．アンコール文化遺産保護共同研究事業 47

在外研修の成果 50

公開講演会 51

研究集会 52

文部省科学研究費助成研究 54

学会・研究会等の活動 56

調査研究彙報 57

II-2. 研修・指導と教育 58

埋蔵文化財センターの研修と指導 58

京都大学大学院人間・環境学研究科 59

II-3. 遺跡整備・復原事業と展示 60

平城宮跡・藤原宮跡等の整備 60

1．朱雀門の復原事業 60

2．東院庭園の復原事業 61

3．宮内省築地塀および南門の復原事業 62

4．第一次大極殿の基本設計と構造実験 63

5．施設整備その他 64

飛鳥資料館特別展と山田寺回廊再現 65

II-1. 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

飛鳥・藤原地域では1996年度に30件の発掘調査をおこなった。以下、主要な調査を概観する。

藤原宮関係の調査は7件。西方官衙南地区の調査（第82次）では、藤原宮期には遺構が希薄であることを確認、宮に先行する条坊遺構（西二坊坊間路、五条大路）も検出した。坊間路側溝からは「評」木簡が出土。下層の古墳時代の水田、川などは四分遺跡北辺の状況を示す。

藤原京関係は9件。右京一条一坊西北坪の調査（第81次）では、南北棟を主体とする小規模な掘立柱建物、井戸、土坑等からなる遺構群を検出し、工房関係遺物や和同銭など注目される遺物が出土し、宮北方における坪内の様相をうかがう好資料を得た。左京七条（第81-1次）では、東三坊坊間路とその東側溝、および側溝を埋めて設けられた南北塀を検出している。

飛鳥関係は12件。水落遺跡（水落遺跡第9次）では、水時計跡の東南に隣接して、飛鳥時代の大規模な四面庇付東西棟掘立柱建物を検出。飛鳥寺西門地区の調査（飛鳥寺1996-1次）は、40年ぶりに西門跡を再検出し、構造、規模を再確認するとともに、門西方で、土管暗渠、石組み大溝、掘立柱南北塀や、石列など7世紀の前半から後半に至る詳細な変遷をあきらかにした。飛鳥寺寺域内の調査（飛鳥寺1996-3次）では、西面大垣、暗渠などを確認。飛鳥寺東南部の調査（第84次）では、7～8世紀代の東西溝、周囲に石敷をめぐらす井戸などを検出。飛鳥寺寺域区画施設や飛鳥池工房（1991年調査）との関連が課題で、調査は1997年度も継続する。川原寺寺域西部の調査（川原寺1996-1次）では、木樋暗渠、築地などを検出し、寺域西南部の調査（川原寺1996-2次）では、寺の創建に関わるとみられる掘立柱建物を検出した。山田寺南面東回廊の調査（山田寺第10次）は、保存良好な地覆材や屋根瓦の状況から回廊の建設から廃絶に至るプロセスを解明し、坂田寺（坂田寺1996-1次）の調査では、西面回廊の石組の内側雨落溝を検出した。

以上のほかに、桜井市吉備における調査（第81-14・16次）で、7世紀半ばの大規模な寺院跡を確認し、「吉備池廃寺」（きびいけはいじ）と命名した。金堂と推定される巨大な版築基壇や、出土瓦などから、舒明天皇が建立した百済大寺の可能性が高い。以上の調査成果の詳細については、年報IIを参照されたい。なお、発掘調査にともなう現地説明会は、以下の日時におこなった。

（千田剛道）

6月15日　山田寺第10次（南面東回廊）佐川正敏・藤田盟児
10月5日　飛鳥寺西門地区　花谷浩
3月1日　吉備池廃寺　小澤毅

II-1. 調査と研究

平城京の発掘調査

1996年度に平城宮跡発掘調査部がおこなった発掘調査は、平城宮跡６件、平城京跡17件、京内寺院・その他３件であった。この26件の調査のうち、学術発掘および史跡整備にともなうものは７件8570㎡、住宅建設などにともなう緊急調査は19件4562㎡であった。部長・写真専門員をのぞく調査部員は23人であり、平均すると、一人あたり1.13件・575㎡の発掘を担当したことになる。

おもな調査は以下のとおりである。平城宮跡では、東区朝堂院南門東築地（第267次）、東院西辺部（第270次）、東院園池（第271･276次）、式部省東方官衙（第273次）と、調査が宮の東南部に集中した。第267次調査では、東区朝堂院南限を区画する塀・門の改築の状況をほぼ解明した。第270次調査では、奈良時代末期に内裏正殿につぐ大規模な建物が存在したことなど、宇奈多理神社西方地区の様相をあきらかにした。第271・276次調査では、東院園池および東面・南面大垣の詳細を把握することができ、進行中の整備事業に貴重な知見を提供した。第273次調査では、調査部が継続的におこなってきた式部省東方官衙の調査をほぼ終了し、この地区の官衙の建物

配置や性格の変遷を解明することとなった。

京域では、宮北方の市庭古墳周辺の調査が比較的多かった。第269-1・13次調査では、海龍王寺周辺の変則的な条坊配置があきらかになった。また、長屋王邸（第269-4次）、東一坊坊間路（第269-5次）に関しても新たな知見を得ることができた。さらに、多量の緑釉瓦と公的もしくは宮的な色彩の強い建物群を検出した左京二条二坊十一坪の調査（第279次）も特筆すべきものである。外京域・京外では、大乗院の調査（第275・278次）と頭塔の調査（第277次）をおこなった。前者では、大乗院庭園および御所北辺の中世末～近代の状況をあきらかにした。とくに第275次調査では、日本ナショナルトラストによる大乗院庭園整備（57頁参照）に基礎資料を提供できた。後者では、下層・上層頭塔の構造と変遷を詳細に把握できた。また、心柱礎石やその抜取穴から差し銭を発見するなど、重要な資料を得た。さらに、古墳時代後期の横穴式石室や江戸期の墓がみつかり、多方面にわたる新情報を提供した。以上の調査成果の詳細については、年報IIIを参照されたい。なお、発掘調査にともなう現地説明会は、以下の日時に開催した。　（加藤真二）

6月8日　平城宮第267次（東区朝堂院南面築地）古尾谷知浩
8月24日　平城宮第270次（東院）箱崎和久、清野孝之
12月7日　平城宮第273次（式部省東方官衙）平澤毅
3月8日　平城宮第279次（左京二条二坊一坪）井上和人

建造物の調査と研究

南都を中心とする古代建築の調査研究　これまでに蓄積された調査研究の成果をもとに、古代建築の各部材や組物の大きさと寸法の比例関係、ならびに構造力学からみた架構や軸組の構造などの研究をすすめている（20～21頁参照）。また、建物復原に直接関連して、鴟尾、風鐸その他飾り金具、扁額、扉装置、築地の版築などディテールの調査をおこなった。

遺跡の建造物復原方法の研究　全国の建造物復原事業の実態を、都道府県の協力を得てアンケートをとり、とくに主要な事業については現地調査をおこなったうえ、研究集会を開催した（52頁参照）。また、類似性のある韓国の宮殿建築等の復原状況も調査した。

平城宮建物復原実施にともなう調査研究　大極殿の復原基本設計に関する監修や、東院西建物復原実施設計に関する監修協力において、古代建造物の技法及び実施上の諸問題などの検討をおこなった。朱雀門・東院中央建物・宮内省の復原施工の監修では、材料の選択、原寸図作成ならびに木材加工、瓦などの原型製作などの機会に細部技法について検討した。その他、飛鳥資料館において展示することになった山田寺回廊再現にあたり、部材の復原考察と展示のあり方や方法などの検討に参加した。

滋賀県近世民家調査　3ケ年継続事業の2年度目となり、第2次調査をおこなった（30～31頁参照）。

鳥取県近代化遺産総合調査　2ケ年継続事業の初年度にあたり、県内市町村による悉皆調査によって100件ほどの詳細調査候補をリストアップし、1回目の詳細調査を実施した（57頁参照）。

建造物保存修復の理念及び方法に関する日独共同研究　2ケ年継続研究の初年度にあたり、ドイツ各地の都市の町並み、さらに教会、宮殿、近代建築など個別の建造物について、保存修復および活用の状況を現地調査した。ドイツからも研究者を招聘した。　（木村　勉）

書跡資料の調査

南都諸大寺を中心として継続しておこなっている書跡資料の調査は、今年度は薬師寺、法隆寺、興福寺などについて実施した。薬師寺は、東大史料編纂所との共同調査である。今年度は25～27函の調書作成と、20、22函の写真撮影をおこなった。木製の文書箱は全部で28箱あるが、その最終段階で大型の箱に多種多様のものが大量に収納されており、なかなか調書作成のスピードアップがはかれない状態である。しかし、調査終了分からでもデータ公開と中世史料分の取りまとめをしようと考えている。法隆寺は、文書記録の整理目録化の作業をおこなっており、また興福寺は「興福寺典籍文書目録第二巻」収録分以後の経箱の調査が課題である。

南都以外では、仁和寺の文書の釈文作成と御経蔵所蔵分の目録作成の作業をおこなっている。1960年代から調査してきた仁和寺調査の史料刊行の継続事業として、近いうちに何らかのかたちで活字化する計画である。以上のほか、各教育委員会の依頼により、奈良の西大寺元版一切経、京都の興聖寺一切経、滋賀の永源寺文書などの調査と、文化庁美術工芸課の醍醐寺文書、東大寺修二会

資料などの調査に協力した。

また、1992年に北浦直人氏から寄贈された北浦定政関係資料を、岩本次郎調査員を中心として継続して整理してきたが、96年度に、その目録と一部資料の翻刻、関連論稿2編を収録した『北浦定政関係資料』(97年3月)を刊行した。江戸時代末期の平城京、御陵、条里の研究者であった北浦定政は、数多くの調査図面、調査日誌、古文献の写本などを残しているが、その内容紹介をも含んだ目録と、寄贈資料に含まれている書状や和歌などの目録をあわせ収録した。定政の「平城宮大内裏跡坪割之図」は、南都に残っている条里、条坊関係の古文献を猟渉した成果と、かれの実地踏査成果とが、あいまって図面の上に結実したもので、文献と自然科学を取り込んだ学際的研究といえるものであり、条坊復原の基本をなしていると高く評価できよう。今後、この北浦定政が遺した学術的成果は、測量技術との関係などの再確認の作業を通すことによって、より評価されるのでないかと思われる。今後は、これら定政関係資料を関連分野で協力して、活用する研究が課題となろう。　(綾村　宏)

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターでは、発掘技術者養成のための研修や、各地の埋蔵文化財調査等に対する指導・助言をおこなうほかに、各研究室および各人が課題を決めて進めている研究がある。それらは次の通りであり、そのうちのいくつかは別頁で報告しているので(＊印)、ここでは他のいくつかについて紹介しよう。

埋蔵文化財関係情報の収集と調査／全国不動産文化財情報システムの普及流通に関する調査研究／解析図化システムによる文化財計測法の開発／デジタル画像による発掘調査記録法の開発研究／縄文編年の学史的研究／日本古代の稲作農耕様式の変遷に関する研究／古代地方官衙遺跡の調査研究／古代倉庫遺構の集成的研究／東アジア古代都城の比較研究／東アジア古代の庭園遺構の比較研究／東アジアの古代塑像・壁画の技法的研究＊／動物遺存体による生業活動の復原的研究／残存脂質分析による生活環境の復原的研究／古気候の復原的研究／年輪年代法による古墳時代開始時期に関する研究＊／年輪年代法による白頭山巨大噴火年代の解明／飛鳥・藤原・平城宮跡等出土品の保存処理／古代石造物の製作技法、ならびに保存科学的研究／金銅製遺物の保存科学的研究／広域遺構探査法の開発研究＊／復原建物の構造安定性に関する研究／石造文化財の経年変化に関する研究／発掘調査支援機械システムの開発研究＊

埋蔵文化財関係情報処理の現状　文化財情報の収集と公開にはパソコン通信も引き続き利用している。意見交換の場の提供だけではなく、各種データベースを作成して活用をはかっている。また、新たにインターネット経由での情報公開と活用のために機器の整備を進め、「奈文研ホームページ」をたちあげて、外部への公開を開始した。奈文研の既往の調査研究の紹介だけではなく、発掘調査の速報など、新鮮な情報の提供に心がけている。

全国不動産文化財情報システム構築の現状　平成7年度末に整備されたハードウエアを活用して初期データをインターネット経由で公開するための準備作業をおこなった。これと平行して遺跡情報の収集とデータベースの変更・更新を続行している。データ公開のためのハードウェア・ソフトウェアは進歩が著しい分野であり、最適な手法の選択のために調査をおこなった。

解析図化システムによる文化財計測法の開発　発掘調査で検出した遺構のデジタルマッピングもようやく軌道にのり、属性付けも方針が定まった。あとは、異なる図化機の違うOSのもとで作られたデータを変換して奈文研のマシーンで可読できるデータにすること、データ保存の媒体を統一規格にすることなど、各測量会社と綿密な打ち合わせの上、決定していく作業を進めるのみ。

古代地方官衙遺跡の調査研究　郷の支配や収奪に関わる末端官衙をめぐって、①郷の編成と村落結合、②人的組織論、③郷衙（郷家）論、④荷札木簡論、⑤郡衙出先施設論、⑥首長居宅論、という視覚から、これまでの研究の現状と問題点について整理し、それと併行して郷関係官衙遺跡の文献目録を作成して、200ヶ所以上の遺跡の発掘調査例を収録した。また、古代の倉庫遺構について、茨城県平沢官衙遺跡などにみられる総柱式倉庫の周囲をめぐる柱穴例を取り上げ、その性格を検討し、軒支柱とみる考察をおこなっている。

動物遺存体による生業活動の復原的研究　長崎県福江島にある大浜遺跡では、従来より弥生時代のウシが出土していたが、県教委の今年度の調査でもウマ、ウシの骨が出土しており、上層に須恵器を含む層があることからその歯を採集し、年代測定中。君津市にある6世紀の市宿横穴遺跡出土の骨角器および動物遺存体を分析した結果、出土遺物中、弓付、骨鏃、刀装具などが田辺市磯間岩陰や、石巻市五松山洞穴遺跡の出土品と共通性をもつことから、黒潮を南北に行き来した海人集団が存在することがあきらかとなった。　（工楽善通）

国際学術交流

1．国際学術交流の現状

当研究所が年次的におこなっている諸外国との国際共同研究には、特別研究として次の2件がある。

1）南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究

2）アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力

また、文化庁が実施する「アンコール文化遺産保護共同研究」も当研究所で協力しており、文部省科学研究費補助金として次の2件を国際共同研究として実施した。

1）中国古墳壁画の総合的調査と保存法の開発研究

2）陶磁器文化の交流に関する科学的研究

当研究所が外国の諸機関・研究者とおこなう交流も近年多岐におよび、ほとんど全世界的なものとなってきた。1996年度をみてもそれらの研究推進のため、当研究所が招聘した研究者および先方の研究目的での来訪者は計21ケ国、延べ73人、当研究所から外国への出張者は16ケ国、延べ71人にのぼっている。来訪者は奈文研の特別研究、科学研究費国際学術研究、国際交流基金、日本学術振興会、ユネスコ、日本国際協力センターの招きによるもののほか、先方からの訪問者である。

自治体職員協力交流事業特別研修　地方公共団体、自治省および㈶自治体国際化協会がおこなう「自治体職員協力交流事業」にもとづき、海外から、文化財保護関係機関・博物館・美術館等に勤務する職員を受け入れて、研修事業を実施するにあたり、文化庁および諸機関が協力するという趣旨のものである。当研究所も1996年度から受け入れの依頼があり、奈良・広島・山口の各県が受け入れた中国人研究者3名が、9月2日から6日まで特別研修を受けた。わが国における文化財行政の現状、保存科学、遺跡探査等について研修したほか、平城宮跡、飛鳥藤原宮跡、飛鳥資料館等の見学をした。

㈶日本国際協力センターが実施する「博物館技術コース」への協力　財団法人日本国際協力センターが開発途上国を対象に、毎年実施している標記の研修の一部を引き受けて、12月2日より12月6日までの1週間当研究所で実施した。内容は、日本の各種文化財の保存の現状や遺跡発掘、保存修復・整備、建造物見学などであった。参加者はブータン、ボリビア、ガーナ、インドネシア、モルジブ、パプアニューギニア、シンガポール、ザンビア、ケニア、ベトナムからの各1名であった。このうち、ボリビアのグスタボ氏は、翌年2月にも1週間、保存科学等の特別研修を受けた。

文化庁の外国人文化財専門家招聘事業による来訪者　以下の3名の外国人研究者を招聘した。

①韓国から李健茂氏（1997年2月27日～3月5日）：国立光州博物館長で韓国の青銅器研究の第一人者。過去にも訪問経験があるが、最近のわが研究所の研究状況等について意見交換し、大阪市で韓国の青銅器研究などについて講演した。

②アイルランド共和国からB.ラフテリー博士（1997年3月8日～3月23日）：ダブリン大学考古学科の教授で、同国で多くの低湿地遺跡の発掘調査を手がけている。関西を中心に岡山、九州を訪れて講演をおこない、また精力的に低湿地遺跡の植物質遺物、遺構の研究、日本の有機遺物の保存施設の視察をおこない交流を深めた。

③ドイツからH.チンマーマン博士（1997年3月18日～4月7日）：ドイツ北部のニーダーザクセン州立沿海歴史調査研究所の副所長をつとめる考古学者。北欧と日本における掘立柱建物の変遷に関する比較研究のために来日し、わが研究所と大阪で講演したほか、各地で多くの研究者と交流した。

国際学会への出席　以下の国際学会へ出席した。発表したのは10件、参加者は延21名である。

ヨーロッパ物理探査学会（ハーグ）／低湿地遺跡研究会（コペンハーゲン）／文化財保存学会-IIC（コペンハーゲン）／博物館会議-ICOM（エジンバラ）／石造物保存学会（ベルリン）／東アジアの鉄器文化（ソウル）／韓国保存科学学会（ソウル）、聖徳大王神鐘シンポジウム（ソウル）／アジア文化財保存セミナー（奈良）／シンポジウム農耕と文明（奈良）

以上のように、国際的な学術交流は、きわめて活発に展開しており、その勢いは年々増大する傾向を示している（48～49頁参照）。しかし当研究所には、国際交流を専門に担当する部局や事務官が存在せず、各研究者の負担が増しているのが現実というほかない。　（工楽善通）

2．中国社会科学院との第2次友好共同研究

当研究所では、日本古代都城の源流を探るため中国・

朝鮮における古代都城に対して大きい関心を寄せてきた。その趣旨に添って、1991年6月に中国社会科学院考古研究所と当研究所の間で「友好共同研究議定書」をかわし、都城を中心とする共同研究を実施し、北魏洛陽永寧寺の共同調査などの成果をあげてきた。

1996年度、当研究所の特別研究予算として「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」が認められるとともに、「友好共同研究議定書」を更新する年度にあたった。それと本年度からの共同研究計画を確認するため、田中所長・町田章・浅川滋男が北京に赴き、共同研究をさらに5年間延長する議定書に調印した。6月13日のことである。今年の中心テーマとして漢長安城における宮殿遺跡を発掘調査することとし、あわせて発掘届けを国家文物局に提出した。しかし、中国側の事情により、年度内には調査不可能と判断して、遼寧省考古文物研究所との共同研究に変更せざるをえなくなった。これについては4．を参照されたい。

3．唐大明宮含元殿の保存整備事業への協力

ユネスコ・日本外務省が中国西安市に所在する大明宮含元殿の保存整備事業について本格的に着手したのは1994年のことであり、それにともなって「大明宮含元殿日中保存事業協力委員会」が結成され、当研究所から町田が参加している。95・96年には中国社会科学院考古研究所が整備に先立ち、遺跡の範囲をほぼ全面的に発掘調査した。1959・60年の第1次調査では、含元殿基壇と東西にそびえる闕楼の調査が中心であり、基壇の南に展開する広場に想定した龍尾道と含元殿左右の遺構については、なお問題点が残されていた。今回の第2次調査では、これまで台基の中央部に3本の龍尾道を想定したのは誤りで、東西の闕楼下に龍尾道が存在することがあきらかになり、含元殿の左右に角楼・回廊があり、北方からの出入口として左右に門を開くことがわかった。また基台の東には建築に用いた瓦塼類を焼いた窯跡もみつかった。

96年11月1日、西安市において「大明宮含元殿日中保存事業協力委員会」が開催され、上記の発掘成果の報告を受けるとともに、それに基づく遺構の保存整備案を検討した。この委員会では基壇上面までの復原整備という点における共通認識に立脚するものの、発掘調査で不明確な部分は復原せず、できるだけ現状維持の整備に留めようとする中国側委員の意見と、遺物が出土している欄干などは積極的に復原すべきだとする日本側委員の意見とが大きく対立することになり、再度整備案を模索することになった。いずれにせよ、97年度からは本格的な整備事業が開始することから、ユネスコは西安市側の整備事業責任者である高本憲氏を、12月から97年1月まで当研究所に派遣した。同氏は短期間ではあったが、平城宮跡で実施している保存整備の実際を体験するとともに、各地の実施例を視察した。また、96年11月には日本に滞在中の楊鴻勛氏（保存整備案の設計者）を当研究所に招いて、大明宮含元殿の研究発表会を開き、平城宮第一次大極殿と含元殿との深い関係が認識された。（町田　章）

遼寧省文物考古研究所での調査風景

4．遼寧省文物考古研究所との共同研究

日本と中国との国際学術交流の一環として、「東アジアにおける古代都城遺跡と保存に関する研究　―三燕都城等出土の鉄器及びその他の金属器の保存研究―」という研究課題で、中国遼寧省文物考古研究所と共同研究をおこなうことになり、3月10日～29日、日本側が現地に赴いた。まず、遼寧省文物考古研究所、朝陽市博物館等で遺物を調査・観察した後、これらが出土した三燕時代のラマトン(喇嘛洞)、十二台営子等の遺跡を視察した。その後、討議を経て、今回のおもな研究対象となったラマトン遺跡出土遺物を中心に、保存処理に先だつ詳細な観察と実測、写真撮影をおこなった。

ラマトン遺跡は、遼寧省北票市にあり、大凌河北岸の東西にのびる丘陵の南斜面に立地する3世紀末～4世紀代の鮮卑族の墓地で、遺跡から大凌河を約30㎞遡ると、三燕（前燕・後燕・北燕）時代の都城である竜城に至る。三燕時代の墓としては、前燕の奉車都尉墓、北燕の馮素弗墓などが知られていたが、1993年以来のラマトン遺跡の発掘は、最大規模のものであり、現在までに23基の墓を発掘し、鉄製品・金銅製品・青銅製品等の豊富な副葬品が出土している。出土遺物の一部には、馬具の金銅製透彫鞍金具、馬冑、挂甲等、日本や韓国の4～5世紀の

アンコール・ワット全景（北西からみる）

古墳から出土する遺物と共通するものがあり、年代が先行することから、日本や韓国の馬具・武具の源流を考える上で、候補地の一つとなりうるものである。しかし、両者の関係を解明するには、今後、周辺地域も含めた、詳細な研究が必要になってくるであろう。　（小林謙一）

5．南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究

この研究はミャンマー連邦文化省考古局との共同研究の3年目にはいった。主として研究者の交流をおこなっており、本年は、考古局パガン研究所長アウン・チャイを1996年11月19日～12月3日まで、考古局研究員チョウ・トウ・アンとミン・ウェイの両氏を11月19日～1997年1月7日まで招聘し共同研究をおこなった。ここでは寺院・宮殿の建築遺構の発掘方法について相互の意見を交わし、飛鳥藤原宮跡発掘調査部において掘立柱の検出や測量方法について、具体例を前にして検討をした。今後、南アジアにおいて木造建築の発掘が予想でき、それに対応できよう。

一方、奈文研から、猪熊・巽・森本・村田の4研究員が1997年1月7日～20日にミャンマー政府考古局と遺跡を訪れ、各地で意見交換をした。パゴー、マンダレー、モラーミン、メッテラー、パガンなどである。とくに、97年から開始予定のマンダレー地区パイレ村ミンザイの古代都市跡は発掘計画段階から日本との共同研究の応用が生かされている。パガン遺跡群では、当研究所の発掘用具が模され、現場で使用されるなど、早くも学術交流の一端があらわれている。国際共同研究として、理想的な方向に進みつつある。　（猪熊兼勝）

6．アンコール文化遺産保護共同研究事業

文化庁では、海外での文化財保護に積極的に貢献することを目指して、さまざまな施策を実行している。その一環として、伝統文化課を所管とするアンコール文化遺産保護共同研究事業が平成5年度から始まった。アンコール文化遺産は、カンボジア王国中部のトンレサップ湖北岸に広がるクメール王朝の都城と寺院を中心とする遺跡群で、東西25km、南北13kmの範囲に、約1000ケ所の遺跡がある。そのうちの62ケ所が重要遺跡とされ、ユネスコの世界文化遺産にも登録されている。なかでもアンコール・ワットとアンコール・トムは、東南アジア有数の大遺跡である。本事業は、アンコール文化遺産諸遺跡の保護に関して共同で研究を実施することを主たる目的としている。具体的には以下の6項目に重点をおく。

(1)遺跡探査に関する共同研究　(2)遺跡、遺構の写真測量に関する共同研究　(3)石造建造物等の劣化対策に関する共同研究　(4)発掘調査に関する共同研究　(5)修復技術および保存科学に関する共同研究　(6)広域遺跡整備に関する共同研究

各々の項目について、日本から調査団を派遣し、現地でカンボジア人研究者と共同して調査をおこなうとともに、日本にカンボジア人研究者を招聘し、当研究所を中心に研修をおこなっている。　（杉山　洋）

1996年度 海外から奈文研への主要訪問研究者一覧

●権　鐘南（韓国／寧越工業専門大学建築科助教授）1996年7月29日～7月31日

●洪　享雨（韓国／国立文化財研究所遺跡調査研究室学芸研究士）1996年9月9月～9月30日奈文研招聘

●祁　慶國(中国／北京文物研究所)、韓國河(中国／鄭州大学文博学院)、張　従軍（中国／山東省文物管理局）1996年9月2日～9月9日　自治省招聘

●Kyaw Oo Lwin（ミャンマー／考古局研究員）1996年5月20日～11月20日　奈文研招聘

●張　正男、丁　珉鎬（韓国／国立慶州文化財研究所）1996年12月3日～12月8日

●楊　鴻勛(中国社会科学院考古研究所)1996年11月18日～11月19日

●高　本憲（中国／西安市大明宮遺跡保管所長）1996年11月21日～1997年1月31日　ユネスコ招聘

●Dorji WANGCHUK（ブータン／国立博物館学芸員）、Vu Huu Minh（ヴェトナム／フェ遺跡保存センター文化財専門官）、Gustavo Felix Sunavi LARICO(ボリビア／国立民族・民俗博物館学芸員)、Joseph Gazari SEINI（ガーナ／中央博物館長）、Aris Ibnu DAROJAD（インドネシア／博物館部展示課長）、Ali WAHEED（モルディブ／国立博物館主任学芸員）、Joseph Lava KAIYO（パプアニューギニア／国立博物館アートギャラリー主任学芸員）、Shahril Bin Mohd SHAH（シンガポール／国立文化遺産局教育技官、Tendayi CHIPANGANO（ザンビア／ルサカ国立博物館図書館司書）、Fredrick Karanja MIRARA（ケニア／国立博物館教育長）1996年12月2日～1996年12月6日　JAICA招聘

●Kyaw Tun Aung（ミャンマー／考古局ミャウー文化遺産支局副局長）、Min Way（ミャンマー／考古局研究員）1996年11月21日～1997年1月10日文化庁招聘

●Aung Kyaing（ミャンマー／考古局パガン文化遺産支局長）1996年11月21日～12月3日　文化庁招聘

●金　玉年（韓国／釜山大学校博物館学芸士）1997年1月20日～2月9日

●Chhun Nak、Kinal Keo、Chan Kanha（カンボジア／王立芸術大学生）1997年1月8日～3月　28日　文化庁招聘

●張　群喜、郭　嵐、単　暐（中国・陝西省歴史博物館）1997年2月3日～3月4日　奈文研招聘

●Gustavo F.S. Larico（ボリビア／国立民族・民俗博物館）1997年2月10日～2月14日　JAICA招聘

●張　国林、万　欣（中国／遼寧省文物考古局）、謝　飛(中国／河北省文物研究所長）1997年2月18日～3月29日　奈文研招聘

●劉　建国、高　立兵（中国社会科学院考古研究所）1997年2月16日～3月28日、奈文研招聘

●Ly Vanna（カンボジア／アプサラ助手）、So Sokuntheary（カンボジア／鉱工業エネルギー省技官）1997年2月17日～3月28日　文化庁招聘

●李　健茂（韓国／国立光州博物館長）1997年2月27日～3月5日　文化庁招聘

●王　小慶（中国／陝西省考古研究所）1997年3月7日～1997年3月31日　奈文研招聘

●朱　岩石(中国社会科学院考古研究所)1997年3月8日～3月29日　奈文研招聘

●楊　志軍（中国／黒龍江省文物管理局副局長）1997年3月1日～3月7日　東洋文庫招聘

●黄　慰文（中国科学院古人類研究所主任）1997年3月20日～3月29日　文化庁招聘

●趙　大昌（中国科学院瀋陽応用生態研究所長）1997年3月23日～3月28日　奈文研招聘

●V.Boldin、Y.Nikitin（ロシア／ウラジオストック極東研究所）1997年3月9日～3月12日　青山学院大学招聘

●Raftrey Barry（アイルランド／ダブリン大学教授）1997年3月8日～3月23日　文化庁招聘

●趙　榮済（韓国／慶尚大学校博物館館長）、柳　昌煥（同館学芸研究士）1997年3月15日～3月28日　奈文研招聘

●Richard Evershed（連合王国／ブリストル大学講師）1997年2月27日～3月7日　奈文研招聘

●W.Haio Zimmerman（ドイツ／ニーダーザクセン州立沿海歴史調査研究所副所長）1997年3月18日～4月7日　文化庁招聘

1996年度 奈文研研究者の海外渡航一覧

◆西村　康　1996年5月4日～5月17日／オランダ・連合王国「ヨーロッパ物理探査学会出席及び研究調査」(文部省科学研究費)

◆沢田正昭・肥塚隆保　1996年5月7日～5月11日／中国「中国古墳壁画の総合的調査と保存法の開発研究」(文部省科学研究費)

◆深澤芳樹　1996年5月18日～5月21日／韓国「韓国出土の無文土器時代遺物の調査研究」

◆田中　琢・町田　章・浅川滋男　1996年6月12日～6月16日／中国「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」(奈文研特別研究)

◆杉山　洋　1996年6月17日～7月5日／タイ「タイ国におけるクメール陶器及びその窯跡の調査」(日本学術振興会)

◆光谷拓実　1996年6月30日～1996年7月6日／韓国「韓国における年輪年代学の調査・指導」(大韓民国文化財研究所)

◆猪熊兼勝　1996年7月3日～18日／ペルー共和国・チリ共和国「南米、南太平

洋の石像物調査」

◆浅川滋男　1996年7月6日～7月21日／中国「中国黒龍江省におけるツングース系諸民族住居の調査と資料収集」(住宅総合研究財団)

◆沢田正昭　1996年7月20日～7月24日／中国「唐代壁画の保存修復のための資料収集」

◆臼杵　勲　1996年8月5日～9月2日／ロシア「アムール河下流遺跡一般調査」

◆沢田正昭　1996年8月9日～8月17日／アメリカ合衆国「陶磁器文化の交流に関する科学的研究」(文部省科学研究費)

◆古尾谷知浩　1996年8月10日～8月27日／カンボジア王国「アンコール文化遺産保護に関する共同研究」(文化庁特別研究)

◆高妻洋成　1996年8月19日～8月25日／中国「ニヤ収集木製品の調査」(文部省科学研究費)

◆沢田正昭　1996年8月24日～9月15日／連合王国・デンマーク「文化財保存学会出席、発表」

◆西村　康　1996年8月25日～1996年9月1日／カンボジア王国「アンコール文化遺産保護に関する共同研究」(文化庁特別研究)

◆浅川滋男　1996年8月27日～9月1日／韓国「朝鮮半島東南部における古民家調査」

◆加藤允彦　1996年8月30日～9月4日、10月1日～10月4日、11月15日～11月20日、12月16日～12月18日／中国「遺跡公園に設置する石像製作に係る石材調査など」(大宇陀町)

◆佐川正敏　1996年9月1日～12月15日／中国「中国旧石器時代の研究」(日本学術振興会・中国科学院)

◆町田　章　1996年9月4日～9月17日／中国「中国遼寧省における遺跡整備の指導」(国際交流基金)

◆松井　章　1996年9月6日～9月20日／デンマーク「国際低湿地遺跡研究会出席」

◆沢田正昭　1996年9月28日～10月10日／ドイツ「国際石造物保存会出席」

◆工楽善通　1996年9月30日～10月12日／ドイツ「ドイツにおける新石器時代の考古遺物の材質・製作技法に関する調査」(文部省科学研究費)

◆木村　勉　1996年10月7日～10月18日／韓国「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」(奈文研特別研究・大韓民国文化財研究所)

◆川越俊一　1996年10月16日～12月15日／イタリア・フランス・連合王国「西ヨーロッパにおけるガラス生産遺跡の遺物の研究」(文部省在外研究員)

◆玉田芳英　1996年10月17日～10月21日／韓国「韓国内の遺跡の調査・研究」

◆工楽善通　1996年10月24日～10月27日／韓国「国際学術大会《東アジアの鉄器文化》出席」(大韓民国文化財研究所)

◆木村　勉・長尾　充　1996年10月28日～11月9日／ドイツ「建造物保存修復の理念と方法についての現地調査」(文部省科学研究費)

◆肥塚隆保　1996年10月28日～11月3日／韓国「水没出土木材の保存処理についての研究調査」(国立海洋遺物展示館)

◆沢田正昭・村上　隆・高妻洋成　1996年10月31日～1996年11月3日／韓国「韓国保存科学学会出席」

◆町田　章　1996年10月31日～11月6日／中国「大明宮含元殿整備会議出席及びアジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」(ユネスコ・奈文研特別研究)

◆高瀬要一　1996年11月15日～11月19日／中国「遺跡保存活用状況調査」

◆杉山　洋　1996年11月18日～11月23日／韓国「国際学術大会出席及び研究調査」(国立慶州博物館)

◆木村　勉　1996年11月23日～12月8日／ブータン「ブータンの歴史的建造物・集落の保存のための現地調査」(文部省科学研究費)

◆小野健吉・加藤真二・小澤　毅・島田敏男　1996年12月9日～12月22日／中国「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」(奈文研特別研究)

◆杉山　洋　1996年11月25日～12月1日／カンボジア「アンコール文化遺産保護に関する共同研究」(文化庁特別研究)

◆沢田正昭　1996年12月8日～12月15日／中国「中国古墳壁画に関する総合的調査と保存法に関する共同研究」(文部省科学研究費)

◆猪熊兼勝　1996年12月18日～12月22日／韓国「韓国における長鼓形古墳の研究」

◆高瀬要一　1996年12月22日～12月30日、1997年2月25日～3月8日／ベトナム「ホイアン日本人墓地修復に関する調査」(文部省科学研究費)

◆猪熊兼勝・巽淳一郎・村田健一・森本晋　1997年1月7日～1月20日／ミャンマー「南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究」(奈文研特別研究)

◆西村　康　1997年2月17日～2月28日／カンボジア「アンコール文化遺産保護に関する共同研究」(文化庁特別研究)

◆沢田正昭・巽淳一郎・肥塚隆保　1997年2月24日～3月1日／アメリカ合衆国「陶磁器文化の交流に関する共同研究」(文部省科学研究費)

◆花谷　浩　1997年3月4日～3月17日／カンボジア「アンコール遺跡の調査研究」(文部省科学研究費)

◆猪熊兼勝　1997年3月10日～3月15日／韓国「南アジア仏教遺跡の保存整備に関する基礎的調査研究」(奈文研特別研究・国立慶州博物館)

◆田中　琢・町田　章・毛利光俊彦　1997年3月10日～3月16日／中国「アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力」(奈文研特別研究)

◆小林謙一　1997年3月10日～3月23日／同上

◆村上　隆　1997年3月10日～3月13日／同上

◆佃　幹雄・清野孝之　1997年3月10日～3月29日／同上

◆寺崎保広　1997年3月10日～3月16日／中国「中国古墳壁画に関する総合的調査と保存法に関する共同研究」(文部省科学研究費)

◆金田明大　1997年3月10日～3月29日／同上

◆西村　康　1997年3月16日～3月22日／アメリカ合衆国「陶磁器文化の交流に関する科学的研究」(文部省科学研究費)

＊（　）付き特記のないものは私費渡航

在外研修の成果

西ヨーロッパにおけるガラス生産遺跡の遺物の研究

川越俊一／平城宮跡発掘調査部

上記の研究題目のもとに平成８年10月から平成８年12月にかけて、ローマ、ヴェネツィア、パリ、ケンブリッジ、ロンドンの関係機関を訪れる。この研究は、日本と西ヨーロッパにおけるガラス生産遺跡からの出土遺物の比較研究を目的としたものである。ローマではまず、古代遺跡のスケールの大きさと遺存状態の良好さに驚かされる。ローマでは古代のローマングラスに関する資料、ヴェネツィアでは中世のヴェネツァングラスに関する資料の調査をおこなった。また、フランスでは主に近世以降のガラスについて調査した。今回の研修の主要滞在国であるイギリスでは、ケンブリッジ大学考古博物館と大英博物館で英国内出土資料のみならず各国の出土品を調査し、世界各地のガラスおよびガラス製品の生産に関して理解を深めた。なかでも興味深かったのは、ルツボの形態である。古代の日本では、砲弾形をしたガラスルツボが用いられるのに対して、ヨーロッパ・中近東では平底ルツボが主流となること、ルツボの容量も日本が400cc以下であるのに対して、ヨーロッパ・中近東ではその10倍以上になることなどである。また、製品にしても、日本が玉類などの小型の装飾品が中心になるのに対して、一方は容器類が中心になるなど対照的な相異点があきらかになった。各機関の研究展示も芸術品的な容器中心となっていたことへの物足りなさは残るが、今回の研修では各地のガラス製品にふれることができ、有意義であった。

中国前・中期旧石器文化の研究

佐川正敏／飛鳥藤原宮跡発掘調査部

日本学術振興会の推薦で、中国科学院古脊椎動物古人類研究所（黄慰文教授受け入れ）において、1996年９月１日から12月15日まで3万年前以前の前・中期旧石器文化の研究をおこなった。目下、列島最古の上高森遺跡の年代は、60万年前に迫ろうとしている。原人が列島に渡来できるチャンスは、60万年前のミンデル氷期か、100万年前のギュンツ氷期である。もし後者であれば、列島ではさらに古い遺跡が将来見つかることになる。中国の華北地方には、東谷坨遺跡や藍田原人出土の公王嶺のように、古地磁気法で100万年前を若干越える遺跡があるので、不思議ではない。しかし、世界の多くの人類学者はそれに懐疑的である。それは、原人が東アフリカで180万年前に出現し、140万年前に中東経由でユーラシアへ拡散し始めたとする仮説に矛盾する事態を、受け入れられないからである。

黄土の標準地層のある洛川に近い西安市にある中国科学院黄土・第四紀地質国家重点実験室は、年代測定機器を含む最新の設備をもつ共同利用施設で、中国内はもちろん欧米を中心とする国外の研究者も各種のプロジェクトに参加している。中国の第四紀地質学の成果は、国際的に認められているので、年代への懐疑は第四紀地質学への懐疑につながる。原人起源拡散仮説は、年代とルート、道具の内容を含めて近い将来修正されるだろう。97年度から文部省重点領域研究「日本人および日本文化の起源」（代表：尾本恵市教授）がスタートするので、成果の詳細はそこでご披露申し上げよう。

ローマングラスの展示（大英博物館）

古脊椎動物古人類研究所で研究発表する筆者（佐川）

公開講演会

第78回公開講演会「薬師寺は移築したか」

1996年6月1日

平城京の薬師寺が藤原京の本薬師寺を移築したものか否かという問題は長い間の論争が続いており、未だに決着をみていない。近年、奈文研では、両寺の発掘調査を継続しており、いくつかの知見を得ている。そこで、これまでの論争を整理して問題点をあきらかにし、発掘の成果からどこまで問題解決がはかれるかを論じた。

◆寺崎保広：薬師寺移築論争と平城京の薬師寺の発掘調査

研究史のうち、美術史・建築史・考古学の各分野の最近の論考を検討した。とくに一部の移建・新造説が近年注目をあつめているが、それに対して疑問を呈した。平城薬師寺の発掘では、とくに講堂の成果をもとにして、伽藍が建築途中で設計変更をすることとなり、そのため回廊が単廊として完成する前に複廊に変更された、とするこれまでの成果の見直しを主張した。結論としては、平城薬師寺は、本薬師寺を移築したものではなく、新たに造営されたとする説に妥当性があることを述べた。

◆花谷　浩：掘った／出た／わかった？本薬師寺の発掘調査

本薬師寺の最近の発掘調査成果から、1)本薬師寺の中門は三間門で回廊は単廊だった、2)本薬師寺創建軒瓦は平城薬師寺のそれと違う、3)本薬師寺の建設は藤原京条坊設置より遅れる、ことなどを指摘した。中門・回廊の構造が平城薬師寺と違うので移建は不可能。出土した瓦も7世紀後半の創建瓦が大半を占め、これも移建を否定する。同様の状況は東塔の瓦にもあてはまる。東塔も移建されなかった。本薬師寺創建軒瓦が判明したことにより、平城薬師寺では軒丸瓦は本薬師寺用を流用、軒平瓦は紋様を似せて新たに作笵したと考えた。二つの薬師寺間の瓦の供給関係は複雑で、同笵瓦の出土を単純に移建と結びつけるのは危険。本薬師寺の造営がいつ開始されたか、これまでは平城薬師寺東塔檫銘の解釈によって天武朝と持統朝との二説があった。本薬師寺金堂創建軒瓦の紋様は藤原宮軒瓦との関係からは天武朝とみたほうがよい。となると、藤原京条坊の設置時期が天武朝の古い段階にまで遡ることとなる。本薬師寺の発掘調査は薬師寺論争だけでなく古代都城制の問題とも深く関わる。

第79回公開講演会「原始・古代の実年代にせまる」

1996年11月4日

奈文研では、かねてより年輪年代法による考古遺物・木造建造物等の年代測定をおこなってきているが、1996年4月に大阪府池上・曽根遺跡出土の弥生時代中期後半とみてよい柱根が52年B.C.に伐採されたものであることが判明し、弥生時代から古墳時代へかけて、実年代をどうあてはめるかが世間の話題となった。そこで、「原始・古代の実年代にせまる」というテーマを設けて、光谷拓実が「年輪で歴史をよむ」、工楽善通が「考古資料から年代をよむ」という演題で講演をした。

◆光谷拓実：年輪で歴史をよむ

出土した木材や古木の年代を測ることによって、遠い過去の実年代を知り得るのか、という年輪年代法の原理をやさしく解説するとともに、暦年標準パターンの作成手順などを述べた。その研究成果から、1996年11月現在、スギ材は1313年B.C.まで、ヒノキ材は912年B.C.まで測定が可能になった。そして、コウヤマキ材も、まもなく紀元前1千年代に達するだろうことを解説した。また、年輪年代法は、過去の年代を知るだけでなく、製作年代のちがう贋物をみぬいたり、古材の産地を同定しうる場合もあることを説明した。以上について、多くのスライドを映写してその実例を紹介した。

◆工楽善通：考古資料から年代をよむ

相対的な古さしかわからない発掘資料に、実年代に近い値を与えるにはどのような方法があるのか。とくに弥生～古墳時代の遺物に対して、年代のわかる大陸からの搬入品、および土器の様式編年からの年代の割り出しを解説した。池上・曽根遺跡以外にも、年輪年代法で弥生時代の実年代が古くなりそうな出土材があるが、いまのところはまだ、考古資料の交差年代をもっとつめたうえで年輪年代を応用すべきことと、良好な年輪年代の測定値をさらに多く入手する必要を述べた。コウヤマキ棺材での紀元前後頃の実年代が確定すれば、弥生～古墳時代の実像を描くのに大きく寄与するだろう。年輪から東北鳥海山の噴火年代が466年B.C.であると判明したのは、東日本の縄文晩期の年代を考えるうえで重要な定点となる。

研究集会

奈文研主催の研究集会を開催した。ごらんのとおり、多趣多彩！

◆日本古代律令国家における末端支配機構の研究　1996年12月5～6日

この研究は、郡以下の末端支配のあり方を探ることを目的としたものである。考古・文献史学の研究者46人の参加を得て研究集会を開催し、郷の編成と村落結合、郷長や雑任などの人的組織、郷レベルの官衙（郷衙）の有無、郡衙と郷との木簡授受関係、郡衙出先施設、といった論点を中心に研究報告と討議をおこなった。郷の役所については、国衙・郡衙と並ぶ官衙の存在を考える見解と、郡衙施設の分置など郡衙諸施設の多様な在り方を示すものとみる意見とに分かれ、結論は得られなかったが、郡衙以下の支配の実態をめぐる研究の現状と問題点が整理され、今後共に取り組むべき課題を明確にすることができた。また、末端支配の拠点と村落あるいは集落群との係わりも議論され、末端官衙遺跡論と古代集落遺跡研究との接点を浮かび上がらせたことも大きな成果といえよう。　（山中敏史）

◆薬師寺移建論に意見あり　1997年3月29～30日

報告と講演は、寺崎保広「薬師寺移建論争の概要と問題点」、花谷浩「本薬師寺の発掘調査」、藤井恵介（東大）「建築史からみた薬師寺」、田辺征夫（東博）「平城京遷都と寺院移建」。寺崎は近年の薬師寺論争の方向と問題点をさぐった。薬師像に関して岩永省三、東塔については宮上茂隆の論考を紹介。平城薬師寺回廊の復廊への「設計変更」が「改築」に近いかと推測した。花谷は本薬師寺跡発掘調査の成果を述べ、3段階の造営順を指摘。西塔以外は移建を否定。西塔は創建が遅れ、文武2年時点での完成を疑問視した。藤井氏は薬師寺論争における建築史の発言を研究史的に論述。東塔問題の解決には解体修理しか道はなく、薬師寺建築様式の特殊性と唐の建築との関係探求も課題とした。田辺氏は古代の遷都のうち旧都の寺院が大挙して移ったのは平城遷都だけであり、平城京寺院として大安寺の重要性とそれを主導した道慈の役割を指摘した。　（花谷　浩）

◆書跡資料調査保存の現状と課題　1997年3月29日

古文書、経典、典籍などの調査や保管の現場において、各関係者の立場により、調査や保管についての認識が若干の異なるところがあったと思われる。たとえば、文書の調査法、調書の形式、ラベル貼付、使用用語の不統一、目録の体裁、保管の方法等々の問題である。この研究会は、書跡資料関係者間ではできるだけそれらに関して共通の認識をもつようになることを意図したものである。今年度は、①奈文研の書跡資料の状況と課題、②滋賀県での古文書調査の実態、③調査成果とその情報処理に関しての報告、をおこなった。初回で、現状報告とそこでの課題の提起が主であったため、参加者の共通認識の形成までにはいたらなかった。しかし、調査現場では明確化しきれない違いをお互いにはっきりと認識することにより、今後より議論が深化する前提にはなったと考えられる。　（綾村　宏）

◆古代都城における行政機構の成立と展開　1997年2月22～23日

第1回目の宮城中枢部の諸問題について、今年は官衙の諸問題を検討した。官衙（曹司）の意味はひろく多様である。

①構造：8世紀の姿をもとに、曹司を官人の事務および生活空間とすると、官衙は政庁、附属舎、倉、宿所、厨などの諸施設をもつ。検出遺構と官衙を結びつけるには遺物、史料を含めた総合的な検討が必要で、プランから直ちに官衙を推定することは難しいようである。

②起源：岸俊男は、朝堂院がもつ朝参（挨拶）、朝儀（儀式）、朝政（実務）の3機能うち、朝政の機能が肥大化したと考える。曹司の起源は朝堂院の成立とともにあり、朝堂院の衰退に反比例して発展したというのである。これに対し、吉川真司は、朝堂と曹司の政務は機能的に別物であり、当初より併存したと報告した。諸宮の調査事例からみると、吉川説が合理性をもつようである。

③展開：浄御原宮の内郭が内裏とすると、宮の周りにあるのは内廷機構で、後の八省にあたる外廷機構はやや離れた場所に点在する。外廷機構を宮城内部に取り込むのは方1キロの宮域が成立する藤原宮段階である。ただし、遷都当初の姿は不詳で、比較的整うのは大宝令以後であろう。後期藤原宮の官衙は平城宮に影響を及ぼすが、官衙を含め、宮域全体の地割り方法は長岡宮段階で一変し、平安宮に移行する。この段階で、平安宮の諸司厨町（宮外官衙）の祖型が成立するのであろう。このように前・後期の藤原宮と長岡宮が、官衙展開の大きな画期となる。なお、報告集『古代都城における行政機構の成立と展開』をご参照いただければ幸いである。　（金子裕之）

◆遺跡の建造物復原方法の研究　1997年3月14日

近年、発掘された建築遺構から建造物が復原される例が増えている。建造物復原は遺跡を理解する方法として有効な手段であるが、まだ歴史が浅いこともあって、安易な復原や、意義・目的意識が明確でないものが少なくない。本研究は、建造物の遺跡の整備はどうあるべきかを、これまでの事例調査等をおこなうことによって、問題点を整理し、今後の復原整備事業のあり方の方法をさぐるものである。本中真（文化庁）、江面嗣人（文化庁）、吉岡泰英（福井県立朝倉氏遺跡資料館）の諸氏にも研究に参加していただいた。本年度は3カ年計画の第2年次で、全国の遺跡における建造物復原事業実態調査を都道府県教育委員会の協力を得ながら実施した。研究集会においては、復原事業の基本計画から復原実施までのプロセスの中に内在する問題点について意見交換をおこなった。　（村田健一）

◆日本の住まいの起源と系譜に関するシンポジウムⅡ「平地住居と高床建物」　1996年10月18～19日

1995年度の「竪穴住居の系譜」に引き続き、96年度は表記のシンポジウムを開催した。近年、日本各地で続々と出土している縄文・弥生時代の掘立柱建物を対象に、以下の3セッションをおこなった。

「平地住居と高床建物」シンポジウム

Ⅰ.縄文集落と掘立柱建物

報告：石井寛　大工原豊　宮本長二郎

コメント：大貫静夫　小山修三

Ⅱ.弥生時代の大型掘立柱建物

報告：武末純一　廣瀬和雄

コメント：都出比呂志　浅川滋男

Ⅲ.南方と北方のクラ

報告：浅川滋男　佐藤浩司　太田邦夫

コメント：宮本長二郎　植木久

掘立柱建物の場合、通常、旧生活面が削平されているため、機能・構造とも不明な点が多く、議論全体に消化不良の感がいなめなかった。今後、報告書を作成するなかで考察を深めていきたい。

（浅川滋男）

◆遺跡土壌の微細生物、生化学物質の研究　1997年2月28日～3月1日

1)脂質分析の成果と問題点、2)DNAによるイヌとブタの系統、の2つの問題をめぐって研究集会をおこなった。参加者は約30名であった。1)脂質分析については、R.エバーシェッド（ブリストル大学）による、土器の器壁に染み込んだ植物に起因するワックス分からキャベツなどを煮込んだことがわかる例などの報告に続いて、中野益男（帯広畜産大学）の脂質分析と免疫抗体反応による最近の遺跡での成果について報告があった。コメンテーターとして、小林正史（北陸女子短期大学）から、種々の脂肪酸が土中で相対的な比率を守りながら分解していくとは考えにくく、特定の脂肪酸が他に比べて分解されやすいのではという意見、堀内晶子（国際キリスト教大学）より土器に吸着させた脂質の分解の進行と回収率とについて実験的な方法からのコメントを得た。DNAについては、石黒直隆（帯広畜産大学）から、在来ブタ、ニホンイノシシ、西洋ブタなどの遺伝子データーベースを構築し、遺跡出土のブタ／イノシシの骨から抽出した試料とを比較した結果、弥生遺跡出土のブタ／イノシシのなかには在来ブタに共通するミトコンドリアDNAをもつものが存在することがあきらかになった。イヌについては、人為的交雑がすすんでいるためか、Dループ、Cytbについてもクラスターにばらつきが大きく、古代家犬の品種別分類は困難であるとの中間報告を得た。（松井　章）

◆文化的景観の研究　1997年1月29日

1992年の第16回世界遺産委員会において文化遺産の範疇に文化的景観Cultural Landscapeの概念が導入され、国内でも関心が高まった。日本では明治以来、法制度的に保存されてきた「名勝」がこの概念に包括されるが、その成立の歴史的背景、保存制度の特徴、保存政策のあり方など研究課題は少なくない。そこで第1回研究会では「文化的景観とは何か」という点に的を絞って議論した。報告は以下のとおり。丸山宏（京大）「近代における京都の名勝保護政策について」、小野佐和子（千葉大）「イギリス湖水地方と比較した月ヶ瀬梅林の近代における変容について」、赤坂信（千葉大）「歴史的環境保存の問題点」、安原啓示（文化庁）「名勝の指定および整備の現況について」、本中真（文化庁）「世界遺産と文化的景観について」、内田和伸「遺跡に重なる文化的景観について」。（内田和伸）

◆戦国時代の庭園遺跡　1997年3月21日

近年、発掘調査による情報が増大している戦国時代の地方武将の居館の庭園について、研究集会を開催した。大内氏館跡（山口県）、江馬氏館跡（岐阜県）、一乗谷朝倉氏遺跡（福井県）、万徳院跡（広島県）、長氏館跡（群馬県）の各庭園遺構について、発掘担当者等の報告をうけ、庭園の意匠的特色を中心に討議をした。これら戦国時代の武将居館の庭園は、建物からの観賞を主眼とした座観式の庭園であり、池は浅く護岸の石組を全周にまわす室町時代の庭園一般の意匠的特色を備えている。ところが、必ずしも庭園築造に適した場所とはいえない防衛上の拠点に立地したためか、池に遊水池的な役割、あるいは築山に土塁的な役割をもたせるなど、武将居館としての機能的要請による意匠が認められることもあきらかになった。（小野健吉）

◆保存科学における色の諸問題

1997年2月20日

埋蔵文化財センター主催による保存科学研究集会を、平城宮跡資料館講堂において開催した。今回の研究集会は、文化財における色の問題をテーマとし、顔料・染料・考古遺物・伝世品あるいは壁画・壁体といった様々な観点から、8名の講演者による口頭発表をおこなった。また、情報交換の場をできる限り多く設定することを目的として、ポスターによる発表も企画したところ、赤色顔料に関する5件の展示がなされた。総合討議では、とくに赤色顔料の産地・製法に関する問題について活発な議論がおこなわれ、新たな見解や問題点がクローズアップされた。また、古代壁画の復原や整備に関連して、顔料推定における従来の分析法の限界とそれを打破するための新たなアプローチについても提言があった。（肥塚隆保）

◆遺跡地図情報システムの研究

1997年2月14日

奈文研では、遺跡の調査研究において現況地形図、条坊復原図、調査区割図、遺構実測図といった地図の情報の整理を手作業でおこなっており、効率的システムの必要性を痛感している。そこで、国土地理院を中心とする空間データ基盤整備事業について理解を深めるとともに、文化財研究への応用を進めつつある機関の事例を検討するため、遺跡地図情報システム研究会（第1回）を開催した。まず国土地理院の中堀義郎氏が、空間データ基盤整備とGIS（地理情報システム）について、GIS研究会やGIS関係省庁連絡会議の報告を中心に紹介した。ついで、太宰府市、京都市、奈文研が事例を報告した。過去のデータを活用するため、データ型式などの標準化の必要性を強く認識した。今後は都城への応用を統一的に議論すると同時に、都城外地域についてもデータの扱い方を検討する必要があり、継続的な研究が求められる。（森本　晋）

文部省
科学研究費助成研究

国際学術研究２件、重点領域２件、基盤研究13件、奨励研究３件、データベース１件の計21件が採択された。

◆中国古墳壁画の総合的調査と保存法の開発研究

代表者・田中　琢　国際学術研究　新規

中国・陝西省西安市周辺には、唐代を中心とした古墳壁画が多量に現存する。古墳内部から剝ぎ取った多数の壁画が陝西歴史博物館その他の機関に保管されている。これらの移設した壁画について、壁体の強化方法、顔料の褪色・剝落防止対策の研究、ならびに考古学・美術史学・建築史学の総合的な調査研究をおこなう。

◆陶磁器文化の交流に関する科学的研究

代表者・沢田正昭　国際学術研究　新規

日本・韓国・中国・東南アジア地域で生産された陶磁器について、その胎土や釉薬を分析し、考古学・美術史学的調査をおこない、陶磁器文化の交流圏の確認と交流の実態を究明する。わが国では、全国各地にこれらの陶磁器が大量に出土し、あるいは伝世している。また、スミソニアン研究機構関連機関でも数多くの東洋陶磁器を所蔵しており、分析・調査に関する共同研究をおこなう。

◆二条大路木簡データベース

代表者・町田　章　データベース　継続

長屋王家木簡データベース作成グループは、長屋王家木簡に引き続き、1994年度以来研究成果公開促進費(データベース)の支給を受け、７万点余にのぼる二条大路木簡のすべてについて、文字情報と画像とをリンクさせたデータベースを作成すべく、作業を進めている。

◆遺跡探査法の総合的開発研究

代表者・西村　康　重点領域(1)　継続

表記研究の総括班として、研究推進と公表、普及を任務としてきた。平成４年度に開始した本領域研究は平成８年度をもって終了したが、研究に参加した研究者が中心となって、日本文化財探査学会の設立、第２回国際遺跡探査学会の日本開催などに取り組む予定である。

◆集落、埋納遺跡の探査

代表者・西村　康　重点領域(2)　継続

広域遺跡である集落、寺院、官衙遺構を効率良く正確に推定して、遺跡調査とその保存に役立つ資料を提供すること、弥生時代を中心とする青銅遺物の所在推定とを目的とする。地中レーダー探査の方法を中心に、電気探査、磁気探査、電磁誘導探査の方法を併用すれば、必要な地下情報が採取できることを確認できた。

◆トイレ遺構の総合的研究

代表者・黒崎　直　基盤研究A　継続

トイレ遺構の認定手法および研究の方法を考古学を中心にして、関連する諸分野と共同研究する。３年継続の２年目。総合研究会を開催し、発掘された遺構や遺物について検討した。加賀地方の一例では、水洗式からくみ取り式への転換がたどれ、それは人糞肥料の利用開始を暗示する。また土器に付着する「尿酸塩」の析出から「しびん」の存在を考え、寄生虫卵をともなう古墳時代の木樋遺構が出産儀礼と関連する可能性などを検討した。

◆常時微動測定による古建築の構造安定性に関する研究

代表者・内田昭人　基盤研究B　継続

伝統的木造建築物の振動特性を把握することを目的とし、法隆寺建物４棟について常時微動測定をおこなった。五重塔は１次の固有振動数0.90Hz（ヘルツ＝１秒間の振動数）で水平に揺れながら、同時に２次2.50Hzの振動数で弓形にしなる動きをしていた。減衰定数は 4.0%である。１次、２次の固有振動数と減衰定数は、金堂：1.80Hz・4.4%、2.07Hz・1.7%、中門：1.56Hz・4.4%、1.80Hz・2.6%、大講堂：1.70Hz・2.5%、2.10Hz・1.9%である。

◆古代東アジアにおける冠位制度の考古学的研究

代表者　毛利光俊彦　基盤研究C　継続

前年度から継続していた日本・朝鮮冠の資料集成についてはほぼ完了し、今年度は中国東北部・蒙古・西域の資料を多く収集した。主研究としては伽耶冠を取りあげ、洛東江以東の諸小国では新羅の影響を受けて、６世紀前半に冠位制の原形が形成されたが、洛東江以西の諸小国(大伽耶連盟)では562年の滅亡時まで未成熟であったことを推論した。成果論文に「朝鮮古代の冠　～伽耶」(『堅田直先生古稀記念論文集』1997年３月）がある。

◆北東アジアのツングース系諸民族住居に関する歴史民族学的研究

代表者・浅川滋男　基盤研究C　継続

２年目の本年度は、主として中国東北地方におけるツングース・満州語派の担い手たちの住居に関する資料を収集した。また、住宅総合研究財団の助成金により、黒龍江省の小興安嶺一帯で、エヴェンキ族およびオロチョン族の住居を調査した。その結果、満州族系の平地住居にみられる万字炕（コ字形の床暖房施設）と神棚の配置関係が、円錐形テントの空間構造を踏襲したものであることなどが、あきらかになった。

◆和鏡の生産と流通　～出土鏡・鋳造遺跡から見た考古学的考察

代表者・杉山　洋　基盤研究C　継続

３年にわたる研究によって、下記のような点が明らかになった。1)まず研究の第一として、全国にわたる和鏡の出土例を調べ、そのデータベース化を計った。これによって、近年の発掘調査の進展によって、多くの和鏡が発掘されるとともに、その出土の現状が把握されるようになった。成果として、全国歴史時代鏡一覧表を作成した。2)これらの出土資料の中から、最も研究上重要である２遺跡、三重県鳥羽市神島と宮崎県南郷村神門神社の出土鏡を調査し、写真撮影を中心とする調査をおこない、資料を作成した。3)第二に全国的に検出例の多くなってきた和鏡の鋳造遺跡を報告書等で抽出するとともに、出土品の実査をおこなった。その結果、京都市内における検出例の豊富さから、中世京都における和鏡鋳造が七・八条周辺を中心に活発であったことが判明すると共に、鋳型の構造などに、時代による変化のあることが判明した。

◆弥生時代と古墳時代の祭祀の比較研究

代表者・岩永省三　基盤研究C　継続

古代国家形成期であった弥生～古墳時代における社会の動態の一面を、祭祀の分析からあきらかにし、とくに集団祭祀の

出現・展開・消滅の様相と、首長権継承儀礼の出現・展開の様相との有機的連関を追究した。集団祭祀の動向は、首長層の政治的権力者としての成長と密接に関連するが、最終的消滅は各集団内部での自律的契機によるのでなく、西日本の広域にわたる首長層の連合の結成にともなう疑似的集団祭祀としての集団再生祈願儀礼の成立を前提とする。

◆古代の地方末端における官衙遺跡の研究　代表者・山中敏史　基盤研究C　継続

郡衙以下の「官衙的遺跡」を整理すると、いずれも、国郡衙から相対的自律性をもった郷衙とは見なしがたく、郷長や郷雑任らが郡司の指揮下に郡衙機構の機能の一部を分掌した場であり、郷雑任や郷長らの活動の拠点は、本来的には郡司の直接的な管轄下に置かれた郡衙出先施設や居宅などに併設された官衙補完施設であったと考えられる。

◆郷衙、郷長宅に関する考古学的研究

代表者・松村恵司　基盤研究C　新規

律令制下地方行政組織の最末端に位置する郷に、「郷衙」とよぶべき行政の拠点施設が存在したか否か、その論争の再検討を目的とする。「郷長」「里長」墨書土器、刻書紡錘車などを手がかりに、郷長の居宅の構造をあきらかにし、古代集落遺跡の中にみえる官衙的要素を摘出し、その性格を考究する。初年度は郷長関連文字資料と13遺跡の構造分析をおこなったが、郷長の経済的優位性は認められず、郷長居宅に付随するような官衙的施設も抽出できなかった。これらの事実は、郷長が白丁から任用され、律令官人機構の中に組込まれなかった事実と符合する。

◆製作技法と同笵関係からみた中世瓦の本格的研究

代表者・山崎信二　基盤研究C　新規

全国の中世瓦を製作技法を中心として8期に細分した。近畿では京都系・大阪(摂津・和泉）系・大和系の三者が独自性をもち、播磨・紀伊・河内ではこの三者の系統が地域によって交錯した状況を示す。関東も同様で、鎌倉的なものをのぞくと、武蔵系・上野下野系・常陸系に分かれ、それぞれは近畿の大阪系・京都系・大和系に対応するが、時期によっては他系統へ移るものがある。

◆古代におけるガラス及びガラス製品製作に関する基礎研究

代表者・川越俊一　基盤研究C　新規

日本における古代のガラス及びガラス製品生産の歴史的位置付けをあきらかにするために、砲弾形ガラスルツボと小玉用鋳型の出土資料を中心に分析をおこなう。分析を通して、砲弾形ガラスルツボは7世紀後半に出現し、祖形は朝鮮半島に認められること、鋳型は3世紀から8世紀まで変化のないことが判明した。その結果、日本でのガラス製造・製品生産は、7世紀後半に変革期が認められ、その技術は中国大陸や朝鮮半島を通して導入されたとの見通しをもった。

◆歴史的建造物保存修復技術の考え方と方法　～地方文化財修復指針案の作成

代表者・木村　勉　基盤研究C　新規

建造物保存修復技術の基本的な考え方と方法について、重要文化財の場合と比較検討しながら、各地の地方文化財の状況を実地調査して分析する。地方文化財にふさわしい保存・修復のあり方を、事業の体制、当初の計画、修復時の調査、調査結果の分析と修復方針の検討、実施計画と修理工事、記録の作成などの項目によって検討のうえ、指針案『地方文化財保存修復技術の考え方と方法』を作成する予定。調査を明治以降の洋風建築にしぼり、1996年度は北海道・東北地域を調査した。

◆日本古代の湧泉、流れ遺構の研究

代表者・高瀬要一　基盤研究C　新規

近年、奈良県を中心とする地域において発見された7ケ所の4～8世紀代の湧水施設と、そこから流れ出る水を導いた水路の遺跡について、その形態、構造、立地、水源、石組み、祭祀遺物などを分析し、遺跡の特色、性格をあきらかにすることを目的としている。初年度は7ケ所の遺跡について現地調査と資料収集、整理作業をおこなった。

◆中近世期における金工材料と製作技法の歴史的変遷に関する研究

代表者・村上　隆　基盤研究C　新規

中近世期の遺跡から出土する金工品を対象とする材料科学的な見地からの調査により、当時の金工製作に用いられた材料とその技法を探ることを試みている。たとえば、黄銅タイプの合金が、小柄などの刀装具やキセルなどに対してすでに16世紀中頃には使用されていたことを確認できた。伝世資料を中心とした従来の美術工芸史的視点に、本研究の成果を加えることで、日本における金工技術史を体系化することを目的としている。

◆飛鳥奈良時代における畿内と東国との交流の研究

代表者・次山　淳　奨励研究A　新規

律令国家による地方支配の実態を解明するうえで、東国経営の形態、とくに蝦夷と呼ばれた人々との相互の交渉のありかたを分析することは重要な視点のひとつである。本研究では、飛鳥石神遺跡に東国からもたらされた内面黒色土師器や「夷」字墨書・刻書土器等の考古資料を中心に関連する資料の集成と分析をおこなった。また、この成果により飛鳥資料館特別展示『斉明紀』の一部を構成した。

◆太政官公文録中の建築仕様書からみた明治初期木造洋風建築の設計寸法に関する研究　代表者・長尾　充　奨励研究A　新規

本研究は、洋風建築とともに日本に紹介されたメートル法、ヤード・ポンド法などの洋式尺度の建築設計寸法への採用状況と、伝統的な設計寸法への影響を、官庁関連の建築仕様書を通して解明することを目的とした。対象とした木造建築の仕様書136通には、洋式尺度を記す仕様書は皆無で、和式尺度への換算値もみいだせない。明治初期官庁営繕では、洋風建築も和式尺度で設計され、伝統建築への影響もきわめて小さかったことがあきらかになった。

◆近世中期における江戸の緑地学的研究

代表者・平澤　毅　奨励研究A　新規

本研究の目的は、近世中期の江戸を対象として、都市の緑地的空間利用のあり方を主に文化史・制度史の面からあきらかにすることである。とくに、享保期の江戸における公園的空間の成立は注目にあたいする。これらの空間は、火除地広場や公共の園地に代表されるものであり、享保改革の地域政策と密接な関連をもって発展する過程をあきらかにした。

学会・研究会等の活動

奈文研を会場にして、下記の学会・研究会等が開催された。

◆木簡学会

木簡学会は、1996年12月7～8日の両日、第18回研究集会を平城宮跡資料館で開催した（参加者約170名）。今回は韓国出土の木簡をテーマとし、田中俊明（滋賀県立大学）「韓国木簡出土の現状」、李成市（早稲田大学）「韓国出土の木簡について」の報告があった。また、最近の国内出土事例の報告は以下のとおり。山下信一郎「1996年全国出土木簡概要」、山田真宏（鳥取市埋蔵文化財調査センター）「鳥取市岩吉遺跡出土の木簡」、加賀見省一（兵庫県日高町教育委員会）「祢布ケ森遺跡と出土木簡」、清水みき（向日市教育委員会）「長岡京東一坊大路西側溝出土の木簡」。なお、大会に合わせ『木簡研究』18号を発刊した。（舘野和己）

◆長屋王家木簡検討会

平城宮跡発掘調査部史料調査室では、1990年度以来、長屋王家木簡検討会をもち、大量に出土した長屋王家木簡・二条大路木簡の釈読にあたるとともに、年に2回の研究会をおこなっている。96年度は2度の釈読検討会と、以下の研究会をひらいた。12月13日：門脇禎二（京都橘女子大学）「長屋王家の『家産』経営」・古尾谷知浩「長屋王家の没官」。3月26日：和田萃（京都教育大学）「南山の九頭竜」・佐藤宗諄（奈良女子大学）「長屋王家木簡小考～『所』とその機能」。なお所外研究者は、堀池春峰（東大寺）・岩本次郎（甲子園短期大学）・鬼頭清明（東洋大学）・東野治之（大阪大学）各氏が釈読検討会と研究会に、直木孝次郎（甲子園短期大学）・門脇禎二・狩野久（岡山大学）・関根真隆・佐藤宗諄の各氏が研究会に毎回参加されている。（舘野和己）

◆条里制研究会

条里制に関わる学際的な研究会で、現在会員数は考古学・地理学・文献史学の研究者など約350人。毎年1回の研究大会を開くとともに、研究報告や発掘事例報告などを収めた会誌『条里制研究』を刊行している。97年3月8～9日には「条里と開発」をテーマに第13回大会を奈文研で開催した。今後は都市の問題も積極的に取り上げる研究会として発展させようとする提案もなされている。（山中敏史）

◆官営工房研究会

12月24日に研究会を開き、櫛木謙周（京都府立大学）「首都における手工業の展開」の報告後、質疑・討論をおこなった。櫛木氏は、官営工房に限定せず、都城の手工業の問題を、手工業生産の首都への集約という観点から、首都としての特質を見据えつつ、平安時代まで展望した。この報告をめぐって、長屋王家木簡にみえる工人たちが長屋王家専属なのか、工人たちの活動痕跡を遺構として確認できるのか、官営工房の専属労働者と雇用労働者の賃金支給方法の違いはなぜ生じるのかなどの点を議論した。今後も考古学と文献史学の共同による個別の事例研究を重ねていく予定である。なお、昨年度の研究会の成果を『官営工房研究会会報4』として刊行した。（渡邊晃宏）

◆中国建築史研究会

田中淡氏（京大人文研）を中心とする中国建築史研究会を4回開催した。発表は以下のとおり。7月22日：何培斌（香港中文大学）「唐代仏寺　―『祇園寺図経』と敦煌壁画"浄土変相"小考―」、11月18日：楊鴻勛（中国社会科学院考古研究所）「唐長安大明宮含元殿の考古発掘と復原研究の新収穫　―平城宮第1次大極殿との相同点―」、3月6日：楊志軍（黒龍江省文物管理局）「渤海上京龍泉府遺跡の発掘と整備」、3月11日：栗原伸治（総合研究大学院大学博士課程）「窰洞の再分類および固有性」・坂田昌平（京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程）「黒龍江朝鮮族の集落と住まい」。（浅川滋男）

◆建築史談話会

建築史談話会は関西の建築史研究者・修理技術者等の研鑽と交流の場である。以下の研究発表および見学会をおこなった。6月1日：金剛峰寺不動堂修理工事現場見学会。7月13日：酒井一光（大阪市立博物館）「尾張式社殿配置の研究」・黒田龍二（神戸大学）「神戸市北区前中家住宅の解体調査」。10月18日：冨島義幸（京都大学大学院）「法成寺の塔について」・藤田盟児（名古屋造形芸術大学）「岡山市域の近世寺社大工の階層性について」。11月8日：本願寺飛雲閣修理工事現場見学会。12月7日：溝口正人（名古屋市立大学）「中世即位式と平安宮大極殿」・光井渉（神戸芸術工科大学）「山岸常人著『日本建築の方法論』を斬る」。（箱崎和久）

講演する楊鴻勛先生（中国建築史研究会）

◆古代の土器研究会

歴史時代の土器の様相の解明を目的として活動をおこなっており、1991年からほぼ年1回の割合でシンポジウムを開いてきている。今年度は9月24・25日に第5回シンポジウムを開催し、土師器の煮炊具に関して各地域の事例を検討した。都城で使用する煮炊具は「都城型」と呼べる定型化したもので、その生産者集団は都城の移動にともなって移住し生産をおこなうことや、地方との交流が明確となるなど多くの成果を得た。（玉田芳英）

◆東アジア旧石器研究会

1997年3月23日、奈文研で講演会「東アジア最古の人類文化を求めて」を開いた。講演者は、黄慰文教授（古脊椎動物・古人類研究所）と謝飛所長（河北省文物研究所）。黄教授は広西百色遺跡と貴州大洞遺跡での最新の発掘成果を報告し、謝所長は、泥河湾地区で実践しつつある旧石器研究の方法論と前・中期の旧石器遺跡の調査状況を語った。いずれも最新の中国旧石器研究の成果と問題意識の高さを示した。（加藤真二）

◆埋蔵文化財写真技術研究会

7月5～6日の両日、第8回研究会をおこなった。参加者約100名。研究会の時期にあわせ、西安碑林博物館の羅忠民氏を招聘し、講演していただいた。『埋文写真研究』vol.7を刊行。（佃　幹雄）

調査研究彙報

この1年、以下のような調査・研究・整備事業にもかかわってきた。

◆桂離宮の発掘調査　桂離宮庭園整備基本工事にともなう発掘調査を、宮内庁からの委嘱をうけて平成6年度から実施している。平成8年度は、修理対象となった池の乱杭護岸付近に7ケ所の小トレンチを設定して、おもに断面観察により護岸の築成状況等の調査をおこなった。この結果、各調査区とも護岸石の抜取り穴等がないことから、それらの部分の護岸はもともと乱杭ないしは草止め等のソフトな材料を用いていたことが判明した。また、大部分の調査区で、当初の護岸より池側に張り出すかたちでの改修がおこなわれている状況があきらかになった。このことから、池は全体的に築造時よりも、わずかではあるが、狭まっていると推定できる。遺物としては、「千代原　半右衛門」の刻印のある軒平瓦が出土し、江戸時代後半のものとみなされるから、桂山荘への瓦の供給業者についての知見を得ることができた。　(小野健吉)

◆鳥取県の近代化遺産調査　鳥取県の近代化遺産調査は、平成8年から2ケ年計画ではじまった。近代化遺産とは産業・交通・土木に関わる幕末～戦前の遺産であり、平成2年度から文化庁の国庫補助事業として、各県で調査を進めている。奈文研としては、秋田県につぐ2県目の調査になる。初年度はまず、県内市町村全域で悉皆調査をおこない、39市町村から610件の対象物件をリストアップした。これをもとに平成9年1月31日に調査委員会を開き、約100件の詳細調査候補を選びだした。第1回の詳細調査は、3月11日～15日、県西部の米子市を中心におこなった。このうち、江府町の旧江尾発電所は、ルスティカ風の石壁と木造トラス架構の屋根をもつ堂々とした外観の建物である。ところが調査の結果、この石壁は意匠材ではなく構造体であり、大正7年に建造されたことがあきらかになった。発電関係の備品は撤去されているものの、純石造建造物として貴重な近代化遺産である。平成9年度は2度の詳細調査を実施し、報告書を刊行する予定である。

旧江尾発電所（鳥取県江府町）

(箱崎和久)

◆中国黒龍江省におけるオロチョン族とエヴェンキ族の住居調査　住宅総合研究財団の助成研究「北東アジアのツングース系諸民族住居に関する歴史民族学的研究」の第3次調査として、中国黒龍江省の小興安嶺一帯をおとずれ、オロチョン族とエヴェンキ族の住居を調査した。小興安嶺のツングースは、もともと「仙人柱」とよばれる円錐形テントをもって遊動する狩猟民だったが、1950年代末からの定住化政策によって、近年は満州族・漢族系の平屋建物に住むようになっている。そこで、各地の平屋建物を実測調査するとともに、狩猟時において今なお使われている「仙人柱」を作ってもらい、その製作過程を記録にとった。興味深いのは、平屋建物の西の脇間に作られるコ字形の万字炕と神棚マルの位置関係が、テント内におけるコ字形の座と神像のそれに対応していることである。調査の詳細は、『住宅総合研究財団研究年報』23号で報告した。　(浅川滋男)

◆ベトナムにおける日本人墓の発掘調査と保存整備　ベトナムのホイアン市には、17世紀中期の日本人墓が残っている。その現状を把握するため、まず実測調査と写真撮影をおこない、さらに墓を発掘調査した。その結果、墓本体がシックイでつくられた3段構造であること、最下段が墓室で現地表下80cmもの深さにおよぶこと、第2段までは本来、円形の土盛りに覆われていたこと、現状の第3段は当初のものではなく、内部に当初のものと考えられる亀甲状の第3段が埋め込まれていること、墓石前面には2段のテラスがあったこと、などがあきらかになった。これらの成果をふまえて、以下のような保存整備計画を立案し、ホイアン市の同意を得た。

1) 砂岩製の墓石およびシックイ製の墓本体を合成樹脂で強化したうえで、第2段目までの土盛りを復原する。
2) 周囲に墓の保護を兼ねた見学路を新設する。
3) 越・仏・英・日4ヶ国語の説明板を設置する。　(高瀬要一)

◆中ノ庄遺跡の整備　奈良県宇陀郡大宇陀町に所在する中ノ庄遺跡は、柿本人麻呂が軽皇子の伴をして安騎野に猟をし、「かぎろひ」をみた頃の建物遺構・池状遺構などが確認された遺跡である。遺跡地は当初、町民プール建設の予定であったが、遺跡公園として整備することになり、建物復原・池状遺構整備などとあわせて、故中山画伯の壁画「安騎野の朝」の騎馬人麻呂像を原寸の石像彫刻として設置することになった。石像製作の概略手順は、次のとおりである。寸法計則→1/6計画図→1/6粘土模型→1/6樹脂模型→原寸粘土模型→型取り→石膏模型→石像彫刻。石材は山東省産の黒雲母の少ない花崗岩とし、原寸模型以降は中国上海市内で製作した。問題は、壁画のイメージを損なわず、馬体・装飾物などをどこまで7世紀後葉に近づけられるか、一石の彫刻の荷重を馬の4本足でいかに支えるかであった。半年あまりの短期間であったが、無事竣工をみた。　(加藤允彦)

◆名勝「旧大乗院庭園」の整備　3年目となる旧大乗院庭園の整備事業は、合計約600m²を引き続き発掘し（年報Ⅲ参照）、あわせて南3中島の整備を実施した。中島の整備は、3島の景観を残しつつ水際線では1島とする考えもあったが、江戸時代の形状をできる限り尊重する整備方針にしたがって、現状どおり3島として整備することにした。昨年度と同じく、粘土叩き締め、杭丸太打ち込み、撒き石による洲浜状化粧を施した。中島の植栽はサルスベリを残して、その他は伐採し地被に野芝を張った。なお、景石は現代の表土層に据えられているが、当分の間存置することとした。　(加藤允彦)

II-2. 研修・指導と教育

埋蔵文化財センターの研修と指導

1996年度は、主に地方公共団体の埋蔵文化財行政担当者を対象にして、下記一覧表の研修を実施した。また、右段の遺跡・建造物等について、調査もしくは整備・修復の指導・協力をおこなった。 (沢田正昭)

区分	課程	内容	担当室	実施期日	研修日数	修了者数
一般研修	一般課程	遺跡の発掘調査に関する基礎的な知識と技術の研修	研究指導部	7月16日～8月9日	25	30
専門研修	文化財写真課程	埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な専門的知識と技術の研修	情報資料室	8月20日～9月11日	23	21
	遺跡測量課程	遺跡の測量に関して必要な専門的知識と技術の研修	発掘技術研究室	9月18日～10月16日	29	6
	遺跡探査課程	遺物の探査に関して必要な専門的知識と技術の研修	測量研究室	10月22日～10月31日	10	8
	保存科学課程	遺物の保存に関する保存科学的な専門的知識と技術の研修	遺物処理研究室	11月7日～11月21日	15	18
	環境考古課程	古環境復原研究のために必要な専門的知識と技術の研修	考古計画研究室	11月27日～12月11日	15	20
	信仰関連遺跡調査課程	考古学から宗教を復原するために必要な専門知識と学問的手続を研修	考古計画研究室	1月23日～2月6日	15	35
	遺跡保存整備課程	遺跡の整備に関して必要な専門的知識と技術の研修	保存工学研究室	2月13日～3月6日	22	10
特別研修	埋蔵文化財基礎課程	埋蔵文化財行政を担当する上で必要な遺跡・遺物に関する基礎的知識の研修	保存工学研究室	7月3日～7月10日	8	34
	荘園遺跡調査課程	荘園遺跡の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	集落遺跡研究室	12月17日～12月20日	4	34
	報告書作成課程	読みやすく使いやすい報告書を作成するノウハウを研修	考古計画研究室	1月8日～1月17日	10	40
	人骨調査課程	遺跡から出土した人骨の調査に関して必要な基礎的知識の研修	発掘技術研究室	3月12日～3月19日	8	21
	外国人研修	日本の文化財と日本の特色ある調査・研究方法の知識の研修	研究指導部	6月6日～6月10日	5	12

日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧

発掘調査指導・遺物鑑定・遺構探査

御所野遺跡(岩手)、大戸古窯群(福島)、上総国府推定地(千葉)、北代遺跡(富山)、昼飯大塚古墳・江馬氏城跡下館跡(岐阜)、内野二本ヶ谷石塚古墳・ケイセイ遺跡・勝間田城跡(静岡)、三河国分寺(愛知)、西縄手下遺跡(福井)、城之越遺跡・斎宮跡・長者屋敷遺跡(三重)、粟津湖底遺跡・大岩山古墳(滋賀)、長岡京跡・紫香楽宮跡・内里八丁遺跡・住友有芳園(京都)、池上曽根遺跡・野々上遺跡(大阪)、伊達家墓城(奈良)、武庫庄遺跡・上脇遺跡・大市山遺跡(兵庫)、上長浜貝塚・石見銀山遺跡・加茂岩倉遺跡・三田谷遺跡・古八幡付近遺跡(島根)、泰廃寺関連窯跡・万富東大寺瓦窯跡・門田貝塚(岡山)、冠遺跡(広島)、長登銅山跡・常徳寺庭園跡(山口)、弘福寺領讃岐国山田郡田図・川津一ノ又遺跡(香川)、葉佐池古墳・伊予国分寺跡(愛媛)、田村遺跡群(高知)、鴻臚館跡・筑紫観音寺所蔵物(福岡)、原の辻遺跡(長崎)、西田橋移設地・宇宿貝塚(鹿児島)、内宮田遺跡・塚原遺跡・寺崎遺跡(宮崎)、具志原貝塚(沖縄)

遺跡整備指導・保存処理

福山城(北海道)、御所野遺跡・盛岡城跡・志波城跡(岩手)、払田柵跡(秋田)、慧日寺跡・上人壇廃寺跡(福島)、平沢官衙遺跡(茨城)、飛山城跡・法界寺跡(栃木)、滝沢遺跡(群馬)、北代遺跡(富山)、七尾城跡・石堂山大宮坊跡・山代再興九谷窯跡(石川)、昼飯大塚古墳・杉崎廃寺遺跡・元屋敷陶器窯跡(岐阜)、賤機山古墳・三池平古墳・横須賀城跡・長浜城跡(静岡)、朝倉氏遺跡(福井)、夏見廃寺・赤木城跡・田平子峠刑場跡・徳川家墓所・上野城跡(三重)、安土城跡・大岩山古墳・芦浦観音寺・木村古墳群・近江国庁跡(滋賀)、丹波国分尼寺・大覚寺御所跡・椿井大塚山古墳・滝岡田古墳(京都)、心合寺山古墳・千早城跡・楠木城跡・赤阪城跡(大阪)、赤穂城・感状城跡(兵庫)、大安寺・中之庄遺跡・平城京朱雀大路・藤ノ木古墳・大乗院庭園・ナガレ山古墳・キトラ古墳・頭塔・水落石神遺跡(奈良)、梶山古墳・伯耆国庁跡・尾高浅山遺跡・鳥取城跡附太閤ヶ平(鳥取)、津山城跡・岡山城跡・鬼城山・山陽町遺跡(岡山)、奥阿武宰判勘場跡(山口)、有岡古墳群・丸亀城跡・石清尾山古墳群(香川)、宇和島城・丸亀城跡(愛媛)、田村遺跡群(高知)、大野城跡太宰府口城門・日拝塚古墳・前原市文化財整備(福岡)、名護屋城跡(佐賀)、大村横穴群・つつじヶ丘横穴群(熊本)、元町石仏・石造文化財・亀塚古墳(大分)、清水磨崖仏(鹿児島)、都城市出土遺物(宮崎)、フルスト原遺跡・斎場御嶽・伊礼伊森原遺跡(沖縄)

建造物・庭園の修復と整備

天神荘(秋田)、加多志波神社(福井)、兵主神社庭園(滋賀)、鹿苑寺庭園・滴翠園(京都)、旧トーマス住宅耐震対策・明石公園石垣災害復旧(兵庫)、養翠園(和歌山)、県知事公舎解体(鳥取)

京都大学大学院
人間・環境学研究科

文化財に関する高等教育は、これまで考古学・建築史学・文献史学・庭園史学・美術史学、あるいは理科系の関連分野など、大学における各教育部門によって個別におこなわれてきた。しかし、文化財の調査研究者を育成するためには、各専門分野の枠を超えた学際的な研究、文化財の実物にじかに接した調査・観察や分析をともなう教育がますます必要になっている。文化財学の類の大学教育課程が新設され始めたのは、そうした動向を反映しているが、文化財に関する教育の場としてはまだ一部に限られており不十分である、という現状にある。

そうしたなかで、当研究所も、文化財行政に資する研究機関として埋蔵文化財、建造物、文献史料、庭園などの調査研究を推進しながら、その成果を学生らに習得させる活動を一部でおこなってきた。しかし、文化財の高等教育に対する近年の社会的要請の高まりに応じ、教育機能を充実させることも急務の課題となっていた。そこで1994年、京都大学に大学院人間・環境学研究科が設置されるのを機会に、文化・地域環境学専攻の環境保全発展論講座の客員分野を京都国立博物館とともに担当することになったのである。1997年4月現在、奈文研からは6名が客員教授・助教授に併任され、住環境保全論（山中敏史・浅川滋男）、考古環境学論（町田章）、文化財保存科学論(沢田正昭)、文化財保存調査方法論(光谷拓実・松井章)、の各講義・演習・実習を担当している。

講義や演習の内容は次のとおりである。山中；日本歴史考古学の分野から、日本古代の遺跡の分析を通じて、律令国家の歴史的特質や各地域の諸環境と国家による地方支配との関わりについて考察する。浅川；民族・考古・建築史学の分野から、日本およびアジア諸地域の歴史的居住環境の現状を把握し、その保全の実態と方向性を論じる。町田；中国考古学の分野から、洛陽永寧寺の発掘調査報告書を取り上げ、中国における発掘・遺跡の保存について検討する。沢田；文化財保存科学の分野から、文化財資料の理化学的分析・保存修復に関する研究のあり方を論じる。光谷；木材組織学・年輪年代学の分野から、出土木材の樹種同定、年輪年代測定作業を通じて、考古学との共同研究を推進するとともに、古環境復元をおこなう。松井；環境考古学の分野から、動物遺体・土壌分析に関する研究書の講読や資料分析により、人間の生活・環境を復元する。講義は、各自原則として週一回京大でおこない、他講座の学生も受講している。演習・実習などは主に当研究所などでおこなっている。実習としては、平城宮・藤原宮などの発掘調査や遺物の整理、アジア少数民族住居などの現地調査、全国各地の文化財資料の理化学分析や保存修復、樹種同定や年輪測定、自然遺物などの採取や種の同定作業などをおこなっている。

入学希望者はあらかじめ志望する指導教官を決めて、前期または後期の試験を受ける方式となっている。奈文研客員分野の学生定数は各学年2名であり、毎年数名が入学している。1997年4月現在の学生数は、山中；修士課程2年1人、浅川；研究生1人、町田；博士課程1年1人、修士課程1・2年各1人、研究生1人、沢田；博士課程2年1人、修士課程1・2年各1人、松井；博士課程2年1人、修士課程2年2人、修士課程1年1人、である。研究生はいずれも留学生である。修士論文の作成などにおいては、現状では各教官が自分の所に志望してきた学生をそれぞれ個別に指導するシステムになっている。そのため、担当授業科目名と実際の授業内容との隔たりや教官の専門分野の違いなどによって学生にとまどいが生じないように、できるだけ受験以前あるいは入学以前に志望学生と教官との意志疎通を図るよう心がけている。今後もそうした場を設けることが必要であろう。

この大学院教育が始まって3年を過ぎ、学生数も増え、奈文研における文化財教育の役割は増大している。そして、実際の資料に接した教育の必要上、奈文研客員分野の学生は修学期間の大半を当研究所内で過ごすことになる。そうした実態を踏まえ、教育効果を高めるためには、今後、学生を快く受け入れる体制が研究所全体としてハード面でもソフト面でも十分整備されることが望まれる。また、奈文研の各研究員が、学生のニーズに応え、各自の専門分野を活かし相互に補完しあいながら教育にあたれるとすれば、当研究所で文化財の高等教育を実施する大きなメリットとなると思われ、そうした体制づくりも必要であろう。

（山中敏史）

II-2. 研修・指導と教育

埋蔵文化財センターの研修と指導

1996年度は、主に地方公共団体の埋蔵文化財行政担当者を対象にして、下記一覧表の研修を実施した。また、右段の遺跡・建造物等について、調査もしくは整備・修復の指導・協力をおこなった。 (沢田正昭)

区分	課程	内容	担当室	実施期日	研修日数	修了者数
一般研修	一般課程	遺跡の発掘調査に関する基礎的な知識と技術の研修	研究指導部	7月16日～8月9日	25	30
専門研修	文化財写真課程	埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な専門的知識と技術の研修	情報資料室	8月20日～9月11日	23	21
	遺跡測量課程	遺跡の測量に関して必要な専門的知識と技術の研修	発掘技術研究室	9月18日～10月16日	29	6
	遺跡探査課程	遺物の探査に関して必要な専門的知識と技術の研修	測量研究室	10月22日～10月31日	10	8
	保存科学課程	遺物の保存に関する保存科学的な専門的知識と技術の研修	遺物処理研究室	11月7日～11月21日	15	18
	環境考古課程	古環境復原研究のために必要な専門的知識と技術の研修	考古計画研究室	11月27日～12月11日	15	20
	信仰関連遺跡調査課程	考古学から宗教を復原するために必要な専門知識と学問的手続を研修	考古計画研究室	1月23日～2月6日	15	35
	遺跡保存整備課程	遺跡の整備に関して必要な専門的知識と技術の研修	保存工学研究室	2月13日～3月6日	22	10
特別研修	埋蔵文化財基礎課程	埋蔵文化財行政を担当する上で必要な遺跡・遺物に関する基礎的知識の研修	保存工学研究室	7月3日～7月10日	8	34
	荘園遺跡調査課程	荘園遺跡の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	集落遺跡研究室	12月17日～12月20日	4	34
	報告書作成課程	読みやすく使いやすい報告書を作成するノウハウを研修	考古計画研究室	1月8日～1月17日	10	40
	人骨調査課程	遺跡から出土した人骨の調査に関して必要な基礎的知識の研修	発掘技術研究室	3月12日～3月19日	8	21
	外国人研修	日本の文化財と日本の特色ある調査・研究方法の知識の研修	研究指導部	6月6日～6月10日	5	12

日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧

発掘調査指導・遺物鑑定・遺構探査

御所野遺跡(岩手)、大戸古窯群(福島)、上総国府推定地(千葉)、北代遺跡(富山)、昼飯大塚古墳・江馬氏城跡下館跡(岐阜)、内野二本ヶ谷石塚古墳・ケイセイ遺跡・勝間田城跡(静岡)、三河国分寺(愛知)、西縄手下遺跡(福井)、城之越遺跡・斎宮跡・長者屋敷遺跡(三重)、粟津湖底遺跡・大岩山古墳(滋賀)、長岡京跡・紫香楽宮跡・内里八丁遺跡・住友有芳園(京都)、池上曽根遺跡・野々上遺跡(大阪)、伊達家墓城(奈良)、武庫庄遺跡・上脇遺跡・大市山遺跡(兵庫)、上長浜貝塚・石見銀山遺跡・加茂岩倉遺跡・三田谷遺跡・古八幡付近遺跡(島根)、泰廃寺関連窯跡・万富東大寺瓦窯跡・門田貝塚(岡山)、冠遺跡(広島)、長登銅山跡・常徳寺庭園跡(山口)、弘福寺領讃岐国山田郡田図・川津一ノ又遺跡(香川)、葉佐池古墳・伊予国分寺跡(愛媛)、田村遺跡群(高知)、鴻臚館跡・筑紫観音寺所蔵物(福岡)、原の辻遺跡(長崎)、西田橋移設地・宇宿貝塚(鹿児島)、内宮田遺跡・塚原遺跡・寺崎遺跡(宮崎)、具志原貝塚(沖縄)

遺跡整備指導・保存処理

福山城(北海道)、御所野遺跡・盛岡城跡・志波城跡(岩手)、払田柵跡(秋田)、慧日寺跡・上人壇廃寺跡(福島)、平沢官衙遺跡(茨城)、飛山城跡・法界寺跡(栃木)、滝沢遺跡(群馬)、北代遺跡(富山)、七尾城跡・石堂山大宮坊跡・山代再興九谷窯跡(石川)、昼飯大塚古墳・杉崎廃寺遺跡・元屋敷陶器窯跡(岐阜)、賤機山古墳・三池平古墳・横須賀城跡・長浜城跡(静岡)、朝倉氏遺跡(福井)、夏見廃寺・赤木城跡・田平子峠刑場跡・徳川家墓所・上野城跡(三重)、安土城跡・大岩山古墳・芦浦観音寺・木村古墳群・近江国庁跡(滋賀)、丹波国分尼寺・大覚寺御所跡・椿井大塚山古墳・滝岡田古墳(京都)、心合寺山古墳・千早城跡・楠木城跡・赤阪城跡(大阪)、赤穂城・感状城跡(兵庫)、大安寺・中之庄遺跡・平城京朱雀大路・藤ノ木古墳・大乗院庭園・ナガレ山古墳・キトラ古墳・頭塔・水落石神遺跡(奈良)、梶山古墳・伯耆国庁跡・尾高浅山遺跡・鳥取城跡附太閤ヶ平(鳥取)、津山城跡・岡山城跡・鬼城山・山陽町遺跡(岡山)、奥阿武宰判勘場跡(山口)、有岡古墳群・丸亀城跡・石清尾山古墳群(香川)、宇和島城・丸亀城跡(愛媛)、田村遺跡群(高知)、大野城跡太宰府口城門・日拝塚古墳・前原市文化財整備(福岡)、名護屋城跡(佐賀)、大村横穴群・つつじヶ丘横穴群(熊本)、元町石仏・石造文化財・亀塚古墳(大分)、清水磨崖仏(鹿児島)、都城市出土遺物(宮崎)、フルスト原遺跡・斎場御嶽・伊礼伊森原遺跡(沖縄)

建造物・庭園の修復と整備

天神荘(秋田)、加多志波神社(福井)、兵主神社庭園(滋賀)、鹿苑寺庭園・滴翠園(京都)、旧トーマス住宅耐震対策・明石公園石垣災害復旧(兵庫)、養翠園(和歌山)、県知事公舎解体(鳥取)

II-3. 遺跡整備・復原事業と展示

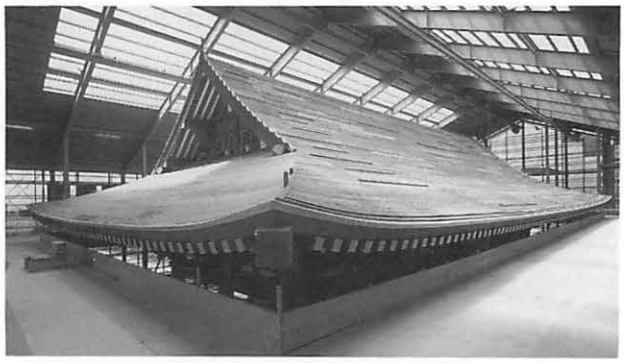
平城宮跡・藤原宮跡等の整備

平城宮内では、4年度目をむかえた朱雀門と東院庭園の復原事業が佳境に入った。また、宮内省の築地と南門の復原が完了したほか、若干の施設整備をおこなった。

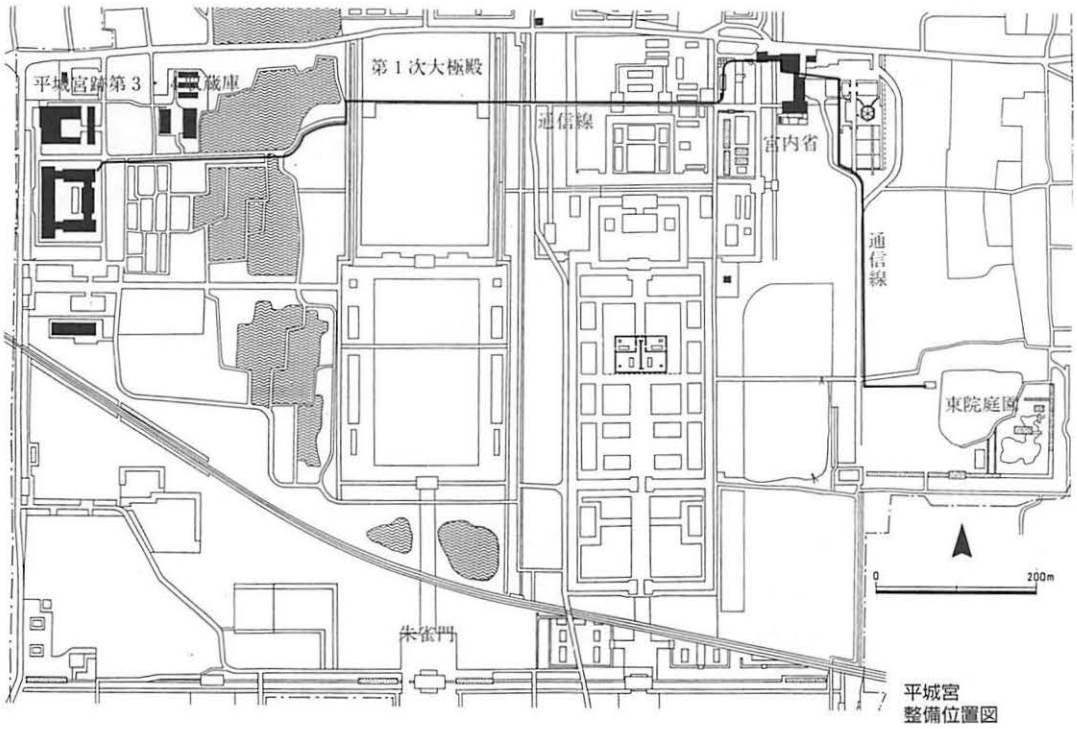
1．朱雀門の復原事業

昨年度までに、二重の組物まで組立が完了した。本年度は引き続き二重の組立をおこなった。まず隅木、地垂木、飛檐垂木を取り付け、軒廻りの組立をおえた。次に軒の垂下を防ぐための桔木をすえ、その上に小屋組を組み上げた。年度末までに野垂木を打ち上げ、野地板を打ちおえた。塗装工事として、初重の組物廻りの丹土塗りをおこなった。屋根工事として、平瓦、丸瓦、軒先平瓦、軒先丸瓦等を必要量焼きおえ、現場に搬入した。素屋根の北側にある仮設作業場において、鴟尾や降棟、隅棟の納まりを検討するために、二重の妻部分の実大屋根模型を作成した。この結果、降棟の先端の鬼瓦は中世以降は平瓦の筋に据えられるが、発掘鬼瓦の形状から丸瓦筋の可能性が強いことが判明し、次年度の施工時においてもこれを実施することとするなど、いくつかの新知見を得た。また、構造補強工事として、初重の耐震壁廻りの鉄骨、小屋組の筋かい廻りの金物の製作をおこなった。このほか、研究所の方で鴟尾、風鐸、隅木木口等金物の模型を作成し、形状などについて検討をおこなって実施案をかため、次年度発注に備えた。なお、復原工事現場の一般公開を春（5月3～5日）と秋（10月8～11日）の2回実施し、いずれも1万人をこえる訪問客でにぎわった。

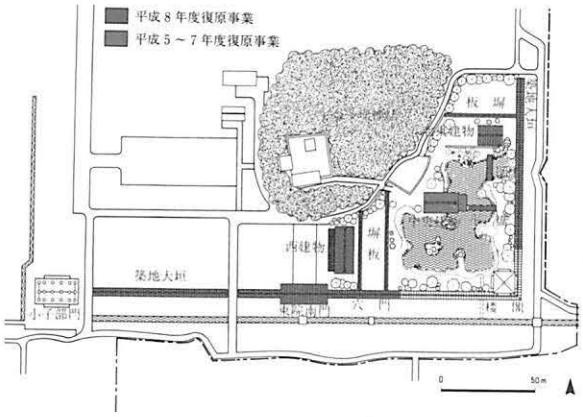
（村田健一）



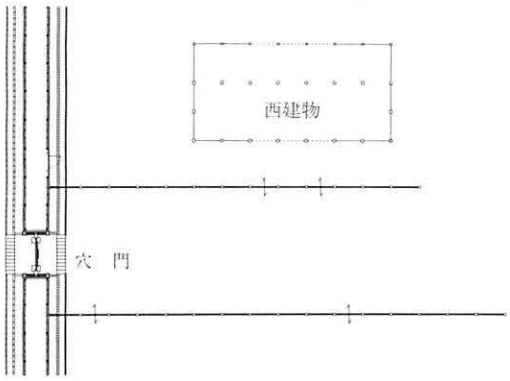
朱雀門復原工事（二重尾根下地まで組立完了）



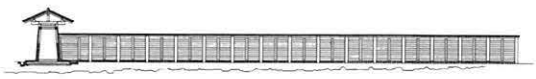
平城宮
整備位置図



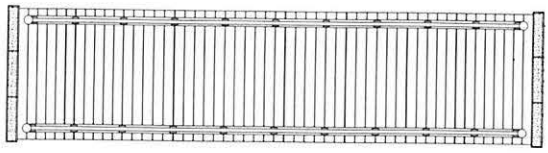
東院庭園全体図　1：4000



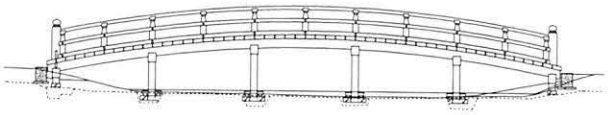
南北掘立柱塀　平面図　1：800



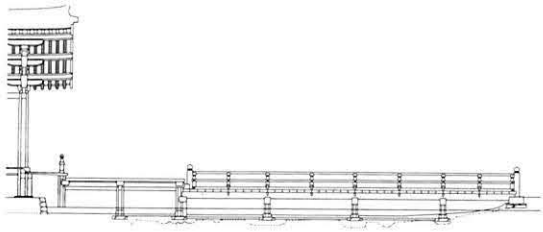
東側の掘立柱塀　東立面図　1：800



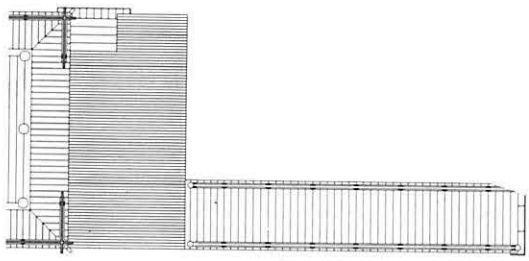
反橋　平面図　1：200



反橋　断面図　1：200



平橋　断面図　1：300



平橋　平面図　1：300

2．東院庭園の復原事業

庭園の整備　園池を中心とする庭園の復原整備をおこなった。復原するのは後期東院庭園で、建物を含めた庭園空間全体の復原を目指す。基本的方針はつぎのとおりである。まず、園池部分では北築山や各出島・岬の景石を現状のままの露出展示とし、他の園池部分は上層（後期東院庭園）の遺構面＋10cmを仕上げ面とした実物大復原とする。それにともない、計画水面高は遺構園池の推定水面高＋10cmの標高61.25ｍとする。景石補充は、あきらかに景石の抜取穴と判断できる穴にのみおこなう。園池周縁部や陸部など、上層遺構面が削平されていた部分については、地形を推定復原し造成する。植栽は、樹種を出土植物遺体や文献史料等から選定し、位置を樹木抜取穴と推定できる穴および庭園の景観上適切な場所とする。

上記の復原整備方針にもとづき、本年度は、以下の具体的な手法で復原整備工事を実施した。

①遺構面保護：園池遺構面には全面に透水性土木シートを敷く。②地形造成：発掘調査で下層まで掘り下げていた部分は上層遺構面のレベルまで嵩上げ造成。遺構が削平された園池周縁部や陸部は、復原建物のレベルと調整しながら推定復原造成。③園池仕上げ：原則として上層遺構面＋10cmが仕上がり高となるよう礫敷き。このさい、遺構で確認できる洲浜の勾配や礫の寸法に基づいた施工につとめる。④景石の取扱：北築山をはじめ各出島・岬等に残存する景石は、合成樹脂による保存処理をおこなったうえ露出展示。景石補充は、残存する景石の石質や形状を参考に、石を選定し据え付ける。⑤園池給排水：給水は地下水汲上げ（宇奈多理神社西方の井戸）と循環の併用。給水量は750㍑/分。給水口は遺構園池本来の北東部からの給水のほか、滞水がないよう園池内に給水管を９箇所埋設。排水は南東部の本来の排水路のみとし、ポンプによる循環とオーバーフロウによる放水を併用。

東院庭園の復原建物　1996年度は中央建物が竣工し、平橋・反橋・南北掘立柱塀・西建物の復原をすすめた。西建物の復原検討については別項（24～25頁）とし、復原建物の概要を記す。なお、これらの復原造営基準尺は南北板塀で１尺＝30.0cm、それ以外は１尺＝29.6cmである。

①平橋：第99次調査で検出したSC8465である（『年報

1977』)。桁行4間、梁間1間の掘立柱による東西橋で、柱間寸法は梁間8尺、桁行12尺等間で東端間のみ10尺となっている。中央建物露台とその東面岬をつなぐ平橋である。柱は中央建物縁束の出土柱根にならい八角形断面とし、径は8寸とした。橋の偏心止めのため火打梁をいれた。床板は『信貴山縁起絵巻』に描かれた橋にならい面取りを施した。高欄は東大寺法華堂・薬師寺東塔、親柱は平等院鳳凰堂にならい、擬宝珠は第32次調査出土の瓦製擬宝珠にならい瓦製とした。基礎はRC造で柱穴掘形を利用した独立基礎とし、基礎相互はステンレス綱で緊結した。柱脚との接続はアンカーボルトによった。

②反橋：第99次調査で検出したSX8453である。桁行5間、梁間1間の掘立柱による南北橋で、柱間寸法は桁行中央および両脇間9尺、両端間8.5尺で、梁間9.5尺である。これを北東建物の南に南北に架かる反橋と考えた。反橋とする根拠は、平橋と桁行総長はほぼ同じだが、桁行を5間に分割し柱間を狭くする柱配置が、反橋の曲折点を反映する可能性があると解釈したためである。古代の反橋は現存例がないが、正倉院御物『黒繪山水圖』に描かれており、奈良時代にも反橋が存在したことがわかる。柱は八角形断面で径は6寸、橋の反りはR＝30mとした。基礎は柱穴掘形に埋設したRC造の独立基礎とし、基礎相互は梁間方向は枕で、桁行方向は見え隠れとなることからステンレスプレートを用いて緊結した。柱脚との接続は柱脚根元に貫を通し、それを柱両側の基礎に緊結してある枕にとりつけた。

③南北掘立柱塀：第120次調査で検出したSA9289、SA9320Bである(『年報1980』)。両掘立柱塀は庭園の西を区画する施設であり、南端は南面大垣にとりつく。全長は東の塀SA9289で16間(48.15m)、西の塀SA9320Bで13間(39.15m)、柱間寸法はいずれも10尺等間で、柱径は出土柱根から1尺とした。構造形式は伊勢神宮内宮板垣にならい、頭貫上に笠木をのせた形式の板塀とする。柱間には中束をいれ、壁体は横板落込み式とした。棟高は10尺である。扉口は庭園内遊歩者の動線や視線などを考慮して、東の塀では南端から2間目と11間目、西の塀では同じく8間目と10間目とした。　(小野健吉・西山和宏)

宮内省全景（西南よりみる）

3．宮内省築地塀および南門の復原事業

昨年度の築地塀版築部分の施工にひき続き、今年度は築地塀の屋根部分と南門の施工をおこない、両端部をのぞいて南面部分を完成させた。南門復原にあたっての建築的な考察と整備方針は、前年度に述べたとおりである。門、築地塀ともに施工の仕様はさきに復原した北面にならったが、築地塀の版築については、新たな実験的要素を加えている。ひとつは、地下からあがる水分に対して適度な遮湿性をもたせるため、一部をのぞいて築地底部の両側へ幅0.5mにアスファルト舗装用遮水層のシールコートをほどこしたことである。もう一点は、版築の施工性、仕上がり、耐久性などを探るために、築土の配合を築地塀の各間によって変えたことである。今後、長期にわたって観察していく予定である。　(木村　勉)

ハーフタイムMEMO

◆おめでとうございます！

・山中敏史さん(埋蔵文化財センター)は、「古代官衙に関する考古学的研究」により、第9回浜田青陵賞を受賞されました。

・光谷拓実さん(埋蔵文化財センター)は、「樹木年輪による年代測定法」の完成により、第31回吉川英治文化賞を受賞されました。

・舘野和己さん(平城宮跡発掘調査部)は、論文「日本古代の交通と社会」によって、京都大学から博士（文学）の学位を授与されました。

・肥塚隆保さん(埋蔵文化財センター)は、論文「日本で出土した古代ガラスの歴史的変遷に関する科学的研究」により、東京芸術大学から博士（美術）の学位を授与されました。

◆所員の出版物アラカルト

至文堂の「日本の美術」シリーズから、金子裕之『まじないの世界Ⅰ』、巽淳一郎『まじないの世界Ⅱ』、岩永省三『弥生時代の装身具』、町田章『古墳時代の装身具』など、所員の著作が続々と刊行されています。そのほか、以下のような著作が刊行されました。

・金子裕之『木簡は語る　歴史発掘12』講談社、1996年5月

・岩永省三『金属器登場　歴史発掘7』講談社、1997年1月

・町田章（編）『考古学による日本歴史5　政治』雄山閣、1996年11月

・田中琢（編）『古都発掘』岩波新書、1996年11月

・田中琢(共編)『新版角川日本史辞典』角川書店、1996年11月

4．第1次大極殿の基本設計と構造実験

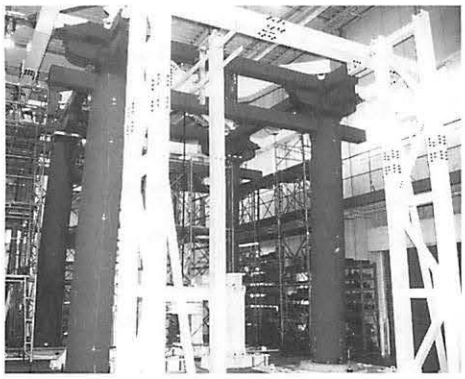
基本設計と構造実験　前年度の成果をふまえて基本設計全体計画の見直しをはかり、設計最終年となる本年度におこなうべき調査検討項目を定めた。今後、具体的な実施計画をすすめるにあたっての検討材料となる市場調査、仮設計画と防災計画の検討、原案に基づく構造実験、原案の構造チェックと問題点の指摘、補強案の検討などである(表参照)。設計及び構造実験を㈶文化財建造物保存技術協会に委託し、実験は農林水産省森林総合研究所、㈶日本住宅・木材技術センターの協力を得た。

基本設計における原案検討の成果と課題　とくに耐震対策面から、実施の構造・工法にふたつの方向が考えられた。ひとつは従来の耐震工法である。吹き放ちとなっている正面の主要な独立柱を鉄骨に置き換え、残る三面の壁は金属板併用の積層耐震壁とし、さらに全体的に重度の補強が必要とされた。もうひとつは基礎部分に免震装置を採用する方法である。この場合はおおむね原案の木構造が保たれ、補強も前者に比べて軽度化が可能との結論に至った。大極殿復原の根本方針は当時の建築そのものの再現をめざすものである。本来の構造形式による古代建築を計画し、そのうえで、避けては通れない現代建築としての安全対策を、基礎の免震装置によってかなりの部分を負わせることができる後者の方向で今後の設計をすすめることとした。

ただし、原案には細部に構造や納まりの問題点、力学上からの弱点などもあることが同時に指摘された。尾垂

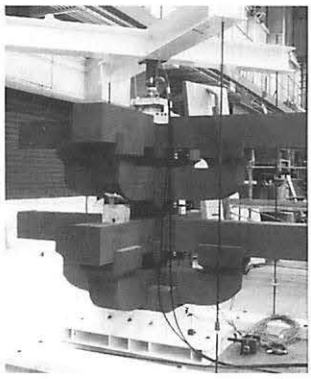
表　平成8年度第1次大極殿基本設計成果概要

項　　目	目　　的	検　　証	結　　果
市場調査	石材・木材・瓦等の市場動向を調査し材料入手の可能性、状況をさぐる。	各組合、林野庁等に問い合わせ。	・石材：規格外の巨石は多数の入手が困難。 ・木材：蓄積量はあるが、短期に大量入手は不可能。計画購入が必要。
仮設計画	問題点のあらい出し。①計画の基礎資料の作成　②遺構の保存対策評定に対する準備・検討。	工事にともなう計画。	背後が狭く、素屋根工法の検討が必要。搬入道路の検討。環境調査が必要。
防災計画		現在の復原のみでは用途が特定されないので、法的拘束は必要なし。	自主的計画が必要。 今後、活用にともなう検討が必要。
構造実験　実大実験体による耐力実験	伝統的木組がもっている耐力の測定。	実大試験体によって耐力実験を行い、基礎データを得る。	期待していた耐力の確認。ねばり強い復元力をもっている。はじめてこの種の構造の力の伝達等のデータも得た。
新工法の開発	接合部のボルトによる断面欠損を減らすためのカーボン繊維による補強。	実験によって破壊状況や耐力等のデータを得る。	想定耐力を得、木材の損傷も少なくできる。有効利用が可能。
材料試験	材料を選択することによって農林規格を上回る耐力を得れば採用したい。	実験によって確実なデータを得る。	想定している桧材がもっている耐力は、農林規格より高く、その値の採用を検討。
地盤の振動調査	長周期の振動特性と深層部分の地質構造の解明・把握。	地下100mでの地震計の設置。	計測中。
原案の構造チェック・構造計画の検討 (構造診断・風洞実験等のデータの追加)	H7年度の設計に基づく構造的問題点、対応策をさぐる。	全体のバランス的な概略的構造解析。	・原案の弱点、方針の検討と補強案 ・免新装置の有効性



架構の実大実験による耐力試験

同左 頂部組物部分



組物のみ全体の実大実験

木の断面不足により軒が垂れる、母屋と庇の柱頂を繋ぐ組物形式や柱位置にずれのある上・下層の軸組は力の伝達が著しく不安定、屋根荷重が小屋梁や虹梁にかかり変形が生じやすいなどの点である。今後、これらを建築歴史的な構造技法面から再検討することにした。

（木村　勉）

5．施設整備その他

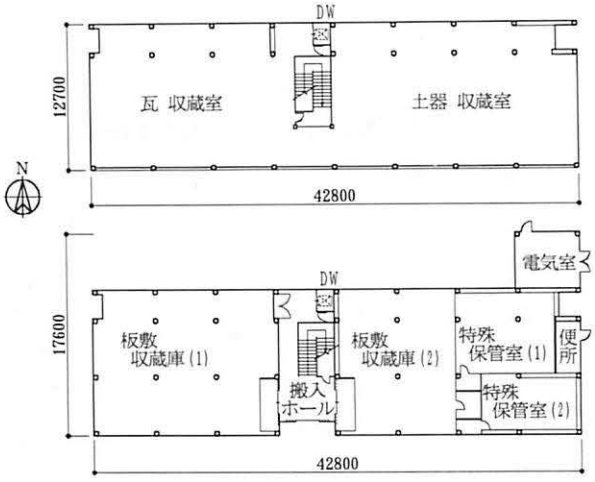
平城宮跡通信線改修工事　平城宮跡における通信（防災・防犯・情報）システムは老朽化による通信障害が頻発しており、緊急時に支障を及ぼす恐れがあるため改修をおこなった。平城宮跡通信システムは宮跡内の施設拠点となる資料館地区・覆屋地区と今回整備をおこなった東院地区を地中埋設線にて本庁舎へ接続し集中管理する計画である。朱雀門地区については、鉄道線が障害となるため、別途電話回線を介して本庁舎に接続する。本工事においては、遺構保護と配線保護の両面からセラミック製多孔陶管を敷設し、このなかに通信システム配線と電力供給配線を集約設置した。

本庁舎漏水防止等工事　本庁舎は昭和39年に建設され、その後昭和53年に改修工事が施されているが、その改修から17年が経過しており、経年劣化による損傷は建物全体におよんでいる。とくに建物南面斜路部分外壁の損傷がいちじるしく、漏水による内装材剥離等を生じている。これは、外壁仕上げ吹付材の劣化およびモルタル層のひび割れ・浮きに起因しているものであり、本工事において、外壁の漏水防止および内装改修をおこなった。改修工法は、周辺研究・研修施設への騒音・塵埃等の影響を考慮し決定した。

外壁：モルタル層のひび割れ部改修〔ひび割れ部カット工法〕
　　Uカット、シリコン系シーリング材充塡
外壁：モルタル層の浮き部改修〔浮き部アンカーピンニング工法〕
　　ステンレスアンカーピン　エポキシ樹脂注入
外壁：仕上げ材〔外壁塗替え工法〕
　　高圧洗浄、可とう形薄塗材（弾性リシン）
内装：床　ビニル床シートノンスリップ形
　　壁天井　合成樹脂エマルションペイント

飛鳥資料館第2展示室改修工事　第2展示室は山田寺回廊再現展示室として計画したが、ドーム状曲面天井のため残響過多による音響障害が生じていたので、天井・壁仕上げを改修し吸音処置を施した。空室の状態で2.5～3秒程度であった残響時間を、1.9秒程度に抑制した。

天井：ロックウール吸音板　　壁：ロックウール吸音板



飛鳥藤原宮跡発掘調査部第2収蔵庫平面図
1階平面図（下）　2階平面図（上）

飛鳥藤原宮跡発掘調査部第2収蔵庫新営工事　発掘調査の進展にともない出土遺物がいちじるしく増加したため収蔵庫を増築した(上図参照)。平成7年度現在において出土遺物量は、32,600箱に及んでいる。全体計画では、延べ床面積2,430㎡、収蔵面積2,218㎡(収蔵量26,600箱)を計画していたが、平成7年度の補正予算によって、全体計画の約半分にあたる延べ床面積1,101㎡、収蔵面積938㎡（収蔵量11,300箱）が竣工した。これにより、現在未収蔵の4,760箱をおさめるだけでなく、今後約3年分の収蔵が可能となる。建物外観・形状・仕上は、周辺既存建物との景観調和を基本に、また、平面配置・利用動線・内部仕上仕様等は、効率的運用を考慮した。

◆工事概要
鉄筋コンクリート造2階建　延べ床面積：1,101㎡建築面積：564㎡
構造形式：ラーメン構造・直接基礎
◆外部仕上
屋根：瓦葺き　　外壁：中空押出成形セメント版外装薄塗材E
せっ器質タイル100角張り　柱型・梁型コンクリート打放
外装薄塗材E・アルミニウム製建具
◆内部主要諸室仕上
板敷収蔵室：床天然木化粧合板　壁コンクリート打放撥水剤
天井軽量骨材吹付
特殊保管室：床・壁杉板張り　天井特殊合板張り
搬入ホール・階段：床磁器質タイル200角張り
壁せっ器質タイル100角張り　モルタル塗内装薄塗材E

平城宮跡第3・4収蔵庫屋根改修工事　第3収蔵庫は昭和50年に建設され20年が、第4収蔵庫は18年が経過しており、鉄骨造鉄板葺であることから劣化が進んでいる。とくに屋根の損傷がいちじるしく、漏水により収蔵に支障をきたしているため、平成7年度補正予算で改修をおこなった。工法はカバー工法とし、既設屋根鋼板のうえに屋根用折板（フッ素樹脂塗装鋼板）葺きとした。

（今西康益・栗林貞弘・上垣内茂樹）

飛鳥資料館特別展と山田寺回廊再現

◆春期特別展示「山田寺東回廊再現にむけて」

展示は1996年４月16日～５月26日の期間に実施した。山田寺の継続的調査は1976年に始まり、塔跡から金堂、講堂跡と進行、1982年東回廊部を発掘したところ、回廊の建物本体が、横倒しに地中に埋もれた状態で姿をあらわした。回廊は東から西にむかって倒れ、そのまま粘土と砂の層に封印されて、奇跡的に1000年以上も地中に保存されたもので、最初期の日本仏教寺院の貴重な実物資料となる。その後の数次にわたる発掘作業の結果、1000点以上の建築部材が出土したが、すべての部材は長い年月のあいだに、脆弱になり多量の水分を含んで、このまま乾燥すれば、収縮、変形して原形を失う状態になっていた。貴重な資料を後世に伝え、研究資料として活用するためには、科学的保存処置が必要とされた。PEGを含浸する処理には10年以上の歳月が費やされ、主要な部材の保存処置は1995年になって、ようやく完成する。保存処理の終わった部材は、飛鳥資料館で組立て、地上に建っていた姿を再現する計画があり、その準備作業も含めて、発掘から10余年ぶりに全貌をあらわした山田寺東回廊の部材を、地面に横たわった出土時の状態にならべ、細部の観察が可能なかたちで一般の観覧に供するとともに、回廊発掘調査の経緯を振り返る展示をおこなった。

◆秋期特別展示「斉明紀」

展示は1996年10月８日～11月24日の期間で実施した。斉明天皇の治世は、大化の改新（乙巳の変）後の飛鳥の政治制度の大きな変換点となる時代だった。同時に国内的には阿倍比羅夫の遠征の記録が示すように、東北地方の経営が精力的に進められていく。国際情勢も、唐、新羅の勢力に対抗して百済を救援しようとする動きなどにみられるような、激動のさなかにあった。

飛鳥の地には、板蓋宮、饗宴の広場とみられる石神遺跡、わが国最初の水時計の遺構・水落遺跡、両槻宮との関連が注目される酒船石周辺遺跡など、斉明天皇にゆかりが深い遺跡が数多く残されている。この展示では、こういった飛鳥の遺跡のいくつかを取り上げ、その意味するところを考えるとともに、遺跡や出土遺物を通して、この変動と改革の時代の雰囲気を再現する展示を試みた。

◆山田寺東回廊再現

回廊は、資料館第２展示室の常設展示として再現された。全長で87ｍ、23間あった東回廊のうち、部材の残りが最も良好だった、北から数えて13・14・15間目の３間分を再現展示している。この部分では、柱・連子窓・頭貫などの軸部は、部材がよく残っていて、展示は当初の形式をほぼ完全に復原している（口絵参照）。虹梁から上の架構部については、部分的に残された資料から、想定復原をおこなって新材におきかえている。PEGをしみこませた部材は非常に重く、本来の強度も失われている。一点一点の部材は鋼鉄の枠からのばした腕でささえ、上部の加重をうけない形にする必要があり、連子側柱筋内側に設けた支持枠はかなり大きなものとせざるを得なかった。柱や束の一部など、まだ科学的な保存処理のすんでいない部位については、将来、処置の完了をまってこの展示に組み込んで、展示の充実をはかっていきたいと考えている。

◆特別講演会その他

特別展示にあわせ、以下の特別講演会を開催した。

・1996年５月11日　工藤圭章「山田寺の建築と保存」
・1996年10月26日　猪熊兼勝「斉明朝の飛鳥」
・1996年11月２日　今泉隆雄「斉明朝の東北」

また、特別展示の図録として、『山田寺』『斉明紀』の２冊の図録を刊行した。このほか、陳列品として「猿石」を購入した。

今年度の総入館者数は85,161人で、その内訳は下表を参照されたい。なお、飛鳥資料館では、インフォメーション・ルームにおいて、観覧者の質問に応じている。

（岩本圭輔）

入館者数（1996.4.1～1997.3.31　開館日数314日）

区　分	個人観覧	団体観覧	有　料	無　料	合　計
一　般	27,012	9,441	79,047	6,114	85,161
高・大生	3,230	8,934			
小・中生	5,891	24,539			
計	36,133	42,914			

◆ほんの紹介◆

『古都発掘 ― 藤原京と平城京 ―』

田中　琢編　（岩波新書468、1996年11月刊、242頁、680円）

岩本　次郎

年報編集者からこの著作紹介の執筆要請をうけたときには、戸惑いを禁じ得なかった。しかし、かつて永年の間、禄を食んでいた者としては、報恩の一端にでもなろうかということと、年報の記録性に鑑みて、研究所員のみの執筆による刊行物を記しておくことは、意義があることと考えた。そこで要請をひきうけたしだいである。まず、本書の構成に触れておこう。テーマに続いて括弧内に内容の要点と執筆者名とを示す。

◆第Ⅰ部　藤原京

1 都市の時代がはじまる（藤原京は大宝令の制定、和同開珎の発行、遣唐使の復活が行われた日本最初の本格的計画都市　黒崎　直）2 造営はいつからか(694年の遷都の約10年前から　黒崎　直）3 宮の位置をめぐる論争（大宮土壇＝藤原宮大極殿説への定着　上原真人）4 大きさはまだ決まらない（岸俊男説と「大藤原京説」　大脇　潔）5 都市名はなかった？(『日本書紀』に「藤原京」の語句なし　橋本義則）6 消えた古墳（横穴墓を壊して造営　次山　淳）7 造営用材の調達（近江の田上山から水路経由　上原真人）8 メインストリート＝朱雀大路(路面幅17.7m、東西両側溝幅7.1m、側溝中心間距離24.8m　深澤芳樹）9 宅地のありさま(右京7条1坊の貴族邸宅　深澤芳樹）10 市は一か所か、二か所か（宮の北側の米川沿いに二か所　西口壽生）11 トイレはどうしていたか（くみ取り式と水洗式　黒崎　直）12 瓦葺きの宮殿(日本最初の宮殿使用　佐川正敏）13 瓦工場の転変（香川県～滋賀県の6地域10か所以上　花谷　浩）14 宮を囲む塀＝大垣（高さ5.5m、総延長約3.7kmの一本柱土壁　黒崎　直）15 木簡が教える門号（宮城十二門の名前確定　西口壽生）16 構造がわかった二つの役所跡（西方官衙馬寮と東方官衙の遺構　松村恵司）17 どんな役所があったか（六官・勝職などから八省へ　古尾谷知浩）18 医療を担当する役所(薬物木簡と内薬司・典薬寮　黒崎　直）19 論争に決着をつけた木簡(評から郡へ　舘野和己）20 皇子の邸宅(天武天皇の諸皇子の宮跡　猪熊兼勝）21 貴人の墓（京の南から南西に配置　金子裕之）22 火葬が始まった理由（任地からの帰葬　上原真人）23 初めての貨幣（無文銀銭→和同開珎・銀銭→和同開珎・銅銭　大脇潔）24 魔除け・招福の銭貨（「富本」銭の意味　金子裕之）25 最古の人形（銅製人形は天武の病気治癒祈願　金子裕之）26 まじない札の発見（陰陽道のルーツを示す　松村恵司）27 藤原京はなぜ短命だったか（遣唐使の最新情報を採用　黒崎　直）28 遣唐使と都の建設(704年帰朝の粟田真人の収穫　佐川正敏）29 新羅の都の場合(山城に囲まれた慶州　千田剛道）30 藤原京焼亡説（『扶桑略記』が伝える焼亡の痕跡は未検出　黒崎　直）31 二つの薬師寺（平城京への移建はなかった　花谷　浩）32 水田耕地と化した都（地中に没した都市計画地割　上原真人)。

◆第Ⅱ部　平城京

1 京域の復原（地表に遺存する都市計画地割町田　章）2「平城」の呼び名（「ナラ」の意味と「平城」の発音　山下信一郎）3 古道と都のメインストリート（路面幅67.5m、東西両側溝幅約7.0m、下ツ道を3倍に拡大　小澤　毅）4 造営に用いた尺度（大尺・1尺＝35.5cmと小尺29.6cmの使用　井上和人）5 宮城十二門をめぐって（東院南門の検出で門号確定か　長尾　充）6 儀式と執務の場＝朝堂院（首都の朝堂は十二堂　金子裕之）7「移転」か「併存」か（内裏は固定、大極殿は移転、朝堂は併存　岩永省三）8 大嘗宮の発見（大嘗会の回数は三度か五度か　山崎信二）9 内裏・曹司・東院（天皇と役人の執務の場の変化と皇太子の居処　金子裕之）10 建築資材のリサイクル（柱・レンガ・瓦の再利用　島田敏男）11 瓦からみた中央と地方（国分寺に平城宮式の軒瓦使用　佐川正敏）12 瓦の発注と納品（3カ月以内に30,000枚の瓦納入　佐川正敏）13「瑠璃瓦」と「玉宮」（施釉の瓦とレンガが東院から約300点　毛利光俊彦）14 技巧に満ちた庭園（日本庭園の出発点を東院にみる　小野健吉）15 貴族と庶民の住宅(身分の差で宅地は60,000㎡から500㎡まで　小林謙一）16 長屋王邸の人びと（妻子・親族・役人・技術者が同居　舘野和己）17 二つの家政機関（長屋王とその父高市皇子の組織か　山下信一郎）18 鼠を進上する木簡（鼠は鷹狩の鷹の餌　森　公章）19 板に描かれた楼閣山水図（中国の山間部の離宮か山荘　浅川滋男）20 市のありさま（東西両市の賑わい　川越俊一）21 土器が教える人びとの生活（地方から漆・塩・鰹の出し汁を運ぶ　玉田芳英）22 贋金工場跡か―都の中の手工業(鋳物・鍛冶工場は宮にも京にも存在　杉山洋）23 宮のなかで働いた職人たち(1日500基製作の百万塔の仕上げ具合　森本　晋）24 出土品からみた国際交流（大安寺出土の腕枕は唐から渡来　千田剛道）25 なぜ銭貨を埋めるのか（子供の成長、建物の安泰を願う土地神への供え物　金子裕之）26 暦をめぐる話(701年に干支から年号へ　古尾谷知浩）27 納税方法を解読する（郷単位で徴税品をとりまとめ、郡と国を経て都へ　寺崎保広）28 役人たちの勤務評定（木簡で判る下級役人の昇級　舘野和己）29 封書のはじまり(木簡にみる二通りの封　渡邊晃宏）30 平城京の街路風景（街路樹は柳・橘・エンジュ、側溝は下水道　小野健吉)。

字数の関係で、要点のまとめ方が恣意的、かつ的外れになったかと懸念するが、お許しいただきたい。各テーマ名から察しえるとおり、叙述は平易であるが、内容を的確に理解するには、相当の予備知識を要するように思われる。そうした意味から、できれば平城京条坊の全体図、天皇家・藤原氏・長屋王家の家系図などが該当箇所の余白にあり、天武朝末年～8世紀に至る略年表と、各項目に関わる参考資料（概報・報告書の類）などが巻末に付載してあればよかったと考える。また、些細なことでは、平城京の5で、『続日本紀』にみえる的門について言及がないこと、同じく22で、贋金工場跡かとすることが気にかかった。ことに後者はその証明は難しいものの、立地からして官営もくは公認の工房であった可能性もあろう。

以上、内容の要点、そして若干のコメントを述べてきたが、本書が藤原京と平城京の今日的課題とその解釈の提示において、高い水準を保ちながら、啓蒙書としての使命を十分に果たしていることは論をまたない。編者ならびに執筆者各位の労を多とするものである。

1952年の創立、そして1959年に平城宮跡、1970年に藤原宮跡、それぞれの本格的発掘調査の開始があり、それ以降、着実に顕著な成果をあげてきた奈良国立文化財研究所が、2002年には創立50周年を迎えることとなる。発掘・研究調査以外にも、国際交流・資料館展示・史跡整備・研修指導など多彩な分野において、業務は今後ますます多忙になることと思われるが、所員各位のますますのご活躍と研究所のさらなる発展を期待して筆をおくこととする。

（甲子園短期大学）

奈良国立
文化財研究所
要　綱

Ⅰ　組織規定

文部省組織令（抜粋）

昭和59年6月28日　政令第227号

第2章　文化庁

第3節　施設等機関

（施設等機関）

第108条　文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国立国語研究所を置く。

2　前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

（中略）

国立文化財研究所

（国立文化財研究所）

第114条　国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2　国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3　国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は文部省令で定める。

文部省設置法施行規則（抜粋）

昭和28年1月13日　文部省令第2号

第5章　文化庁の施設等機関

第4節　国立文化財研究所

第1款　名称及び位置

（名称及び位置）

第116条の9　国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名　　称	位　　置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第2款　奈良国立文化財研究所

（所長）

第123条　奈良国立文化財研究所に、所長を置く。

2　所長は、所務を掌理する。

（内部組織）

第124条　奈良国立文化財研究所に、庶務部、建造物研究室及び歴史研究室並びに平城宮跡発掘調査部及び飛鳥藤原宮跡発掘調査部を置く。

2　前項に定めるもののほか、奈良国立文化財研究所に飛鳥資料館及び埋蔵文化財センターを置く。

（庶務部の分課及び事務）

第125条　庶務部に、次の二課を置く。

一　庶務課

二　会計課

2　庶務課においては、次の事務をつかさどる。

一　職員の人事に関する事務を処理すること。

二　職員の福利厚生に関する事務を処理すること。

三　公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。

四　この研究所の所掌事務に関し、連絡調整すること。

五　この研究所の所掌に係る遺構及び遺物の保全のための警備に関すること。

六　前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

3　会計課においては、次の事務をつかさどる。

一　予算に関する事務を処理すること。

二　経理及び収入の決算その他会計に関する事務を処理すること。

三　行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。

四　庁舎及び設備の維持、管理に関する事務を処理すること。

五　庁内の取締りに関すること。

第126条　削除

（建造物研究室等の事務）

第127条　建造物研究室においては、建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

2　歴史研究室においては、考古及び史跡並びに歴史資料に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

（平城宮跡発掘調査部の六室及び事務）

第128条　平城宮跡発掘調査部に、考古第一調査室、考古第二調査室、考古第三調査室、遺構調査室、計測修景調査室及び史料調査室を置く。

2　前項の各室においては、平城宮跡に関し、次項から第6項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。

3　考古第一調査室、考古第二調査室及び考古第三調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4　遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

5　計測修景調査室においては、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

6　史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部の四室及び事務）

第129条　飛鳥藤原宮跡発掘調査部に考古第一調査室、考古第二

調査室、遺構調査室及び史料調査室を置く。

2　前項の各室においては、藤原宮跡及び飛鳥地域における宮跡その他の遺跡に関し、次項から第5項までに定める事務を処理するほか、その発掘を行う。

3　考古第一調査室及び考古第二調査室においては、別に定めるところにより分担して、遺物（木簡を除く。）の保存整理及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

4　遺構調査室においては、遺構の保存整理及び調査研究、遺構の計測及び修景並びにこれらに関する調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

5　史料調査室においては、木簡の保存整理及び調査研究、史料の収集及び調査研究並びにこれらの結果の公表を行う。

（飛鳥資料館）

第130条　飛鳥資料館においては、飛鳥地域の歴史的意義及び文化財に関し、国民の理解を深めるため、この地域に関する考古資料、歴史資料その他の資料を収集し、保管して公衆の観覧に供し、あわせてこれらに関する調査研究及び事業を行う。

（飛鳥資料館の館長）

第131条　飛鳥資料館に、館長を置く。

2　館長は、館務を掌理する。

（飛鳥資料館の二室及び事務）

第132条　飛鳥資料館に、庶務室及び学芸室を置く。

2　庶務室においては、飛鳥資料館の庶務、会計等に関する事務を処理する。

3　学芸室においては、次の事務をつかさどる。

一　飛鳥地域に関する考古資料、歴史資料、建造物、絵画、彫刻、典籍、古文書その他の資料の収集、保管、展示、模写、模造、写真の作成、調査研究及び解説を行うこと。

二　飛鳥地域に関する図書、写真その他の資料の収集、整理、保管、展示、閲覧及び調査研究を行うこと。

三　飛鳥資料館の事業に関する出版物の編集及び刊行並びに普及宣伝を行うこと。

（埋蔵文化財センター）

第133条　埋蔵文化財センターにおいては、次の事務をつかさどる。

一　埋蔵文化財に関し、調査研究及びその結果の公表を行うこと。

二　埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し、地方公共団体の埋蔵文化財調査関係職員その他の関係者に対して、専門的、技術的に研修を行うこと。

三　埋蔵文化財の調査及び保存整理に関し、地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、専門的、技術的な指導及び助言を行うこと。

四　埋蔵文化財に関する情報資料の作成、収集、整理、保管及び調査研究を行い、並びに地方公共団体の機関その他関係の機関及び団体等の求めに応じ、その利用に供すること。

（埋蔵文化財センターの長）

第134条　埋蔵文化財センターに長を置く。

2　前項の長は、埋蔵文化財センターの事務を掌理する。

（埋蔵文化財センターの内部組織）

第135条　埋蔵文化財センターに、教務室、研究指導部及び情報資料室を置く。

（教務室の事務）

第136条　教務室においては、研修の実施に関する事務を処理するほか、埋蔵文化財センターの庶務に関する事務をつかさどる。

（研究指導部の六室及び事務）

第137条　研究指導部に、考古計画研究室、集落遺跡研究室、発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室を置く。

2　考古計画研究室においては、第133条第1号から第3号までに掲げる事務（他の室の所掌に属するものを除く。）をつかさどる。

3　集落遺跡研究室においては、集落遺跡に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務（発掘技術研究室、遺物処理研究室、測量研究室及び保存工学研究室の所掌に属するものを除く。）をつかさどる。

4　発掘技術研究室においては、遺跡の発掘技術に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

5　遺物処理研究室においては、遺物の処理に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

6　測量研究室においては、埋蔵文化財の測量に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

7　保存工学研究室においては、遺跡の保存整備に関し、第133条第1号から第3号までに掲げる事務をつかさどる。

（情報資料室の事務）

第138条　情報資料室においては、第133条第4号に掲げる事務をつかさどる。

（客員研究員）

第139条　奈良国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。

2　客員研究員は、所長の命を受け、奈良国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。

3　客員研究員は、非常勤とする。

改正

昭和43年6月15日　文部省令第20号／昭和45年4月17日　文部省令第11号／昭和48年4月12日　文部省令第6号／昭和49年4月11日　文部省令第10号／昭和50年4月2日　文部省令第13号／昭和51年5月10日　文部省令第16号／昭和52年4月18日　文部省令第10号／昭和53年4月5日　文部省令第19号／昭和53年9月9日　文部省令第33号／昭和55年4月5日　文部省令第14号／昭和55年6月25日　文部省令第23号／昭和58年10月1日　文部省令第25号／昭和59年6月30日　文部省令第37号／昭和63年4月8日　文部省令第12号

II 職 員

定 員

区分	指定職	行政職(一)	行政職(二)	研究職	計
1996年度	1	22	1	61	85
1997年度	1	22	1	61	85

現在の職員一覧（1997．7．1現在）

（括弧は兼任・併任）

- 所長 田中 琢
  - 庶務部長 原 克己
    - 庶務課長 外間尹隆
      - 課長補佐 野木正博
      - 専門員 西田健三
      - 庶務係長 大川智和
        - 主任 八木清隆
        - 補佐員 大西和子 中川かよ子 中垣睦美 伊藤久美 新宮恵子 福本良子 桝谷香英 中風呂恭代 石川千恵子 奥村 功
    - 会計課長 倉橋睦雄
      - 課長補佐 福井秀昭
      - 課長補佐 渡邊康史
      - 専門職員 今西康益
      - 専門職員 櫻井雅樹
      - 経理係長 河野忠男
        - 主任 林 秀之
        - 補佐員 港 悦子 井野由宜子 中元裕美子
      - 用度係長 中嶋昌士
        - 主任 小野 敦
        - 補佐員 上村敬子 幸田恵里子
        - 車庫長 飯田信男
      - 施設係長 （今西康益）
        - 補佐員 永井和代 山口由佳 中埜 博
        - 技官 栗林貞弘 上垣内茂樹
  - 建造物研究室長 木村 勉
    - 主任研究官 村田健一 （小野健吉） （浅川滋男） （島田敏男） （長尾 充）
  - 歴史研究室長 綾村 宏
    - （深澤芳樹） （寺崎保広） （岩永省三） （森本 晋） （古尾谷知浩）
  - 平城宮跡発掘調査部長 町田 章
    - 考古第一調査室長 小林謙一
      - 技官 加藤真二 （白杵 勲） （高妻洋成）
    - 考古第二調査室長 川越俊一
      - 技官 金田明大 （立木 修） （玉田芳英）
    - 考古第三調査室長 山崎信二
      - 技官 清野孝之 （井上和人） （岩永省三）
    - 遺構調査室長取扱 （町田 章）
      - 技官 箱崎和久 西山和宏 蓮沼麻衣子 （浅川滋男）
    - 計測修景調査室長 高瀬要
      - 技官 内田和伸 平澤 毅 （小野健吉）
    - 史料調査室長 舘野和己
      - 技官 古尾谷知浩 山下信一郎 （渡邊晃宏）
    - 主任研究官 井上和人 立木 修 小野健吉 岩永省三 浅川滋男 白杵 勲 玉田芳英 渡邊晃宏
    - 事務総括 （西田健三）
      - 補佐員 （奥村 功）
    - 専門員 佃 幹雄
    - 専門職員 井上直夫 牛嶋 茂
  - 飛鳥・藤原宮跡発掘調査部長 猪熊兼勝
    - 考古第一調査室長 黒崎 直
      - （深澤芳樹） （花谷 浩） （井上直夫）
    - 考古第二調査室長 松村恵司
      - （千田剛道） （西口壽生） （村上 隆）
    - 遺構調査室長 巽淳一郎
      - 技官 長尾 充 （島田敏男）
    - 史料調査室長 毛利光俊彦
      - （寺崎保広） （佐川正敏） （小澤 毅）
    - 主任研究官 千田剛道 西口壽生 深澤芳樹 村上 隆 寺崎保広 佐川正敏 花谷 浩 小澤 毅 島田敏男
    - 事務総括 （櫻井雅樹）
      - 補佐員 吉岡佐和子 松本 誠 木寅貞志 宮川伴子 伊藤敬太郎 羽鳥幸一 水戸部秀樹 鈴木恵介
  - 飛鳥資料館長取扱 （田中 琢）
    - 庶務室長 左右田進
      - 主 任 中西建夫
        - 補佐員 大谷照子 乾 春雄 藤本 清 森井恵三子 米川まち子
    - 学芸室長 岩本圭輔
      - 技官 次山 淳
    - 主任研究官 杉山 洋
  - 埋蔵文化財センター長 工楽善通
    - 研究指導部長 沢田 正昭
      - 教務室長 井口正美
        - 教務係長 高畑孝雄
          - 補佐員 宍戸雅子
        - 専門職員 （牛嶋 茂）
      - 考古計画研究室長 金子裕之
        - 補佐員 岩永恵子
      - 集落遺跡研究室長 山中敏史
      - 発掘技術研究室長 光谷拓実
        - （松井 章）
      - 遺物処理研究室長 肥塚隆保
        - （高妻洋成）
      - 測量研究室長 西村 康
        - （松井 章）
      - 保存工学研究室長 加藤允彦
        - （内田昭人）
      - 主任研究官 内田昭人 松井 章 森本 晋 高妻洋成
    - 情報資料室長 伊東太作
      - 技官 奥村小百合 （森本 晋）

III　施設（1997.3.31現在）

土　地

奈良国立文化財研究所所管	47,890㎡
本庁舎	8,860㎡
飛鳥藤原宮跡発掘調査部	20,515㎡
飛鳥資料館	17,092㎡
郡山宿舎㈡	80㎡
飛鳥資料館宿舎	1,343㎡
文化庁所管（関係分）	1,451,058㎡
平城宮跡地区	1,085,675㎡
藤原宮跡地区	360,342㎡
飛鳥稲淵宮殿跡地区	5,041㎡

建　物

庁舎　35,584㎡

区　分	本庁舎	平城	藤原	飛鳥資料館	藤原宮跡	計
事務室	646	176	197	108		1,127
研究・整理室	1,417	2,465	1,205	125		5,212
資料・図書室	1,021		383	131		1,535
会議室	338		129	49		516
講　堂		538	210	132		880
展示室		864	254	1,361		2,479
写真室		411	149	78		638
復原建物		834				834
遺構展示室		1,563				1,563
車　庫	84	608	352	94		1,138
倉庫・収蔵庫	133	7,409	2,979	696		11,217
研修棟	1,416					1,416
その他	1,666	2,052	1,669	1,606	36	7,029
計	6,721	16,920	7,527	4,380	36	35,584

宿舎等　重要文化財旧米谷家住宅　213㎡
飛鳥資料館宿舎　225㎡

IV　これまでの刊行物（括弧内は刊行年度）

奈良国立文化財研究所学報

第1冊　仏師運慶の研究（1954）
第2冊　修学院離宮の復原的研究（1954）
第3冊　文化史論叢（1955）
第4冊　奈良時代僧房の研究（1956）
第5冊　飛鳥寺発掘調査報告（1957）
第6冊　中世庭園文化史（1958）
第7冊　興福寺食堂発掘調査報告（1958）
第8冊　文化史論叢Ⅰ（1959）
第9冊　川原寺発掘調査報告（1959）
第10冊　平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告（1960）
第11冊　院の御所と御堂―院家建築の研究―（1961）
第12冊　巧匠阿弥陀仏快慶（1962）
第13冊　寝殿造系庭園の立地的考察（1962）
第14冊　唐招提寺蔵「レース」と「金亀舎利塔」に関する研究（1962）
第15冊　平城宮発掘調査報告Ⅱ　官衙地域の調査（1962）
第16冊　平城宮発掘調査報告Ⅲ　内裏地域の調査（1963）
第17冊　平城宮発掘調査報告Ⅳ　官衙地域の調査（1965）
第18冊　小堀遠州の作事（1965）
第19冊　藤原氏の氏寺とその院家（1967）
第20冊　名物裂の成立（1969）
第21冊　研究論集Ⅰ（1971）
第22冊　研究論集Ⅱ（1973）
第23冊　平城宮発掘調査報告Ⅵ　平城京左京一条三坊の調査（1974）
第24冊　高山―町並調査報告―（1974）
第25冊　平城京左京三条二坊（1975）
第26冊　平城宮発掘調査報告Ⅶ（1975）
第27冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ（1975）
第28冊　研究論集Ⅲ（1975）
第29冊　木曽奈良井―町並調査報告―（1975）
第30冊　五條―町並調査の記録―（1976）
第31冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ（1977）
第32冊　研究論集Ⅳ（1977）
第33冊　イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告（1977）
第34冊　平城宮発掘調査報告Ⅸ（1977）
第35冊　研究論集Ⅴ（1978）
第36冊　平城宮整備調査報告Ⅰ（1978）
第37冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ（1979）
第38冊　研究論集Ⅵ（1979）
第39冊　平城宮発掘調査報告Ⅹ（1980）
第40冊　平城宮発掘調査報告Ⅺ（1981）
第41冊　研究論集Ⅶ（1984）
第42冊　平城宮発掘調査報告Ⅻ（1984）
第43冊　日本における近世民家（農家）の系統的発展（1984）
第44冊　平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告（1985）
第45冊　薬師寺発掘調査報告（1986）
第46冊　平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書（1988）
第47冊　研究論集Ⅷ（1988）
第48冊　年輪に歴史を読む―日本における古年輪学の成立―（1990）
第49冊　研究論集Ⅸ（1990）
第50冊　平城宮跡発掘調査報告XIII（1990）
第51冊　平城宮跡発掘調査報告XIV（1992）
第52冊　西隆寺発掘調査報告書（1992）
第53冊　平城宮朱雀門の復原的研究（1993）

第54冊　平城京左京二条二坊・三条二坊—長屋王邸・藤原麻呂邸—発掘調査報告（1994）
第55冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ—飛鳥水落遺跡の調査—（1994）

奈良国立文化財研究所史料

第1冊　南無阿弥陀仏作善集（複製）（1954）
第2冊　西大寺叡尊伝記集成（1955）
第3冊　仁和寺史料　寺誌編1（1963）
第4冊　俊乗坊重源史料集成（1964）
第5冊　平城宮木簡1　図版（1966）
第6冊　仁和寺史料　寺誌編2（1967）
第5冊　平城宮木簡1　解説（別冊）（1969）
第7冊　唐招提寺史料1（1970）
第8冊　平城宮木簡2　図版・解説（1974）
第9冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅰ（1974）
第10冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅱ（1975）
第11冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅲ（1976）
第12冊　藤原宮木簡1　図版・解説（1977）
第13冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅳ（1977）
第14冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅴ（1978）
第15冊　東大寺文書目録第1巻（1978）
第16冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅵ（1979）
第17冊　平城宮木簡3　図版・解説（1979）
第18冊　藤原宮木簡2　図版・解説（1979）
第19冊　東大寺文書目録第2巻（1979）
第20冊　日本美術院彫刻等修理記録Ⅶ（1980）
第21冊　東大寺文書目録第3巻（1980）
第22冊　七大寺巡礼私記（1981）
第23冊　東大寺文書目録第4巻（1981）
第24冊　東大寺文書目録第5巻（1982）
第25冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅰ（1982）
第26冊　東大寺文書目録第6巻（1983）
第27冊　木器集成図録—近畿古代篇—（1984）
第28冊　平城宮木簡4　図版・解説（1985）
第29冊　興福寺典籍文書目録第1巻（1985）
第30冊　山内清男考古資料1（1988）
第31冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅱ（1988）
第32冊　山内清男考古資料2（1989）
第33冊　山内清男考古資料3（1991）
第34冊　山内清男考古資料4（1991）
第35冊　山内清男考古資料5（1991）
第36冊　木器集成図録—近畿原始篇—（1992）
第37冊　梵鐘実測図集成（上）（1992）
第38冊　梵鐘実測図集成（下）（1993）
第39冊　山内清男考古資料6（1993）
第40冊　山田寺出土建築部材集成（1994）
第41冊　平城京木簡1　図版・解説（1994）
第42冊　平城宮木簡5　図版・解説（1995）
第43冊　山内清男考古資料7（1995）
第44冊　興福寺典籍文書目録第2巻（1995）

奈良国立文化財研究所基準資料

第1冊　瓦編1　解説（1973）
第2冊　瓦編2　解説（1974）
第3冊　瓦編3（1975）
第4冊　瓦編4（1976）
第5冊　瓦編5（1976）
第6冊　瓦編6（1978）
第7冊　瓦編7（1979）
第8冊　瓦編8（1980）
第9冊　瓦編9（1983）

飛鳥資料館図録

第1冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏（1976）
第2冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏　銘文篇（1976）
第3冊　日本古代の墓誌（1977）
第4冊　日本古代の墓誌　銘文篇（1978）
第5冊　古代の誕生仏（1978）
第6冊　飛鳥時代の古墳—高松塚とその周辺—（1979）
第7冊　日本古代の鴟尾（1980）
第8冊　山田寺展（1981）
第9冊　高松塚拾年（1982）
第10冊　渡来人の寺—檜隈寺と坂田寺—（1983）
第11冊　飛鳥の水時計（1983）
第12冊　小建築の世界—埴輪から瓦塔まで—（1983）
第13冊　藤原宮—半世紀にわたる調査と研究—（1984）
第14冊　日本と韓国の塑像（1985）
第15冊　飛鳥寺（1985）
第16冊　飛鳥の石造物（1986）
第17冊　萬葉乃衣食住（1987）
第18冊　壬申の乱（1987）
第19冊　古墳を科学する（1988）
第20冊　聖徳太子の世界（1988）
第21冊　仏舎利埋納（1989）
第22冊　法隆寺金堂壁画飛天（1989）
第23冊　日本書紀を掘る（1990）
第24冊　飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察（1991）
第25冊　飛鳥の源流（1991）
第26冊　飛鳥の工房（1992）
第27冊　古代の形（1994）
第28冊　蘇我三代（1995）

V　1996年度の動向

予　算　(千円)

人件費	730,375
運営費	1,200,319
事業管理	11,146
一般研究	63,900
特別研究	286,280
発掘調査	563,301
宮跡整備管理	73,736
飛鳥資料館運営	52,252
埋蔵文化財センター運営	73,257
本庁舎維持管理等経費	52,970
飛鳥藤原宮跡発掘調査部運営	23,477
施設費	1,562,028
平城宮跡等整備費	1,550,130
各所修繕費	11,898
合　計	3,492,722

主要工事　(千円)

(1)平城宮跡地等整備費

朱雀門復原平成8年度工事	660,400
東院庭園復原工事	516,600
東院正殿復原平成8年度工事	14,111
宮内省築地等復原平成8年度工事	60,461
通信線改修等工事	22,660

(2)施設整備費

＊藤原宮収蔵庫新築工事	361,365
＊平城京収蔵庫屋根改修工事	71,070

(3)その他(各所修繕費、国有文化財保存整備費)

特別史跡山田寺跡整備平成8年度工事	60,358
本庁舎漏水防止等工事	7,725

＊印は建設省支出委任工事

協力事業等

文化庁では、1971年度から特別史跡藤原宮跡の国有化を進めており、1972年度から当研究所が文化庁から支出委任を受けて買収事務を担当している。

1996年度の状況は下記のとおりである。

区　分	面　積(m²)	金　額(円)
1996年度	5,297.98	295,188,931
国有地合計	360,557.99	8,519,564,740

人事異動(1996.4.1～1997.3.31)

4月1日

飛鳥資料館庶務室長に昇任	左右田　進
庶務部庶務課課長補佐に昇任	野木　正博
庶務部庶務課庶務係長に昇任	大川　智和
庶務部会計課専門職員に昇任	今西　康益
庶務部会計課用度係用度主任に昇任	小野　敦
庶務部会計課長に転任	倉橋　睦雄
平城宮跡発掘調査部主任研究官に転任	井上　和人
平城宮跡発掘調査部考古第二調査室長に配置換	川越　俊一
飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室長に配置換	毛利光俊彦
飛鳥藤原宮跡発掘調査部主任研究官に配置換	小澤　毅
文部技官（平城宮跡発掘調査部考古第二調査室）に採用	金田　明大
文部技官（平城宮跡発掘調査部考古第三調査室）に採用	清野　孝之
文部技官（平城宮跡発掘調査部遺構調査室）に採用	西山　和宏
事務補佐員（庶務部庶務課）に採用	伊藤　久美
研究補佐員（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）に採用	水戸部秀樹
国立極地研究所事業部事業課長に転任	萩原　寿郁
大阪教育大学学生部入学主幹に転任	家村　庸男
京都大学学生課課長補佐に転任	田中日出男
大阪大学総務部人事課専門職員に転任	金野　忠司
大阪大学医学部附属病院管理課施設掛長に転任	笹松　保
京都大学超高層電波研究センター事務掛主任に転任	森　昭彦
京都大学文学部教授に転任	上原　真人
文化庁文化財保護部記念物課に転任	岸本　直文

7月1日

平城宮跡発掘調査部主任研究官に昇任	臼杵　勲
飛鳥藤原発掘調査部主任研究官に昇任	藤田　盟児

8月31日

辞職	藤田　盟児

10月1日

飛鳥藤原宮跡発掘調査部遺構調査室に配置換	長尾　充

12月1日

庶務部会計課経理係長に昇任	河野　忠男
京都大学胸部疾患研究所業務課収入掛長に転任	市原　稔三

12月26日

辞職	森本はぎ子

1月1日

事務補佐員（庶務部会計課）に採用	中元裕美子

3月31日

退職	荒木　浩司

刊行物

学報　第56冊　平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告

史料　第45冊　北浦定政関係資料
　　第46冊　山内清男考古資料８
飛鳥資料館図録　第29冊　斉明紀
報告書等　1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報
飛鳥・藤原宮発掘調査概報26
平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧
平城宮発掘調査出土木簡概報32
飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報12
飛鳥資料館カタログ第11冊　山田寺
埋蔵文化財ニュース82
埋蔵文化財ニュース83
埋蔵文化財ニュース84
アンコール文化遺産保護共同研究報告書Ⅰ

平城宮跡資料館・遺構展示館見学者

区　分	平城宮跡資料館	遺構展示館	計
1996年度	61,506	64,645	126,151
累計	1,479,442	1,825,626	3,305,068

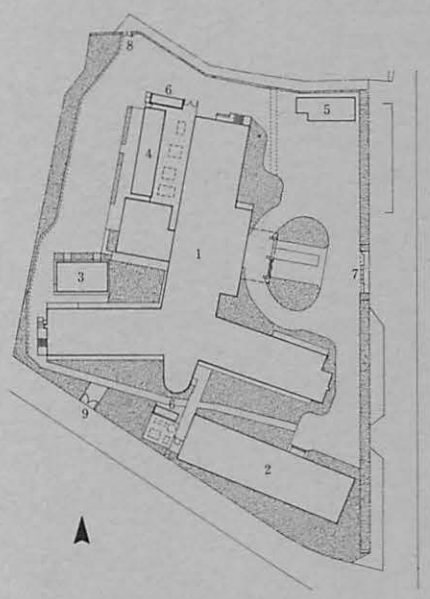
資料館は1970年度、遺構展示館は1963年度以降の累計

図書・写真資料

図書：165,668冊　　(1997.3.31現在)

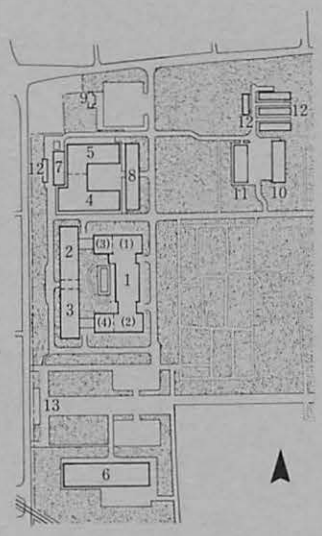
区　分	種　別	購　入	寄　贈	計
1996年度	和漢書	1,465	5,565	7,030
	洋　書	69	37	106
累　計	和漢書	58,235	99,471	157,706
	洋　書	6,013	1,949	7,962

写真：601,463（1996年度末）



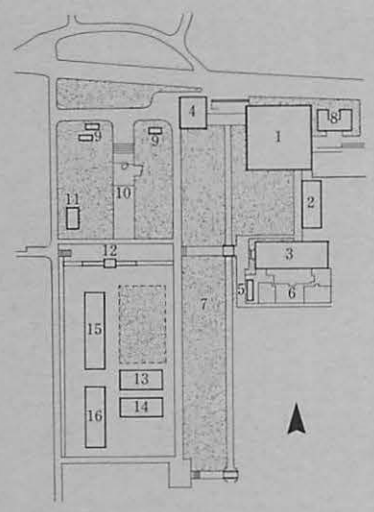
本館配置図

1　本館
　1階　庶務部及び図書資料室
　2階　所長室及び平城宮跡発掘調査部
　3階　建造物研究室、歴史研究室及び埋蔵文化財センター
2　埋蔵文化財センター研修棟　　3　研修棟
4　機械棟　　5　車庫　　6　自転車置場
7　正門　　8　通用門　　9　非常口



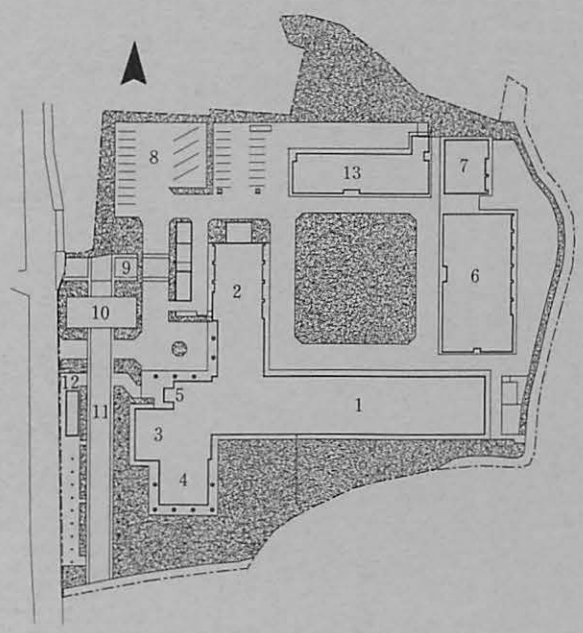
平城宮跡資料館配置図

1　平城宮跡資料館
　(1)　展示室　(3)　準備室
　(2)　講堂　　(4)　写場
2　第1収蔵庫
3　第2収蔵庫
4　第3収蔵庫
5　第4収蔵庫
6　第5収蔵庫
7　大型遺物処理棟
8　遺物解析処理棟
9　便所
10　整備棟
11　資材保管加工棟
12　収蔵庫
13　佐伯門跡



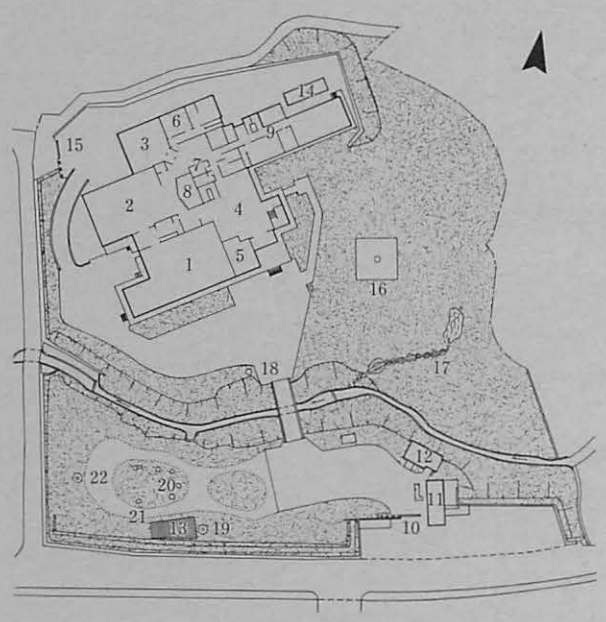
平城宮跡遺構展示館配置図

1　遺構展示館　　2　展示館
3　遺構展示館　　4　管理棟
5　築地塀復原　　6　塼積基壇復原
7　東大溝復原　　8　便所
9　パーゴラ　　10　案内広場
11　防災設備室
12　宮内省北門・築地塀復原
13　宮内省復原建物（南殿）
14　宮内省復原建物（南殿第2殿）
15　宮内省復原建物（西北殿）
16　宮内省復原建物（西南殿）



飛鳥藤原宮跡発掘調査部配置図

1　整備研究棟　　2　管理棟
3　展示室　　4　講堂
5　入口　　6　第1収蔵庫
7　遺物処理棟　　8　駐車場
9　六条条間路跡　　10　建物跡
11　東三坊坊間路跡　　12　自転車置場
13　第2収蔵庫(新設)



飛鳥資料館配置図

1　第1展示室　　2　第2展示室　　3　講堂
4　ロビー　　5　閲覧室・売店　　6　会議室
7　便所　　8　光庭　　9　管理棟
10　正門　　11　売札所　　12　屋外展示解説室
13　パーゴラ　　14　機械室　　15　通用門
16　須弥山石　　17　酒船石　　18　石人像
19　山田寺塔心礎　　20　猿石　　21　人頭石
22　法輪寺塔心礎

奈良国立文化財研究所
〒630　奈良市二条町2丁目9-1
Nara National Cultural Properties Research Institute
2-9-1, Nijo-cho, Nara-city, 630, JAPAN